館蔵資料調査研究報告書６

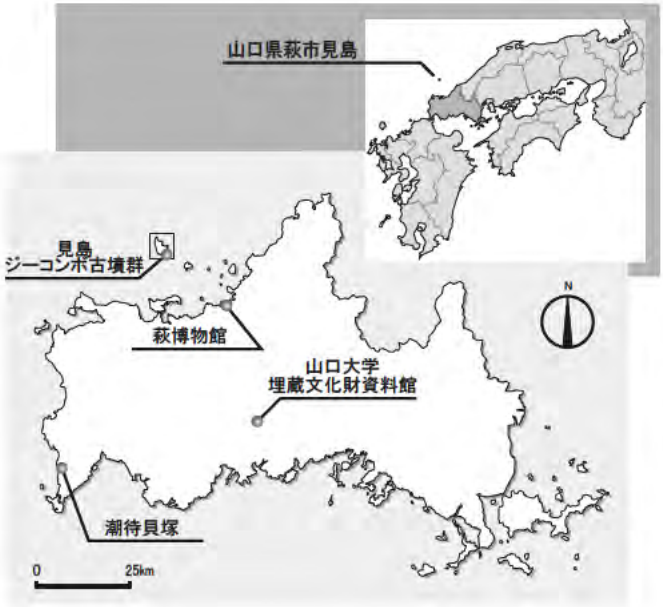
見島ジーコンボ古墳群 第123号墳・第152号墳（再）・西部域

出土資料調査報告

2017

山口大学埋蔵文化財資料館

見島ジーコンボ古墳群 第123号墳・第152号墳(再)・西部域
出土資料調査報告



2017

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学が所在する県内五つの地区（山口市：吉田地区・白石地区、宇部市：小串地区・常盤地区、光市：光地区）は、いずれも遺跡の上に立地しています。埋蔵文化財資料館は、本学の施設拡充等工事により遺跡が破壊される可能性が生じた場合、文化財保護のための発掘調査を実施することを主要業務としていますが、その調査・研究成果を報告書の刊行、実物資料展示、データベースの構築など様々な方法により広く地域社会に公開することも重要な責務と考えています。

さて、当館には上記構内遺跡から出土した資料の他にも、山口県の著名遺跡から出土した資料が数多く収蔵されています。これは主として当館設立以前に本学教員等により調査され、本学各所に収蔵されていたものを継承した資料群です。その中でも、萩市見島所在の国指定史跡「見島ジーコンボ古墳群」出土資料を最重要と位置付け、平成22年度より継続的な調査研究を行い、「館蔵資料調査研究報告書」として刊行しています。

平成28年度は、古墳群西部域の資料調査最終年となることから、第123号墳および古墳群西部域の分布調査により各墳から出土し、当館および萩博物館に収蔵されている資料の調査を実施しました。本書はその調査報告となります。見島ジーコンボ古墳群の分布調査は昭和35年に、第123号墳の現地調査は昭和36年に実施されており、調査後実に半世紀以上もの間、資料の悉皆的な学術公開が行われませんでした。本書を考古学・歴史学・地域史研究等の基礎資料として活用いただければ望外の幸せです。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた萩博物館をはじめ関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年３月

山口大学埋蔵文化財資料館長

根ヶ山　徹

例言

１．本書は、昭和35年(1960)から昭和37年(1962)の3ヶ年、山口県教育委員会および萩市教育委員会の合同により実施された、萩市見島に所在する見島ジーコンボ古墳群出土資料の再整理調査報告である。

２．上記の調査で出土した見島ジーコンボ古墳群出土品は、萩博物館（山口県萩市堀内355番地所在）と山口大学埋蔵文化財資料館（山口県山口市吉田1677-1所在）に分有保管されている。

３．見島ジーコンボ古墳群第123・152号墳、西部域出土資料の確認および整理作業は、横山成己（山口大学埋蔵文化財資料館助教）と乃美友香（山口大学事務局情報環境部総務係技術補佐員）が行った。資料の実測、写真撮影、製図・整図は横山が行い、資料の採拓は乃美が行った。なお、萩博物館における資料調査は平成28年５月16日から６月３日にかけて行った。

４．第123・124・142号墳出土の人骨資料について、松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）に鑑定を依頼し、玉稿を賜った。

５．第123号墳出土の貝製品の貝種鑑定について、堀成夫氏（萩博物館）と沖田絵麻氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）に協力いただいた。

６．銅製耳環のＸ線画像について、萩市文化財保護課および（株）吉田生物研究所に提供いただいた。

７．山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の金属器類については、山口大学学術資産継承事業委員会による予算配分を受け、(株)吉田生物研究所に委託し保存処理を行った。

８．本書の執筆編集は横山が行った。

９．本書を作成するにあたり、下記の方々に協力・助言を得ました。記して感謝の意を表します。
沖田 絵麻　柏本 秋生　小林 善也　清水 満幸ほか萩博物館各氏　堀 成夫　松下 孝幸
松下 真実　山口大学情報環境部学術情報課各氏　吉田 浩一　（敬称略・五十音順）

凡例

【見島ジーコンボ古墳群】

１．本書における見島ジーコンボ古墳群の遺構番号は、『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会 1964)で付されたものに準拠している。

２．見島ジーコンボ古墳群の略号を「ＭＪ」で表記している。第123号墳は「ＭＪ123」となる。資料の種別に関しては萩博物館所蔵品の土器類は「Ｈ」、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品の土器類は「Ｙ」、同様に鉄器類は「Ｈi」「Ｙｉ」、銅製品は「Ｈｂｒ」、玉類は「Ｈｂ」、貝製品は「Ｈｓｈ」、石製品は「Ｈｓ」の略号を付して識別している。

３．遺物実測図の縮尺については、以下のように統一した。

土器…1/2または1/3　金属器…1/2　玉類・貝製品・石製品＝1/2

４．遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、金属器

断面白抜き……土師器、玉類、貝製品、石製品

５．土器の色調記号は、主として農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

本文目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境
第1節　地理的環境 …… 1
第2節　歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　第123号墳の調査
第1節　昭和36年の現地調査…… 4
第2節　第124号墳の出土資料 ……11
第3節　小結 ……30

第Ⅲ章　第152号墳出土資料の再調査
第1節　再調査の経緯 ……36
第2節　第152号墳の出土資料 ……36
第3節　小結 ……46

第Ⅳ章　見島ジーコンボ古墳群西部域の出土資料
第1節　資料の由来 ……47
第2節　西部域の出土資料 ……48
第3節　小結 ……56

付篇
山口県萩市ジーコンボ古墳群123・124・142号墳出土の人骨……（松下孝幸・松下真実）……67

挿図目次

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

図1 萩市見島遺跡分布図……3

第Ⅱ章　第123号墳の調査

図2 見島ジーコンボ古墳群分布図 ……5・6

図3 第123号墳石室実測図 ……9

図4 第123号墳石室内出土土器実測図①……13

図5 第123号墳石室内出土土器実測図②……14

図6 第123号墳石室内出土土器実測図③……15

図7 第123号墳石室内出土土器実測図④……16

図8 第123号墳出土地点不明土器実測図……21

図9 第123号墳出土金属器実測図……23

図10 第134号墳出土玉類・貝製品・石製品
実測図 …27

第Ⅲ章　第152号墳出土資料の再調査

図11 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層Ｄ-40㎝」
「Ａ層」出土土器実測図① ……38

図12 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層Ｄ-40㎝」
「Ａ層」出土土器実測図② ……39

図13 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層Ｄ-40㎝」
「Ａ層」出土土器実測図③ ……40

図14 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層Ｄ-40㎝」
「Ａ層」出土土器実測図④ ……41

図15 第152号墳「棺外」出土土器実測図 ……41

第Ⅳ章　見島ジーコンボ古墳群西部域の出土土器

図16 見島ジーコンボ古墳群西部域石室分布図
……49

図17 見島ジーコンボ古墳群
西部域出土土器実測図①……51

図18 見島ジーコンボ古墳群
西部域出土土器実測図②……52

図19 見島ジーコンボ古墳群
西部域出土土器実測図③……53

図20 見島ジーコンボ古墳群
西部域出土土器実測図④……54

図21 見島ジーコンボ古墳群
西部域出土土器実測図⑤……55

図22 見島ジーコンボ古墳群
西部域出土土器実測図⑥……57

図23 見島ジーコンボ古墳群
西部域出土土器実測図⑦……58

付篇　山口県萩市ジーコンボ古墳群123･124･142号墳出土の人骨

図1 萩市見島遺跡分布図 ……68

写真目次

第Ⅱ章　第123号墳の調査

写真1 第123号墳調査前の様子 ……7

写真2 第123号墳石室全景 ……7

写真3 第123号墳石室完掘状況 ……7

写真4 第123号墳現況 ……8

写真5 第123号墳石室内出土土器①……17

写真6 第123号墳石室内出土土器②……18

写真7 第123号墳石室内出土土器③……19

写真8 第123号墳石室内出土土器④……20

写真9 第123号墳出土地点不明土器……21

写真10 第123号墳出土金属器① ……24

写真11 第123号墳出土金属器② ……25

写真12 第123号墳出土金属器Ｘ線画像 ……26

写真13 第123号墳出土玉類・貝製品・石製品
……28

第Ⅲ章　第152号墳出土資料の再調査

写真14 第152号墳出土土器① ……42

写真15 第152号墳出土土器① ……43

第Ⅳ章　見島ジーコンボ古墳群西部域の出土土器

写真16 見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器①
……58

写真17 見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器②
……59

写真18 見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器③
……60

写真19 見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器④
……61

写真20 見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器⑤
……62

表目次

第Ⅱ章　第123号墳の調査

表1 出土遺物(土器)観察表 ……32

表2 出土遺物(鉄製品)観察表 ……34

表3 出土遺物(銅製品)観察表 ……35

表4 出土遺物(玉類)観察表 ……35

表5 出土遺物(貝製品)観察表 ……35

表6 出土遺物(石製品)観察表 ……35

第Ⅲ章　第152号墳出土資料の再調査

表7 出土遺物(土器)観察表 ……44

第Ⅳ章　見島ジーコンボ古墳群西部域の出土資料

表8 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵
見島ジーコンボ古墳群西部域資料 ……47

表9 出土遺物(土器)観察表 ……63

付篇　山口県萩市ジーコンボ古墳群123･124･142号墳出土の人骨

表1 人骨一覧 ……68

表2 ジーコンボ古墳群出土人骨一覧 ……68

第Ⅰ章　遺跡の位置と環境

第1節　地理的環境

萩市見島は、萩市浜崎港から北北西に約46.3㎞離れた日本海中に浮かぶ孤島である。島の平面形態は南を底辺とする不等辺三角形を呈し、南北約4.6㎞、東西約2.5㎞、島周約24.3㎞を測り、総面積はおよそ7.8㎢となる。

見島は火山島であり、地質は玄武岩類、角礫凝灰岩および海岸低地部の沖積層で構成される。島は中央部から西部にかけて高く、現在航空自衛隊見島分屯基地が置かれるイクラゲ山（標高181m）が最高峰となっている。また、瀬高と呼称される中央山地により南北が分断されており、島の南部および北東部に見られる湾入部周域には僅かながら沖積低地が形成されている。それぞれに本村・宇津の集落が発達し、現在でも島への数少ない出入り口として存在する。

これら海岸域にある天然の低地には、島裾を洗う波浪から生じた岩屑が砂礫浜堤や礫浜堤を形成している。見島ジーコンボ古墳群は、島の南岸線東端の晩台山南麓から、本村港の東にある孤立丘高見山の東麓までの間に形成された、東西長約300m、幅約50m～100m、標高約7mの礫浜堤（横浦海岸）に立地している。[註1]

第2項　歴史的環境

1．遺跡の分布状況（図1）

見島に埋存する遺跡の様相については、見島ジーコンボ古墳群以外は全く明らかとなっていないと言っても過言では無い。現在公表されている埋蔵文化財包蔵地の分布についても、山口県教育委員会と萩市教育委員会が昭和35年（1960）から同37年（1962）まで実施した合同調査に負うところが大きい。

見島における踏査は、昭和35年合同調査の9月４日から3日間にかけて実施したとされる。『見島総合学術調査報告』では、その成果として島内の13地点が紹介されている[註2]が、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合すると、「見島小学校々庭付近の遺物包含層」「薬師堂背後の遺物包含層」「見島体育館付近の遺物散布地」が**見島本村遺跡**（図1の**1**）、「本村東区の遺物散布地と包含層」「本村部落の東部の水田」「杉山西南斜面の遺物散布地」が**堅田遺跡**（図1の**2**）、「片尻の遺物散布地」が**片尻遺跡**（図1の**6**）、「草谷の遺物散布地」が**草谷遺跡**（図1の**7**）、「船戸の遺物散布地」が**船戸遺跡**（図1の**9**）、「船見田の遺物散布地」が**船見田遺跡**（図1の**10**）、「大竹の遺物散布地」が**大竹遺跡**（図1の**11**）、「瀬田の石器発見地」が**瀬田遺跡**（図1の**3**）に該当するようである。現在の本村港と本村漁港の間にある小丘で、古く大正5年（1916）に土師器壺2点と硬玉製勾玉1点が出土したとされ[註3]、昭和35年の合同調査においても土師器壺片4点が確認された「宮崎山の遺物散布地」は、その後明確な資料の採取に恵まれなかったのか現在では包蔵地から除外されている。また、合同調査における踏査が見島ジーコンボ古墳群発掘調査の前提としての「見島における居住の時代的上限」「古墳の築造に先行する文化の有無」「当時の地形や島の生産力」「村落の規模とその継続期間」の確認等に目的を置いていたためか、当時既にその位置が推定されていた中世の城館跡である**要害山城跡**（図1の**4**）、**高見山城跡**（図1の**5**）に関して言及されていない。また、平成元年（1989）発行の『萩市史』第2巻では、要害山城跡の北北西約1㎞の丘陵

上に土塁・石垣が見られることから、城跡の存在が指摘されている[註4]（図1の**8**）。

以上、見島において確認されている遺跡の分布状況を概観した。居住に適した低地が狭小である見島においては、工事中の埋蔵文化財の発見もやはり限定的な地域に限られるようであり、昭和30年以降の新知見もほぼ存しない状況と言える。

2．見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島

前述したように、萩市見島においては見島ジーコンボ古墳群以外の遺跡に未だ調査の鍬が入れられていない。そのため、各遺跡で採取された断片的な資料から見島ジーコンボ古墳群造営以前の様相を推し量るほか手段がないようである。

萩市見島発見の先史時代遺物に関しては、平成元年（1989）発行の『萩市史』に詳しい。同書によると、昭和35年（1960）より開始された合同調査の段階では、弥生時代以前に所属する遺物は同年に本村寺山南麓の宅地（図1の**3**）で小学生児童により発見された環状石斧の1点に限られた状態であった[註5]が、昭和45年（1970）に本村の中国電力島内発電所の増築工事にて縄文時代中期に比定される土器片が、昭和59年（1984）には見島小学校南方の水田基盤整備工事にて、遺物包含層と見られる黒褐色粘土層中から縄文時代後晩期の土器片とともに石棒片、打製石斧、石錘、そして環状石斧片などが出土したとされる。両地点とも現在の堅田遺跡（図1の**2**）内に位置しており、見島における人類活動が島南端の沖積平地部において開始されたことを示唆する重要な資料となっている。弥生時代の遺物については、同じく見島小学校南方水田基盤工事で確認された黒褐色粘土層中から弥生時代前・後期の土器片が出土しているが、その総量はさして多くないそうである。古墳時代の遺物も、やはり堅田遺跡を中心に多数の土師器、須恵器が採集されている状況である。昭和35年調査に伴い実施された踏査で、現在見島本村遺跡と命名されている地点で確認された多数の遺物も、主として当時代に所属するものと推される。

上記の資料はいずれも正式な発掘調査を経ずしての採集品であり、遺構の確認がなされていない状況下では見島の先史時代について多くを語り得ない。現状としては、見島では古く縄文時代中期から弥生時代にかけ、本土に面する本村周辺域において少なくとも一時的な人類の上陸活動が行われ、古墳時代に至ると小規模ではあろうが同地域に集落が形成され定住生活が行われたものと推察するに止めたい。

【註】

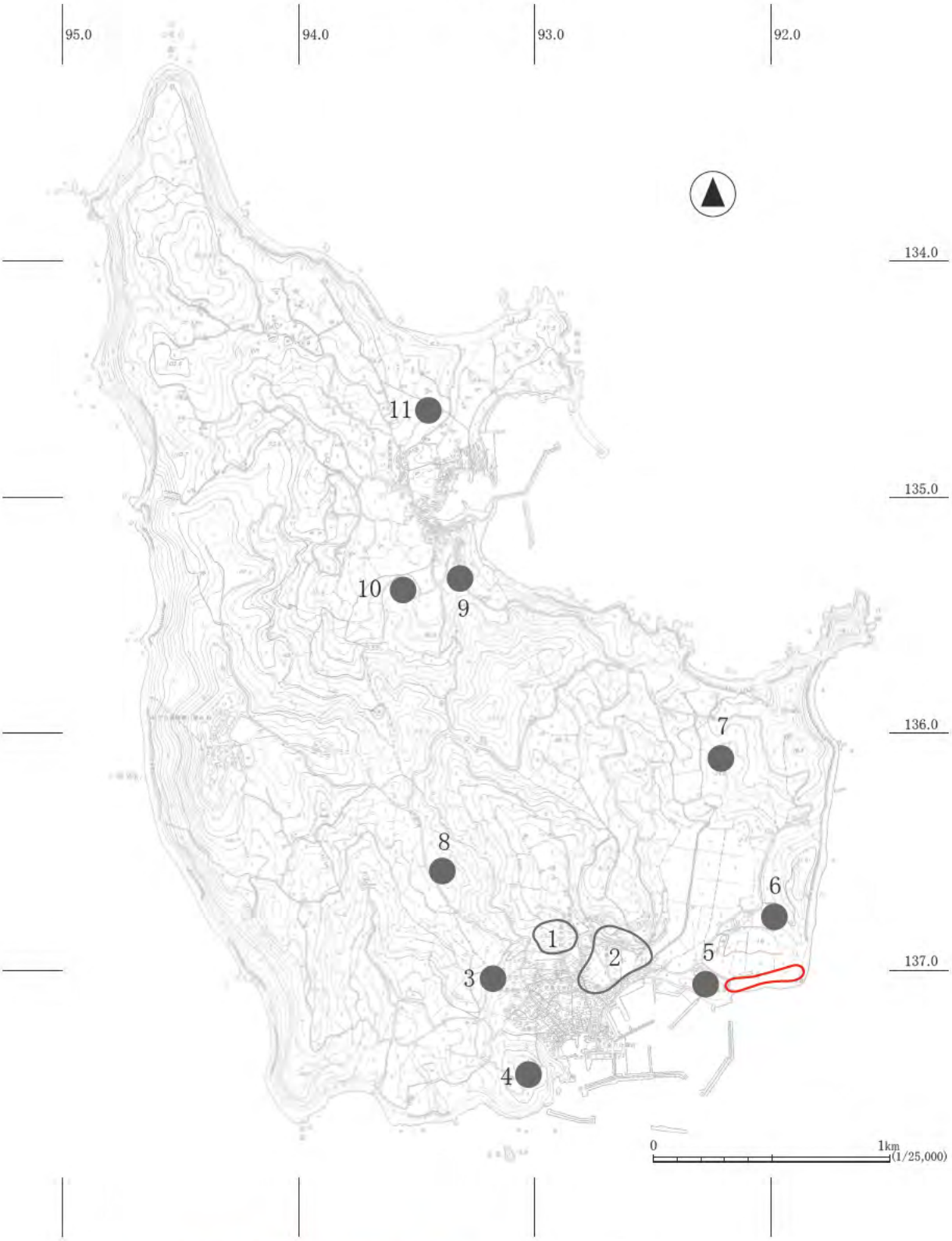
1）地理的環境は斉藤・小野(1964)による。

2）斎藤・小野（1964）の400～402頁

3）ジーコンボ古墳群に関する最初期の報告は大正12年（1923）に三輪善之助氏によってなされている（三輪1923）が、その文中に「古墳」の項目で宮崎山出土遺物が紹介されている。

4）合同調査前年である昭和34年（1959）に発行された『萩市誌』には、明確な位置は示されていないが城山址として高見山城跡の存在が、古城址として要害山城跡の存在が記されている。また平成元年（1989）発行の『萩市史』第2巻（文献10）では、本村北西部のみのぼし山（蓑干山：標高130m）山上に土塁・石垣が構築されていることが指摘され、「みのぼし山城」の仮名が付されているが、埋蔵文化財包蔵地名としては「要害山城跡」が用いられている。

5）大正15年（1926）に実施された山高郷土史研究会による見島の調査報告（匹田ほか1927）には見島小学校敷地（現：見島総合センター敷地）にて採取されたとされる弥生土器が報告されており、本村宮崎山での弥生土器採取にも言及されている。同じく両地について、昭和10年（1935）の山本博氏の報告（山本1935）には土器実測図が付されているが、直ちに「弥生土器」とは判じがたいものであり、現在資料の所在も不明であることから『萩市史』では確実な資料として認めていない。



国指定 史跡 見島ジーコンボ古墳群

1 見島本村遺跡　集落跡（縄文～中世）
2 堅田遺跡　散布地（縄文～古代）
3 瀬田遺跡　散布地（弥生）
4 要害山城跡　城館跡（中世）
5 高見山城跡　城館跡（中世）
6 片尻遺跡　散布地
7 草谷遺跡　散布地
8 要害山城跡　城館跡（中世）
9 船戸遺跡　散布地
10 船見田遺跡　散布地
11 大竹遺跡　散布地

萩市（1971）『萩市地形図 7』（国土座標第Ⅲ系）を転載・加筆

図1　萩市見島遺跡分布図

第Ⅱ章　第123号墳の調査

第1節　昭和36年の現地調査

昭和35年（1960）から3ヶ年にわたり実施された見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査では、初年次は分布調査に当てられており、第123号墳は、古墳群西部域を調査の対象とした2年次の昭和36年（1961）に発掘調査の手が加えられている。現地調査後の詳細な経緯は不明であるが、昭和36年の出土資料は現在萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されている。平成28年度に両館に保管される第123号墳出土品の悉皆調査を実施したところ、萩博物館に16袋、山口大学埋蔵文化財資料館に3袋の遺物袋が存在することが判明した。また、調査の過程で「見島（不明）」と注記された遺物袋の資料が多数第123号墳出土資料と接合することが判明したため、これを第123号墳出土品と特定した。各館にて確認した遺物は以下の通りである[註1]。

【萩博物館】

萩①　袋注記「MJ123号墳　玄室内部　19620904」遺物カード「123号　玄室内部　19620904」

萩②　袋注記「MJ123号　19620904　玄室内部」遺物カード「123号　玄室内部　19620904」

萩③　袋注記「MJ123号墳　玄室内部　19620904」遺物カード「123号　玄室内部　19620904」

萩④　袋注記「MJ123号　19620904　玄室内部」遺物カード「123号　玄室内部　19620904」

萩⑤　袋注記「MJ123号墳　玄室内部　9/4」遺物カード「123号　玄室内部　19620904」

萩⑥　袋注記「63MJ123号　玄室」遺物カード「123号　玄室内部」

萩⑦　袋注記「MJ123号古墳　玄門より向かって右側の礫層中　1961年9月4日」
　　遺物カード「123号古墳　玄門より向かって右側の礫層中　19620904」

萩⑧　袋注記「MJ123号」遺物カード「123号（Fig2-25）（第24図-25　p425）」

萩⑨　袋注記「MJ123号①」遺物カード「123号①」

萩⑩　袋注記「MJ123号②」遺物カード「123号②」

萩⑪　袋注記「63MJ123②」遺物カード「123号」

【山口大学埋蔵文化財資料館】

山①　袋注記「見島　玄室内　1961.9.4」（コンテナNO.31　袋NO.4）
　　遺物カード「31-4　見島123号　玄室内　1961.9.4」

山②　袋注記「見島123」（コンテナNO.92　袋NO.3）
　　遺物カード「92-3　見島123　昭和36年9月6日　123号　骨片　鉄片　須恵器片」

山③　袋注記「見島123　壁近く（骨片）　9/4」（コンテナNO.31　袋NO.19）
　　遺物カード「31-19　見島123号　壁近く（骨片）　9.4」

山④　袋注記「見島（不明）」（コンテナNO.31　袋NO.28）

このうち萩博物館所蔵品の注記に関しては、遺物取り上げ年「1962」は「1961」の誤記、また「63MJ123」の「63」は出土年を示すと考えられるので、これも「61」の誤記であろう。萩博物館所蔵萩①～萩⑤は出土年月日や出土地点の記載が同一のため、元来同一袋に収納されていたものが資料整理過程で分けられた可能性がある。

第123号墳の調査期間に関しては、日付の残る資料は山②の9月6日を除くと全て9月4日であること

第Ⅱ章　第123号墳の調査

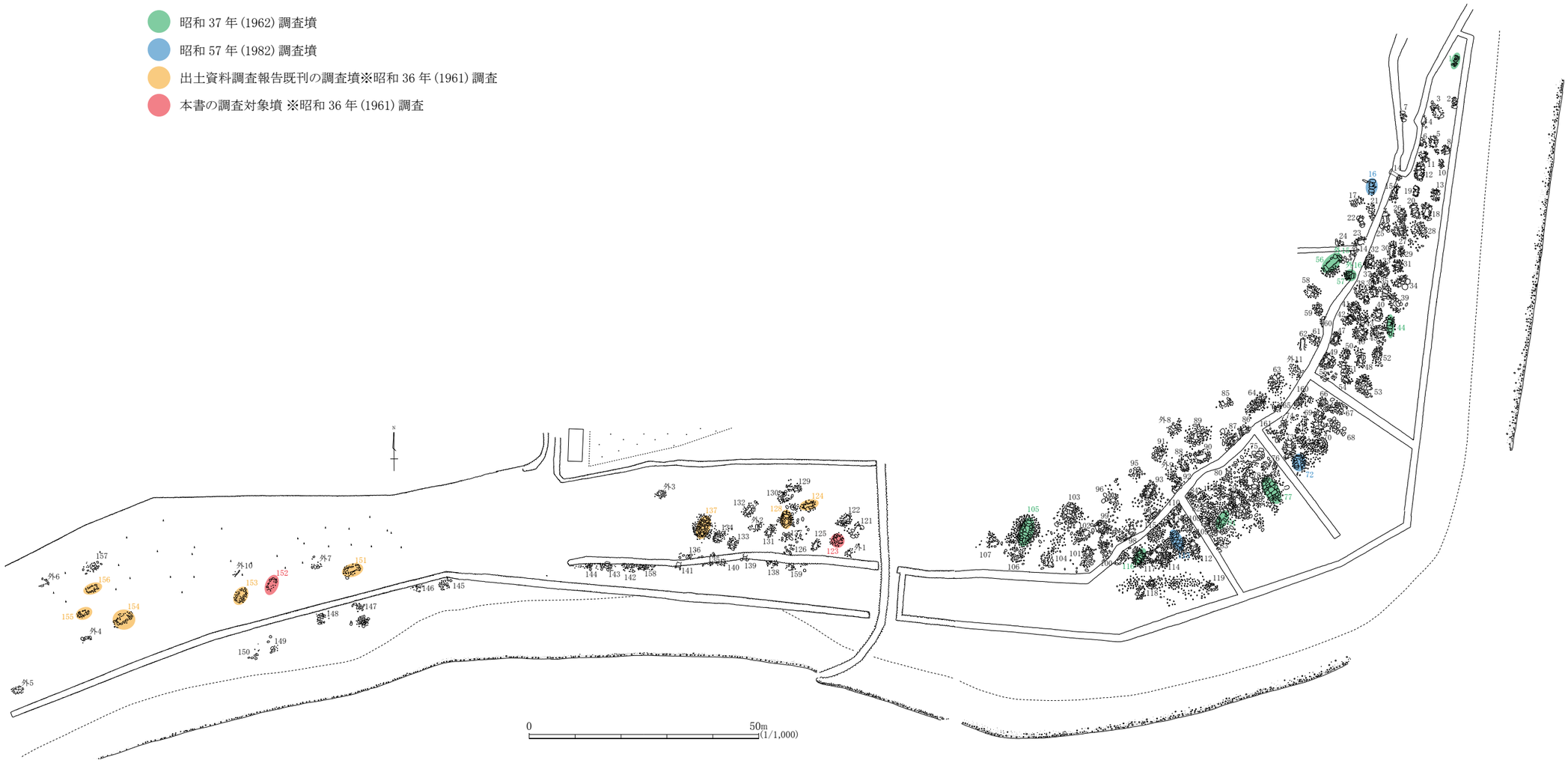


図2　見島ジーコンボ古墳群分布図

写真1　第 123 号墳調査前の様子（西から）
斎藤・小野 1964「図版 19（下）第 123 号墳の現状」を転載

写真2　第 123 号墳石室全景（西から）
斎藤・小野 1964「図版 20（上）第 123 号墳石室及び遺物出土状態」を転載

写真3　第 123 号墳石室完掘状況（北西から）
斎藤・小野 1964「図版 20（下）第 123 号墳石室及び遺物出土状態」を転載

写真4　第 123 号墳現況（西から）※2009 年5月撮影

から、『見島総合学術調査報告』での記述通り昭和36年の9月4日より調査が開始され、同年の調査最終日となった6日に終了したのであろう。

残念ながら当時の調査日誌や記録原図は失われているため、ここでは『見島総合学術調査報告』に記載された第123号墳の調査成果報告文と、調査時の写真（写真1～3）を転載するとともに、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている「第22図　第124号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図（図3）を掲載する。

第123号墳　浜堤を横切って流れる小川の西岸に近い横穴式石室墳で、昭和36年の9月4、5、6の3日間発掘調査を実施した。近辺には石室が群集し、この古墳の石室は、第126号と約2.5メートル、第121号と第122号とはともに約2メートルの距離にあって、積石はすでに崩落し、遺存する4箇の天井石も2箇が石室の中に転落していた。

奥壁は径径45センチの2箇の割石の上に径20センチ内外の石塊を2～3重に積み、側石も同様、壁面の下半部には径78cmの自然石や割石を左右に配置し、その上に径20～40センチばかりの小石塊を2～3重に積み重ねた上を天井石で覆うてある。石室の入口部はかなり破損しているので、もとの状態を正しく捉えることは困難であるが、奥行375センチ、高さ103cm、幅は奥壁付近で82センチを測り、入口が狭く奥がやや広いプランをもった前室や羨道を欠く狭長な石室である。床面で径5センチ内外の礫と黒色の有機土層からなっており、奥壁側へ僅かに低く傾いている（第22図、図版19・20）。

人骨はいずれも小断片で、それらは奥壁に近い場所に散在していた。副葬品は意外に多く、床面から銅環2、丸玉2、小玉47、貝輪1、紡錘車1、鉄製刀身の断片1、鉄鎌1、鉄鏃の断片若干、刀子らしいもの1箇のほか、須恵器の壺4、蓋坏1、坏2、提瓶らしいものの破片1、高坏1、土師器の高坏1、盌3と1箇の坏を検出している（第23図）。

他に形体は同じであるが、別に貝輪の一断片が見出された。これは環体の厚さ0.4、上下の幅2センチを有し、端に小孔が1つある。推定外径5センチ前後。紐を利用して腕に着装したものであろう（同図3）。

紡錘車 1　滑石製厚手の円盤形をなし、上面は下底面に比して狭い。外径3.7センチ、厚さ1.7センチ、中央にうがたれた孔の径は0.8センチである（図版19－1）。

鉄釜 1　先端及び柄の部分は欠損し完形品ではない。通有の形式を示すものとみなされ、刃の幅は3センチ、残存部の長さ10センチを有する。

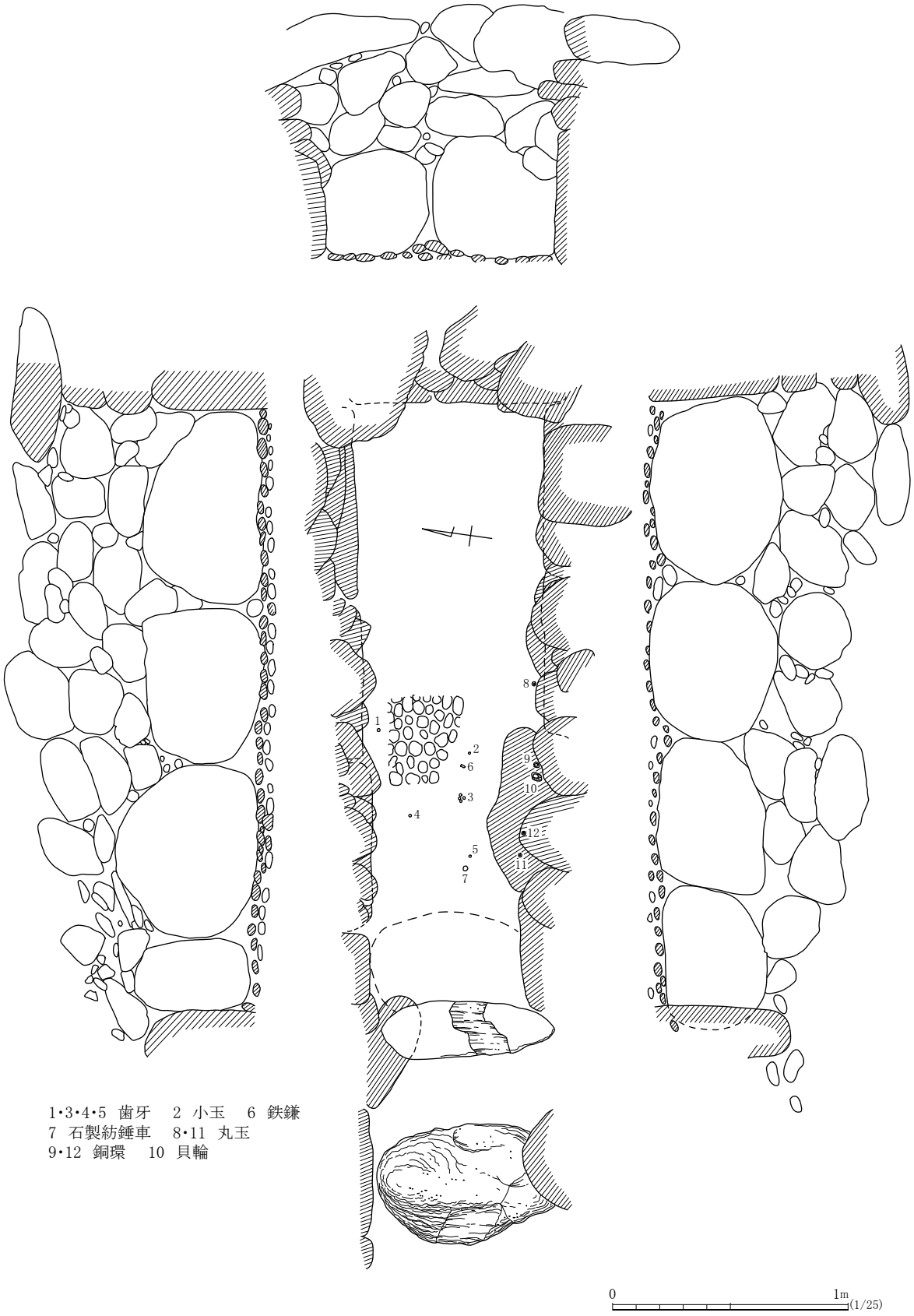


図3 第 123 号墳石室実測図

鉄製刀身片　10数片の小破片になっており全体の形制は知られない。1口分とみなされる。

鉄鏃片　3片が残存するに過ぎないが、細手の尖根式のものとみなされ1本分と考える。

須恵器・土師器　須恵器片332点、土師器片5点。厚手の須恵器はすべて平行条叩き目を有するが、内面は、格子目をのこす例（第24図－21）、同心円をのこす例（同図－22）のほか、青海波をのこす例がある。薄手の須恵器には坏の蓋、高坏、坏の破片が主である。坏の蓋は小破片のみで、擬宝珠形の撮みが散見された。高坏（同図－24、図版31－24）は坏部の胴から底にかけて1稜のふくらみがあり、裾の開いた安定のよい脚に支えられている。脚には窓その他の工作が施されていない。坏の破片とみられる破片は多いが形状のわかるものは1点（同図－25、図版31－25）のみである。これは口径11.7センチ、高さ4センチの丸底である。玄室内流土層中から発見された。

土師器片のうちには糸切底の破片（同図－23）も出土した。　（『見島総合学術調査報告』426～427頁）

第123号墳は、積石はすでに崩落しており、4石遺存した天井石中2石は石室に転落していたとされる（写真1）。古墳群西部域は現在史跡公園となっているが、第123号墳石室には天井石が架けられていない（写真4）。石室北側に転がされている巨石が元来の天井石と推測されるものの、確証はない。石室に関しては調査時の姿をよく留めているようであるが、西側開口部の崩壊が著しく、規模が把握しづらい。報告書に「奥行375センチ」「前室や羨道を欠く」と記されていることから、図示された石室平面図全体を「石室」と解釈しているようであるが、図には奥壁より開口部側約2.5m地点に閉塞石状の板石が描かれており、羨道の有無を断定できない。奥壁と側壁の根石には比較的大きめの石が用いられており、上部には人頭大の石が乱雑に積み上げられている。『見島総合学術調査報告』では、第123号石室は横穴式石室状の構造であるものの50㎝内外の小ぶりな石で乱雑に積まれ、石室高も60㎝内外と低いＡⅡ類に分類されている。現実的にはA式のⅠ・Ⅱ類に顕著な差は見られない[註2]が、史跡公園となっている古墳群西部域で調査が実施されたA式石室は第123号墳に限られることから、貴重な存在となっている。

遺物に関しては、出土位置に関する記述が少なく詳細を明らかにしえない。「奥壁近くに散在していた」とされる人骨も平面図には描かれておらず、歯牙はむしろ石室中央付近に分布している。平面図に記入された他の遺物は、石室中軸線の中央から南側に偏って分布するように見受けられるものの、実際の遺物出土量に比してあまりに少数であることからここでは検討を行わない。ただし、出土状況写真（写真3）の石製紡錘車（中央下方）や鉄鎌（左上方）を見る限り、図示された遺物は床面出土と見なして良いようである。

【註】

1）萩博物館所蔵の土器以外の資料に関しては、ピックアップされ紙箱等に収納されているが、鉄製品以外は日付や出土地点の注記が見られない。鉄製品は鉄鎌を除いてすべて「見島　123号　1961.9.4」の注記カードが見られる。

2）第123号石室の根石は長軸75㎝程度であり、石室高は100㎝に達する。これは『見島総合学術調査報告』にて示されたＡⅠ類の特徴と合致する。

第2節　第123号墳の出土資料

1．土器類

第123号墳出土土器類は、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されている。今回の調査で両者が接合した場合は、これまでと同様に萩博物館に収蔵していただくこととなった。

前述の通り、第124号墳出土の遺物袋は萩博物館に11袋（萩①～⑪）、山口大学埋蔵文化財資料館に4袋（山①～④）確認された。出土地点の判明するものは「玄室内部（玄室内）」「壁近く」「玄門より向かって右側の礫層中」であるが、これらはいずれも石室内より出土したと見て問題なかろう。山②は人骨や鉄製品であることから、石室内出土と見られる。山④に関しては、「玄室内部」出土品と数多く接合することや鉄製品が含まれることから、これも石室内出土品と判断される。よって本稿では、石室内出土と確定できない萩⑧～⑪の資料で、石室内の資料と接合しないもののみ「出土地点不明」として取り扱う。

【石室内出土】（図4～7、写真5～8、表1）

須恵器では、坏蓋、坏、高坏、長頸壷、壺、甕が存在する。

H1は坏蓋つまみ片。擬宝珠形のつまみであるが、他に同一個体と見られる坏蓋破片が存在しない。Y1は扁平な坏蓋の天井－口縁部片。焼成不良品で、色調はにぶい黄褐色～にぶい褐色を呈する。かえりを有する蓋で、口唇部を欠失する。身・蓋の判別が難しい個体であるが、外面のナデ調整が丁寧に施されていることから蓋と判断した。Y2は蓋の口縁部片。小片のため口径復元不能。天井部からほぼ水平に口縁に至る扁平な蓋で、端部をわずかに下垂させる。H2は口縁の一部を欠失するがほぼ完形に復元される坏で、『見島総合学術調査報告』第24図-25に掲載された資料である。丸底の底部から内湾して口縁に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収める。口縁部は内外面とも回転ナデが施され、坏底内面は不定方向のナデ、外面は回転ヘラ削りが施される。H3は坏口縁部片。端部を丸く収める。

Y3は高坏。接合しない3片であるが、今回の調査で所在が確認できなかった高坏（『見島総合学術調査報告』第24図-24）と同一個体と見られる。坏部は口縁境界部に明瞭な段を有し、口縁内面に沈線を1条巡らせる。脚柱部は細く、裾部の下垂は弱い。

H4は長頸壷の肩－腹部片で、頸部との接合部で折損している。肩の張る器形で、腹部復元径は16.8㎝となることから小型の長頸壷と見られる。外面は全面にカキ目、内面は回転ナデが施される。H5は壺の底－腹部片。復元腹部径は17.6㎝で中型の壺と見られるが、器壁は厚い。内面は回転ナデ、外面下位はケズリが施される。高台の有無は不明。H6は壺の頸－肩部片。外面は平行叩き後カキ目が施されているようであるが、灰が多く被り不明瞭である。内面の同心円当て具痕は部分的にナデ消されている。H7は壺体部片。外面の平行叩き痕は丁寧にナデ消されている。内面は回転ナデが施される。H35と同一個体の可能性がある。Y4は壺の高台か。径が大きく、器壁も厚い。わずかに「ハ」字状に開く高台で、下端部全面で接地する。

H8は甕の口縁部片。外反しながら大きく開く口縁で、口唇部の両端をわずかに肥厚させる。外面には沈線が3条巡るが、最下位の沈線は静止状態で引かれたためか下方に曲がっている。H9も甕口縁部片であるが、やや径が小さく器壁も薄い。口縁は端部に面を取り、外面に断面三角形の低い突帯を1条巡らせる。H10は焼成不良の甕口縁部片で、小片のため口径復元不能。口縁端部は外方に折り畳むことで有段となっている。形状は少し異なるがH36と同一個体である可能性が高い。H11-a～dは、接合しないが胎土や焼成具合、調整の状況から同一個体の甕と見て良い。口縁は端部付近を外方に強く屈曲

させ、内外面を強くなでることにより口唇の両端を肥厚させる。頸部と肩部の破片は成形時の接着部が剥離したもので、接着面に平行叩きが施されており、技法上の特徴となっている（写真6H11a-1）。体部外面に右上がりの平行叩きおよび部分的なカキ目が施されるが、自然釉と灰を多量に被っている。H12とH13は胎土や色調、内面の当て具の特徴から同一個体の甕である可能性が高い。外面は左上がりの平行叩き、肩部にはカキ目が施される。内面の同心円当て具痕はナデ消しが図られている。H14は器壁が厚い個体で、大甕の肩部片と見られる。外面に灰が多量に被るため不明瞭となっているが、目の細かな格子目叩きが施されているようである。内面の同心円当て具痕には円に直交する亀裂が1条見られる。H15～H17は甕の体部片。H15は2片の接合資料で、他に同一個体と見られる破片が3点存在する。外面は平行叩きが施され、内面の同心円当て具痕はナデ消しが図られる。H16は『見島総合学術調査報告』第24図-22に掲載された資料。平行叩き及び同心円当て具痕が強い圧痕として残る特徴的な甕であるが、他に同一個体と見られる破片が存在しない。H17は器壁の厚い個体で、大甕の体部片と見られる。外面には右上がりの平行叩きが施され、内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。他に7片同一個体が存在する。H18も器壁が厚く、大甕の底部付近の破片と見られる。外面には目の細かな格子目叩きが施され、内面上位には同心円当て具痕が、下位には同心円および格子目当て具痕が残るが、いずれも粗くナデ消しが施されている。H14およびH37と同一個体の可能性を有する。H19は甕の底－体部片。丸底で体部にかけて器壁が厚くなる。外面は焼き爆ぜが著しく、平行叩き後ミガキ気味のナデが施されている。内面は同心円当て具痕をそのまま残す。

土師器には坏、高坏、壺が存在する。

坏は口縁との境界部に明瞭な屈曲部を形成するもの（H20～H23、Y5）と、明確な境界部を形成せずに口縁が内湾しつつ立ち上がるもの（H24・H25、Y6）に大別される。H20は完形復元可能な坏。丸底の底部から内湾して立ち上がり、「く」字状に口縁が大きく開く。口唇部はやや内湾し、内端をわずかに肥厚させる。復元口径は12.0㎝であるが、ひずみが大きな個体である。体部外面は手持ちヘラ削り後不定方向のヘラミガキが施される。内面には放射線状にヘラミガキが施されるが暗文と呼ぶには至っていない。口縁部は横方向のヘラミガキ、内面は横ナデが施される。H21も同形の坏で、口縁端部は丸く収める。体部外面は手持ちヘラ削りが施され、内面には放射線状の暗文が見られる。口縁部内外面は横－右上がりのヘラミガキが施される。外面を強く磨くため、口縁部の境界が曖昧になる部分が存在する。当資料もひずみが大きく、口径は12.4～12.7㎝である。Y5は小片であるが復元口径は14.0㎝を測る。坏底の浅い個体と見られる。口縁境界部の屈曲が強く、口縁端部は尖り気味に丸く収める。体部外面はミガキが施される。内面は風化のため調整不明。口縁は上位が内外面ともナデ、下位は内外面とも横方向にミガキ気味のヘラナデが施される。H22はY5と似るが調整が異なるため別個体と判断した。口縁は内外面ともナデ、体部内面はミガキ気味のヘラナデが右上がりに施される。H23は口縁境界部の屈曲がやや弱い口縁部片で、口唇の内端部を肥厚させる。体部外面は手持ちヘラ削りを施している。H24は丸底の底部から内湾して立ち上がり、器形において明確な体－口縁境界部を形成せずそのまま口縁に至る坏。器面調整においては、体部は外面斜め方向のヘラミガキで内面ナデ、口縁部は内外面とも横方向のヘラミガキで体－口縁の別が明確に見られる。半損品であるが、復元口径は12.4㎝を測る。H25は器壁の薄い坏で、他の資料と異なり外面が全体的に黒ずむ。全体的に器面の風化が著しいが、ミガキは施されていないようである。口縁端部は尖り気味に丸く収める。復元口径13.0㎝。Y6は口縁部片で、小片のため口径復元不能。口唇部を欠失しているが、口縁外面に沈線が1条巡る。外面下位にヘラミガキが施される他はナデ調整。H26は『見島総合学術調査報告』第24図-23掲載資料。接合しない底部と体部

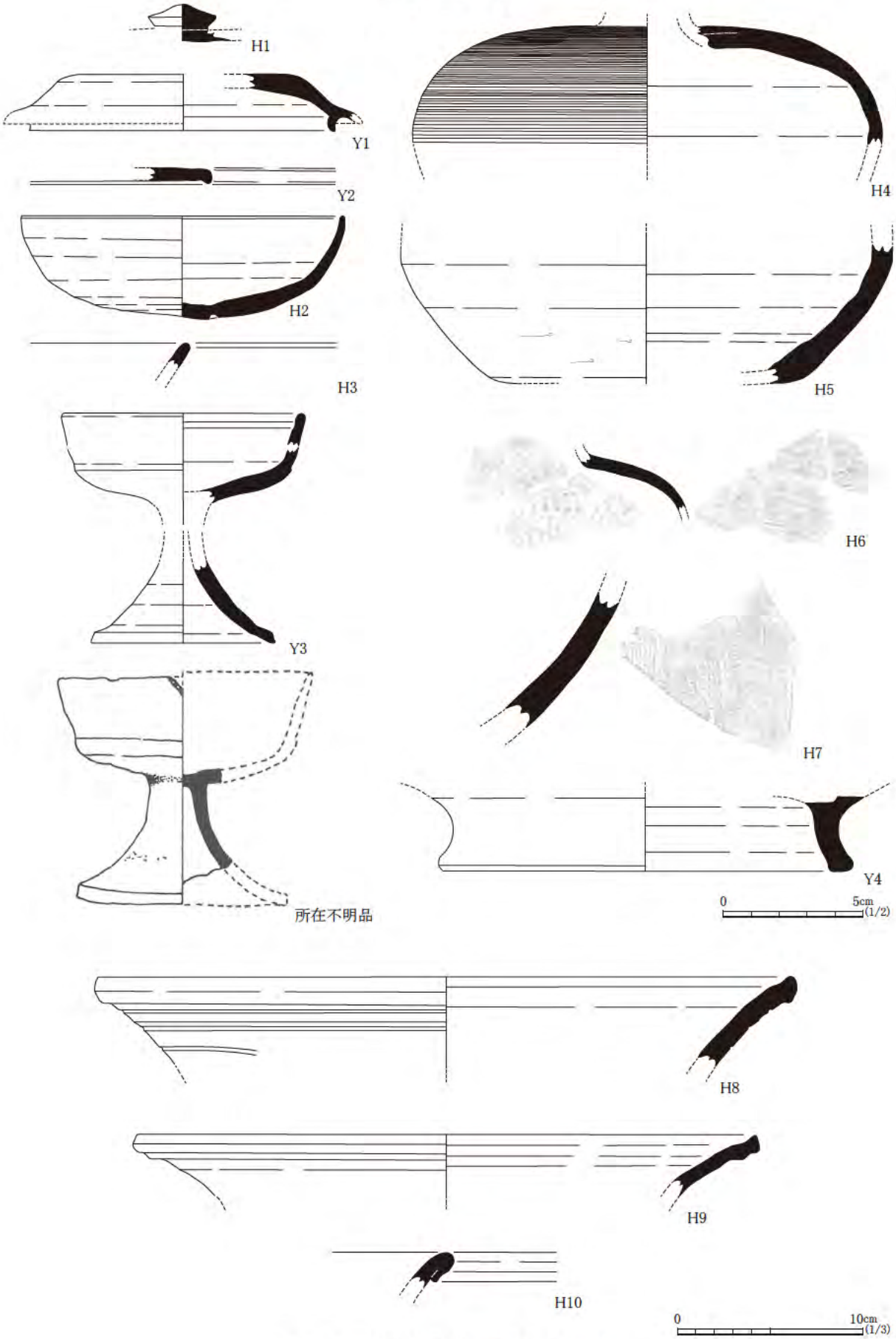


図4　第 123 号墳石室内出土土器実測図①

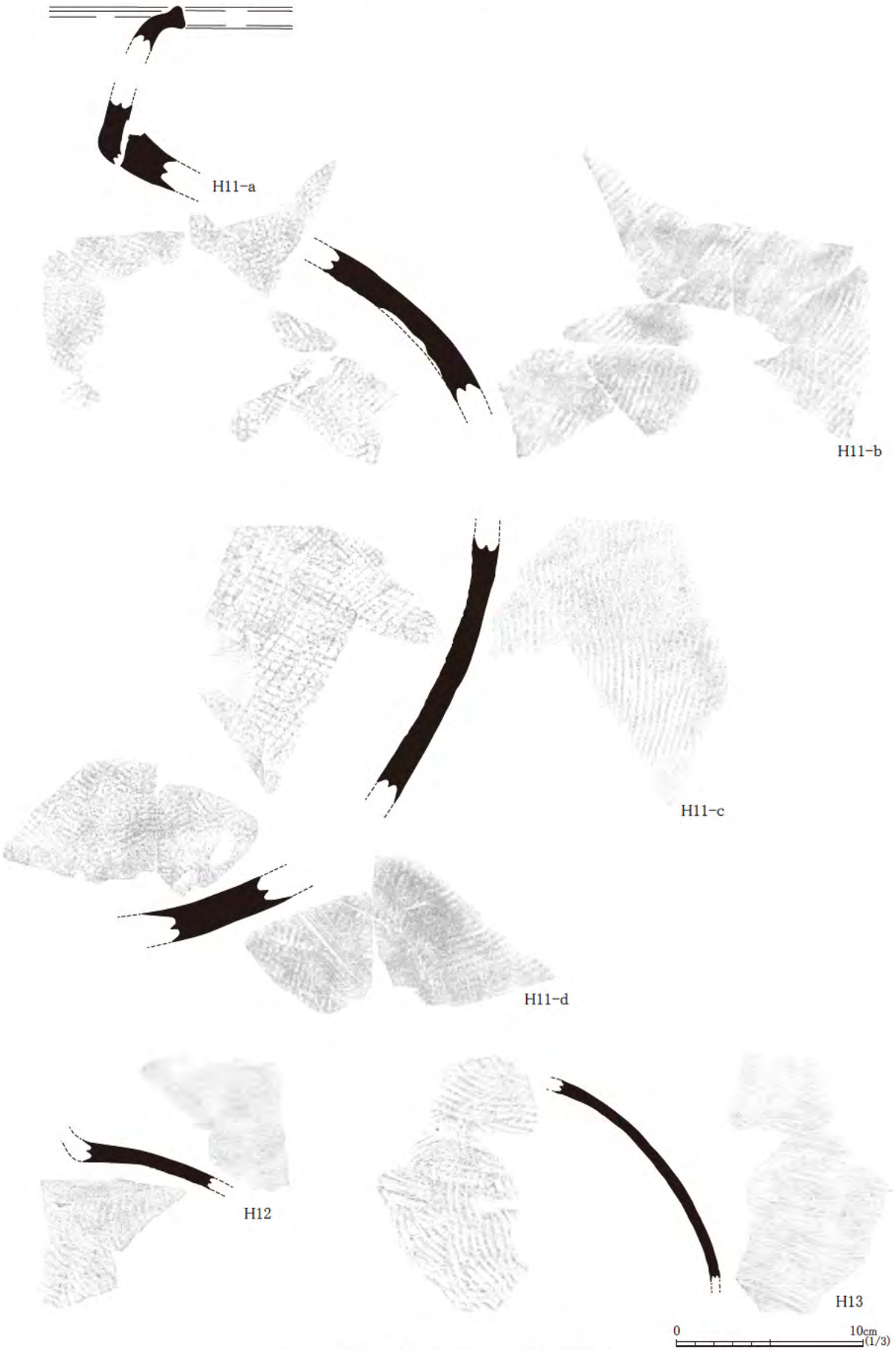


図5　第 123 号墳石室内出土土器実測図②

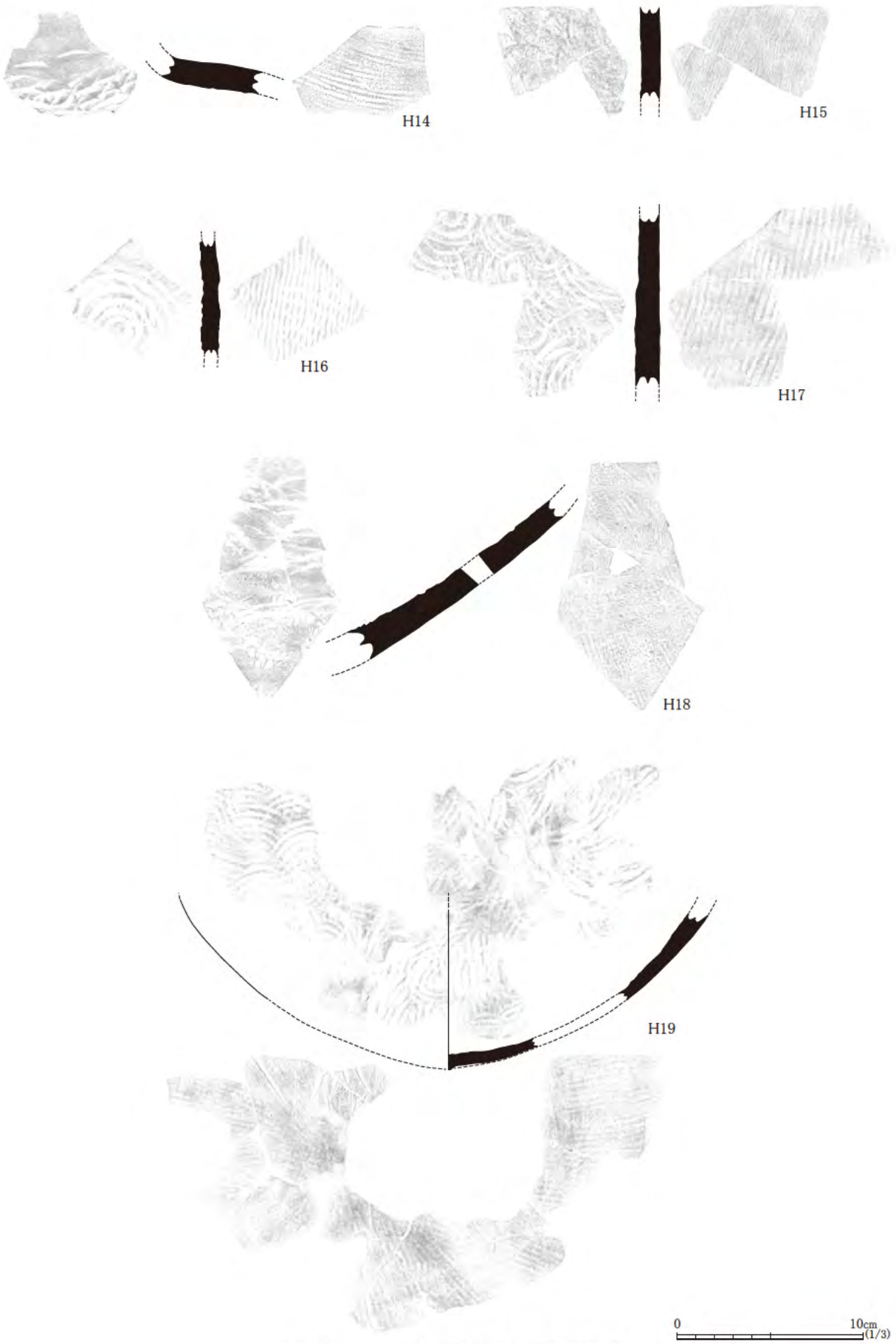


図6　第 123 号墳石室内出土土器実測図③

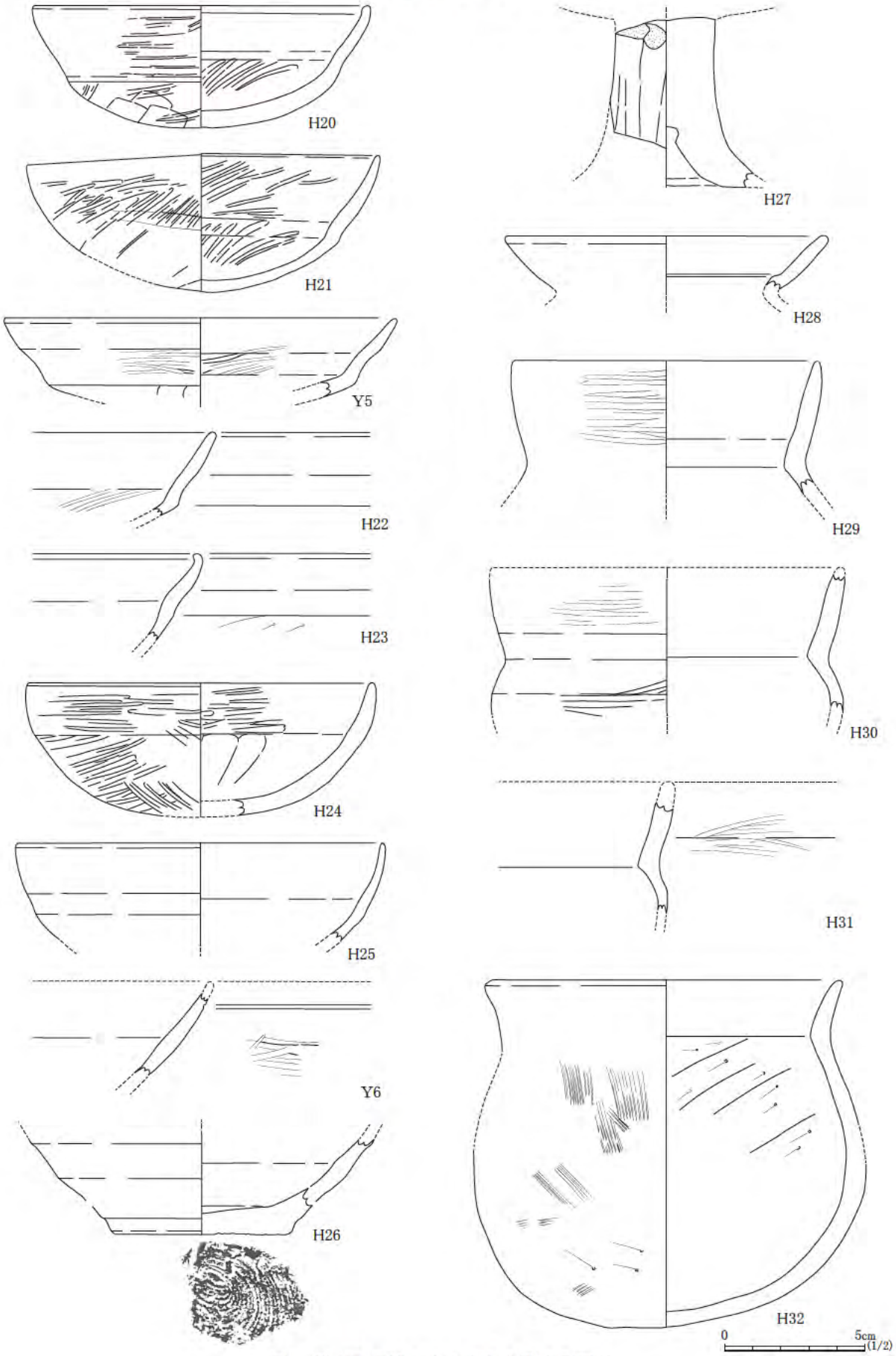


図7　第 123 号墳石室内出土土器実測図④

写真5　第 123 号墳石室内出土土器①

写真6　第 123 号墳石室内出土土器②

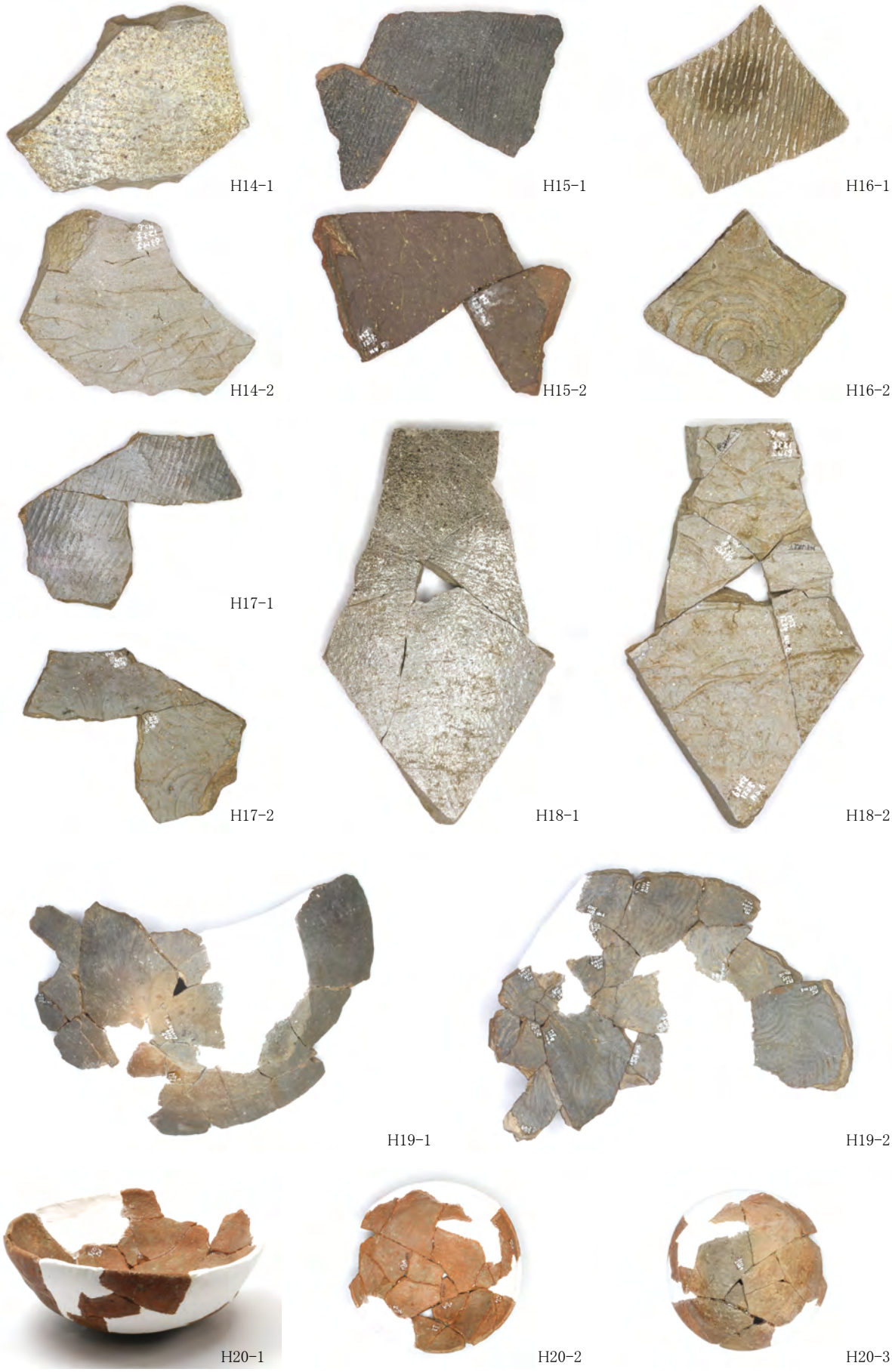


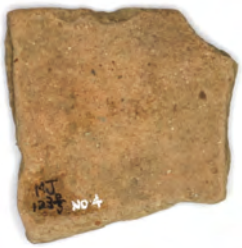
写真7　第 123 号墳石室内出土土器③

H21-1

H21-2

H21-3

Y5


H22

H23

H24-1

H24-2

H26

H27

H32

H25

H28

Y6

H29

H30

H31

写真8　第 123 号墳石室内出土土器④

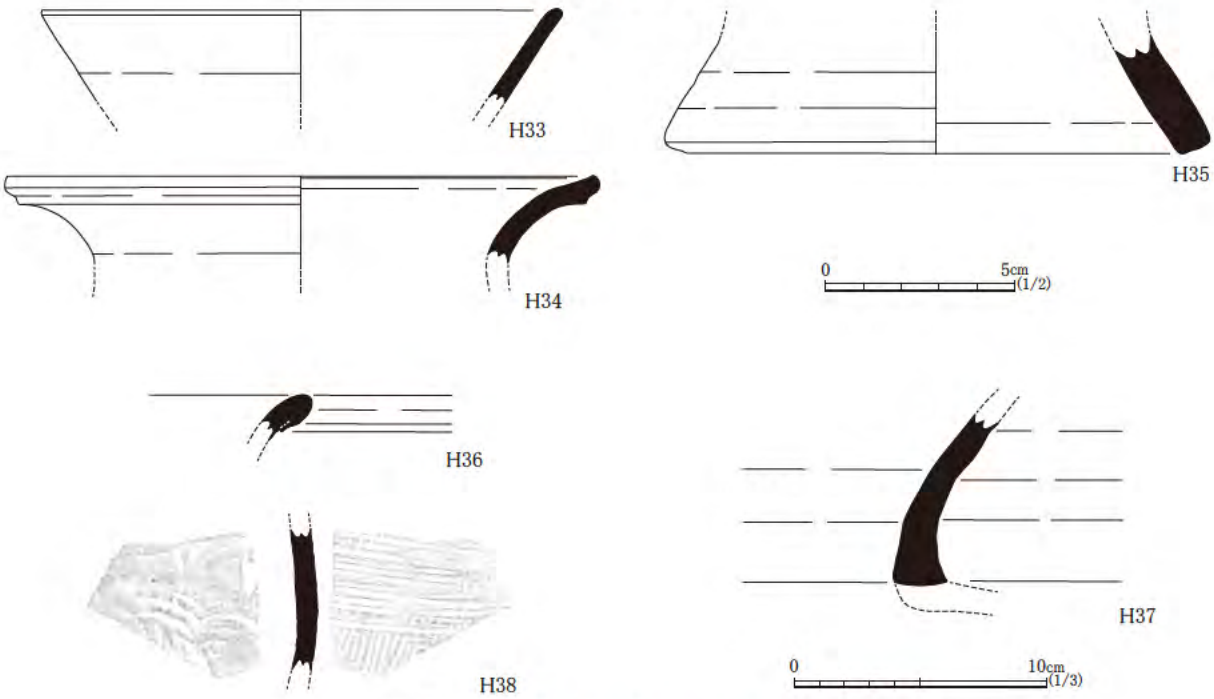


図8　第 123 号墳出土地点不明土器実測図

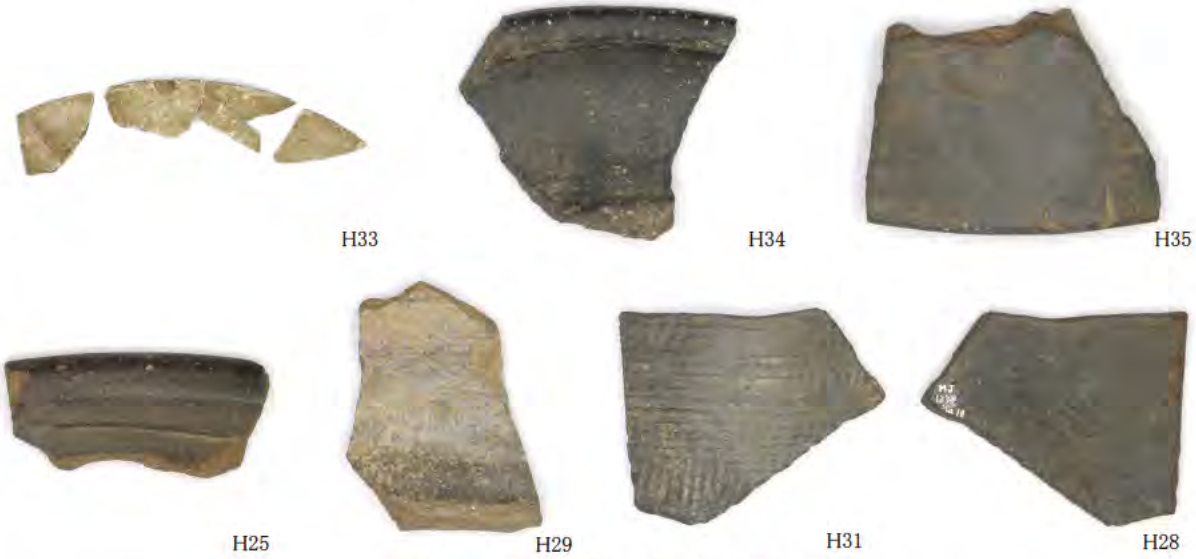


写真9　第 123 号墳出土地点不明土器

を図上復元した。底部には糸切り痕が明瞭に残る。体部は風化が著しく調整が観察できない。他の資料と所属時期が大きく乖離しており、後世の混入品である可能性が高い。

H27は高坏脚部片。坏部と脚裾部を欠失しており、他に同一個体と見られる破片も存在しない。脚柱は太く中実で、外面はタテ方向のナデにより面取りが行われている。当資料は、見島ジーコンボ古墳群西部域では唯一の土師器高坏出土例となる。

H28は坏口縁部の可能性もあるがここでは壺口縁として掲載する。内外面とも横ナデが施され、口縁端部を丸く収める。復元口径11.4cmを測る。**H29**～**H31**は口縁が軽く内湾して長く上方に立ち上がる小型丸底壺の口縁－体部片。いずれも口縁外面にミガキ気味のヘラナデを施す。**H30**・**H31**はともに口唇部を欠失しており、同一個体の可能性を残すが、色調が異なるため別個体として掲載した。**H32**は完形復元可能な丸底の短頸壺。器高12.3cm、口径12.4cm、腹部径13.8cmを測るが、歪みが大きい個体であ

る。体部の外面調整は下位がケズリ後ハケおよびナデ、上位はタテハケ後ナデ。内面調整は下位がナデ、上位はケズリを施す。口縁は内外面とも横ナデ。

【出土地点不明】（図8、写真9、表1）

萩⑧～⑪の資料であり、いずれも須恵器である。

H33は坏の口縁部片。直線的に外方に大きく開く器形で、口唇部をわずかに外反させる。復元口径は13.8㎝を測る。内外面とも回転ナデを施す。

H34は強く外反する壺の口縁部片。口縁端部は鈍く面を取り、外面下位に断面三角形の低い突帯を1条巡らせる。復元口径15.6㎝を測り、内外面とも回転ナデを施す。H35は壺瓶類の高台片か。断面長方形でやや外反しており、口縁内端で接地する。内端復元径は13.0㎝を測る。

H36は焼成不良の甕口唇部片。端部を外方に折り畳み肥厚させる。形状がやや異なるが、H10と同一個体である可能性が高い。H37は甕の頸－口縁部片。体部との接合面で剥離している。器壁の厚みから見て大甕の頸部と見られる。H14およびH17と同一個体の可能性を残す。H38は甕の体部片。外面は平行叩きを縦横に施す。内面の同心円当て具痕は部分的にナデ消されている。

2．金属器類

第123号墳出土金属器も、萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されているが、『見島総合学術調査報告』にて報告された資料はすべて萩博物館に所蔵される。

【銅製品】（図9、写真10・12、表3）

耳環2点が存在する。Hbr1は中空耳環。化学的な分析を行っていないが、銅板円筒でわずかに金が遺存しているように見える。外径2.83～2.95㎝、内径1.45～1.55㎝、円筒断面は楕円形を呈しており径は0.65～0.9㎝を測る。両側面に見られる径0.3～0.4㎝の凹みは製作技法にかかわる痕跡かも知れない。重量は5.67g。『見島総合学術調査報告』の第116号墳報告箇所に「銅環2　1は薄い銅版を中空の筒にして環体をつくったもので、外径2.9㎝。鍍金の跡は見られない（424頁）」とあるのは当資料と見られる。[註1] 管見の限りではあるが、山口県に確認される唯一の中空耳環と思われる。[註2] Hbr2は銅地金張り耳環である。外径1.8～1.87㎝、内径1.12～1.14㎝、断面は楕円形を呈しており径は0.38～0.55㎝を測る。重量は5.77g。両者はセット関係にないため、少なくとも2体の埋葬が行われたものと推測される。

【鉄製品】（図9、写真10～12、表2）

遺存状態不良の資料が多いが、刀、鏃、刀子、鎌が確認される。萩博物館所蔵のHi1～Hi7は「1961年9月4日」の出土年月日を有する。

Hi1は2片が接合する資料で、鉄刀の刀身部片と見られる。棟に一部原面が残る。Hi2は刀子もしくは刀の刃先片と見られる。Hi3も刀子もしくは刀の茎部片。Hi4は湾曲する鉄板製品で、刀装具の断片と思われる。Hi5は長頸式鉄鏃の頸－茎部片。鏃身と茎端部を欠失する。山④の茎部片と接合したため萩博物館所蔵品とした。Hi6は片刃箭式の鉄鏃鏃身部片。Hi7は刀子の刀身－茎部片。切先と茎端部を欠失し、茎部には木質が残る。Hi8は曲刃鎌。『見島総合学術調査報告』第123号墳報告箇所に記述されているのは当資料で、完掘状況写真（写真3）左上に写り込んでいることからも当墳出土であることが確認される。鎌先と基部を欠失しており、刃部は両刃である。残存長は10.95㎝、最大幅3.35㎝、最大厚0.7㎝を測る。

MJukHi1は完形の曲刃鎌。全長16.35㎝、基部最大幅3.0㎝、最大厚0.68㎝を測り、重量72.73gを量る。直刃に近いゆるやかな曲刃で、基部を「L」字状に折り返すことにより柄との固定を図る。刃部を手前に、折り返しを上方に向けた場合に切先が右にくる例（乙類）であり、折り返しから推定される着柄角はお

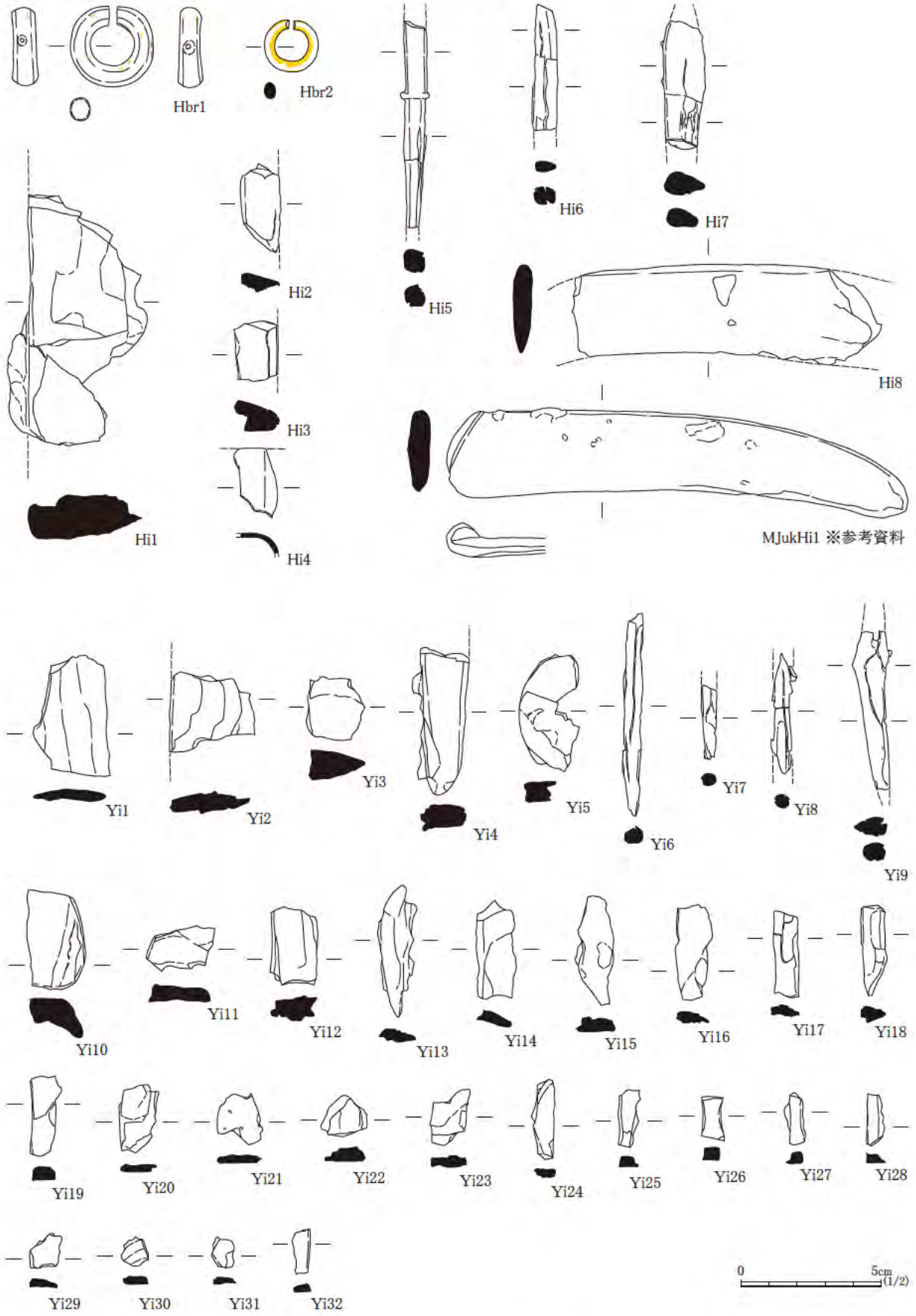


図9　第 123 号墳出土金属器実測図

写真 10　第 123 号墳出土金属器①

写真 11　第 123 号墳出土金属器②

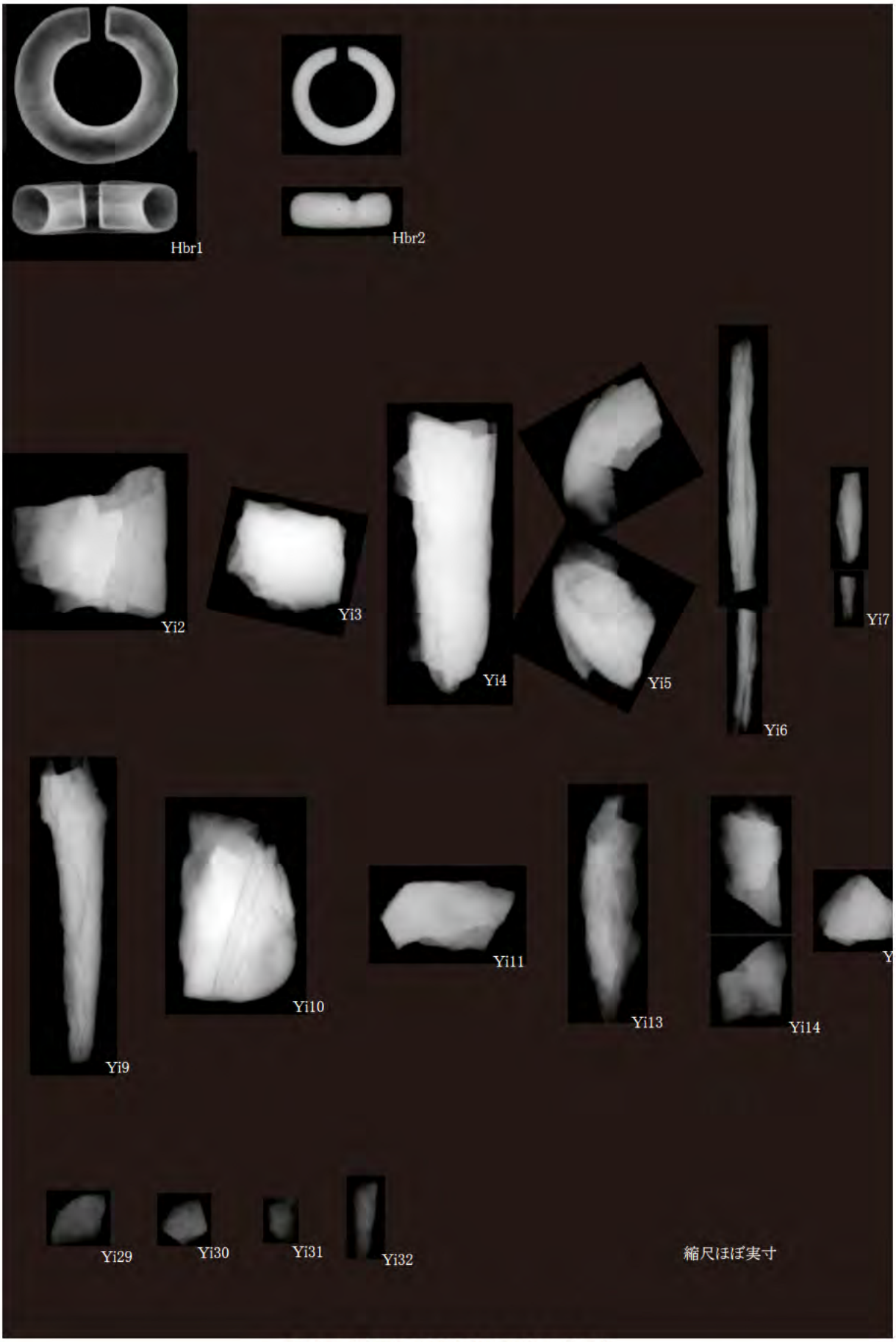


写真 12　第 123 号墳出土金属器 X 線画像

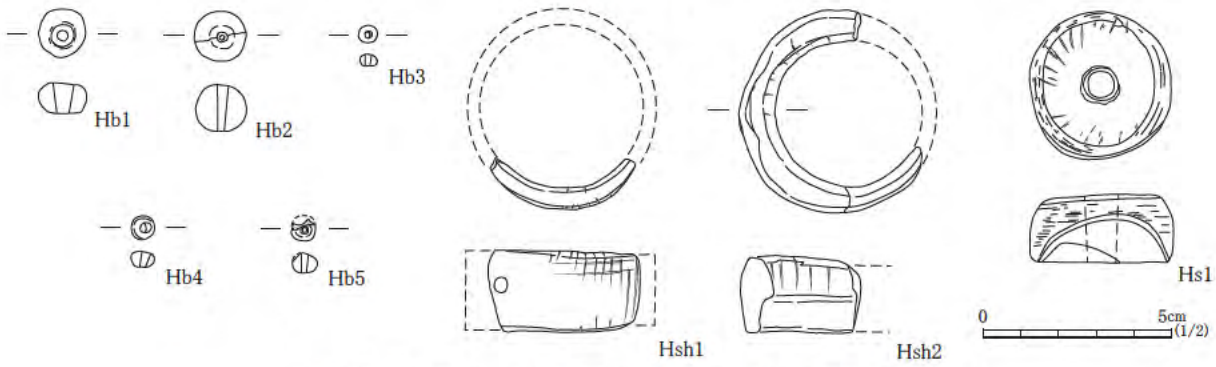


図 10　第 123 号墳出土玉類・貝製品・石製品実測図

よそ125°と鈍角であることから下枝払い、枝切りなどの非穀類収穫用鎌と見られる（都出1989、金田1996他）。古代の軍事的集団が所有した鎌として極めて貴重な事例となる当資料であるが、問題となるのはその出自である。資料に同封されたカードには「見島　123号　鉄鎌　1961.9.4調査」の文字が見られ、添えられた展示キャプションと見られる厚紙にも「第123号墳出土」と書かれているものの、第123号墳出土の鉄鎌は1点とされ、該当資料がHi8であることは明白である。他の調査墳から鉄鎌が出土したとの記録もないため、見島ジーコンボ古墳群出土品であること自体に疑念が湧くが、『見島総合学術調査報告』の各墳調査成果報告の末尾に「付　見島古墳群から従来発見された遺物」として「利器類　鉄製刀身残欠、鉄製刀子等の通例のもののほかに鉄製鎌1箇が見られる。長さ約17センチ、もとの部分は柄をとりつけるために反転させており、この部分の幅約3センチをなす（438頁）」との記述が見られる。図・写真が添えられていないため断定は困難であるが、サイズと形態的特徴から当資料に関する記述である可能性が極めて高いと考える。よって本稿では参考資料「見島ジーコンボ古墳群出土墳不明鉄製品萩博物館所蔵品NO．1＝MJukHi1」として掲載しておく。

山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品は山②および山④の32片（Yi1～32）で、山②は「昭和36年9月6日」の出土年月日を有する。

いずれも小破片で原形をとどめないが、大刀の断片と見られるもの（**Yi1～Yi5**）、鉄鏃の断片と見られるもの（**Yi6～Yi8**）、刀子の刀身－茎部片（**Yi9**）などがある。

3．玉類（図10、写真13、表4）

第123号墳出土の玉類は、全て萩博物館に所蔵され、ガラス丸玉2点（**Hb1・2**）、ガラス小玉2点（**Hb3**および**連結資料中1点**）、土製練玉43点（**Hb4・5**および**連結資料中41点**）の総数47点を数える。

ガラス丸玉に関しては、『見島総合学術調査報告』に第116号墳出土品としてではあるが、「丸玉2　緑色を呈するガラス製。1は横の外径1.2センチ、縦の外径0.8センチ。通有の形式である。他の1もほぼ同じであるが折損している（424頁）」と記述されている。前者がHb1、後者がHb2である。

ガラス小玉と土製練玉に関しては、同じく第116号墳出土品として「小玉47　普通に見られる濃青色のガラスで、大きさは色々とあるが、概して横の外径0.5センチ内外、縦の外径0.4センチ内外である。他に若干の残欠小片も存した。これらは恐らく連綴して腕輪となしたものであろう（424～426頁）」と記述される。現存する小玉はガラス製が2点、土製が43点であり、2点不足していることや土製練玉に関する記述がないことが懸念されるが、同書の図版27には現状の連結された状態で「小玉（第123号墳）」のキャプションの下に資料写真が掲載されていることから、当該資料群を総称して「小玉47」と報告していることが分かる。今回の調査では、資料の散逸を防ぐために連結された小玉は実測を行わず、写真撮影を行うに止めた。

縮尺ほぼ実寸

写真 13　第 123 号墳出土玉類・貝製品・石製品

4．貝製品（図10、写真13、表5）

第123号墳出土のものとして、貝輪2点が萩博物館に収蔵されている。当資料に関しても『見島総合学術調査報告』は混乱を来しており、第123号墳出土資料報告にある「他に形体は同じであるが、別に貝輪の一断片が見いだされた。これは環体の厚さ0.4、上下の幅2センチを有し、端に小孔が1つある。推定外径5センチ前後。紐を利用して腕に装着したものであろう（同図3）（本書8頁18～19行）」は文脈が成立していない。元来この文章は、第116号墳出土資料報告にある「貝輪1　イモガイの類を横切りにしたもので環形を示している。環の外径約5.4センチ、環体の上下の高さは1.9センチ、厚さは0.8センチ、内面は平滑でない。一部欠落し完円を示さないがもし腕輪としても大人の腕の篏装には無理である（図版29-2）。（426頁）」に後続する位置にあったと思われ、編集中何らかの理由で第116号墳と第123号墳に分離されたものと想像される。本書掲載においては、現在の収蔵状況のほか、第123号墳石室平面図（図3）に出土位置が示されていること、『見島総合学術調査報告』図版29に両者とも第123号墳出土として写真が掲載されている[註3]ことを根拠とする。

Hsh1はおよそ1/4が遺存するイモガイ製の貝輪。残長4.0㎝、最大幅2.15㎝、最大厚0.43㎝を測る。重量は7.6gで、復元内径は4.4㎝。片側端部に孔が穿たれている。孔径は0.2～0.4㎝。風化が著しいが、内面は平滑に研磨され、外面には薄く格子文が残る。**Hsh2**はおよそ3/4が遺存するイモガイ科アンボンクロザメまたはクロフモドキ製の貝輪。最大外径5.35㎝、最大幅2.0㎝、最大厚0.85㎝を測る。重量は25.28gで、内径は3.8㎝。両者は合わせるとほぼ全周するサイズとなるため、組合わせて使用されていた可能性も否定できない。

5．石製品（図10、写真13、表6）

萩博物館に1点が所蔵される。出土位置図（図3）および出土状況写真（写真3）が存在することから、第123号墳に所属することは確実である。

Hs1は滑石製紡錘車。平面形は正円ではなくやや歪な楕円となっている。直径3.7～3.92㎝、最大厚1.8㎝を測る。重量は45.09g。下面に比して上面が狭く、断面形態は側辺が湾曲するものの台形状となる。側面には研磨痕が良く残り、上面外縁には粗雑な短斜線の装飾が施される。中央の孔は片面穿孔で、上面から穿たれている。孔径は0.7～0.8㎝を測る。

山口県における肉厚断面台形の滑石製紡錘車の出現時期に関しては、集落及び墳墓出土品を見ると6世紀前半代に求められ、7世紀前半代までは確実に出土を見るようであるが、存続時期は不明と言わざるを得ない。現状での分布を見ると、県西部（長門西部）は希薄で、中心は県央部（長門東部から周防西部）～県東部（周防東部）にあるものの、当該期の集落・墳墓遺跡調査例の多寡によるものとも考えられる。

【註】

1）『見島総合学術調査報告』における第116号墳と第123号墳の出土遺物の内容はほぼ同一であることから、いずれかが誤記であることが予想された（横山2011）。今回の調査により、金属器および玉類などの装身具、石製紡錘車は第123号墳に所属することが確定した。

2）実物の所在が明らかではないが、報告例としては明治44年（1911）7月7日に弘津史文氏により調査された御蔵戸キツネビラ古墳出土品が挙げられる（弘津1927）。御蔵戸キツネビラ古墳からは9点の耳環が出土しており、内2点が中空耳環（金環）とされる（弘津1930）。

3）これまでの見島ジーコンボ古墳群出土資料再調査を通じての印象として、『見島総合学術調査報告』における各資料の所属に関しては、本文に比して巻末に付された図版の信憑性が高いように思われる。

第3節　小結

1．見島ジーコンボ古墳群西部域東端支群

第123号墳は、昭和36年（1961）に調査が実施された古墳群西部域の東端支群[註1]（第121～144、158・159、番外1～3号墳）に位置する。この支群は、東隣に設けられた放水路河口部を隔てて古墳群東部域西端と20mほど距離があることから、何らかの被葬者単位を反映している可能性が指摘される。一方で、調査墳が少数であるものの、この支群には西部域西方に見られる箱式石棺系石室でありBⅡ類（扁平な石以外に不整形な石塊も使用するもの）に分類された第124号墳石室、同じくBⅡ類に分類されたものの、地上構築型石室であり巨石が用いられる第137号墳、横穴式石室系でありAⅡ類（石材が小さく粗雑な積み方で、石室も狭く、単純な副葬品を有するもの）に分類された第128号墳石室[註2]、同じく横穴式石室系でAⅡ類に分類されたものの、石室規模及び用いられた石材の大きさ、副葬品の内容からAⅠ類での分類が妥当と思われる第123号墳石室[註3]が存在し、バリエーションに富むことから、西部域西方の支群とは明確に区分する必要があると考える。

2．第123号墳出土遺物の特徴

第123号墳の出土土器に関しては、須恵器供膳器類の遺存状況が悪いため、初葬時期および追葬時期の推定を困難なものとしているが、身蓋の判別に問題が残るもののY1やH2の坏類、Y3の高坏などはひとまず7世紀後半の所属と見なしておきたい。

より問題となるのが土師器である。坏には底部と口縁部の境界に屈曲部を有し、内外面ともに稜を形成するタイプ（H20～23、Y5）と、底部から内湾して口縁に立ち上がるタイプ（H5・6、Y6？）に大別される[註4]。ここに前者を第123号土師器坏a類、後者を土師器坏b類と仮称すると、a類は長い口縁が外方に開きながらも内湾しつつ立ち上がり、口縁内端を肥厚させるもの（H23）も見られ、観察可能な資料に限っては、底部外面に手持ちヘラ削りが、H23以外は口縁部もしくは底部内外面のいずれかにヘラミガキましくはミガキ状のヘラナデが施され、放射線状暗文を有する資料も存在する。

形態だけで見ると類似する土師器坏が周防・長門の古墳時代後期後半から末（6世紀後半～7世紀初頭）に存在することが指摘されており（土師器坏G類：小林2008）、それを根拠として当資料群を該当時期に比定する見解（市来2011）もあるが、手持ちヘラ削りやミガキ等の製作技法上の相違は等閑に付すべきではないと考える。また、土師器坏G類は分布や出土量から見ても周防・長門地域の主体的な供膳器とはなっておらず、現状での見島ジーコンボ古墳群築造開始推定時期との時間的な乖離も大きい。筆者は、都城遺跡に出土する土師器坏H類の地方における一変容形態の可能性や、鬼高式の影響を残しつつ地域化を遂げる相模地域の7～8世紀の土師器坏（國平1983・長谷川厚1992）、さらには器面の黒色処理という技法上の相違を示しつつも形態および器面調整法が類似する東北地方の土師器坏（仲田1989・村田2000・利部2008）など、東日本を含め多地域の古代土師器を検討すべきと感じるが、懶惰にも他地域の実物検討を行えていない。

直立口縁の土師器壺（H29～31）も形態的には古墳時代以来の土師器坩（小型丸底坩）に近く、周防・長門地域では古墳時代後期以降に姿を消す器形である。一方で外面に施されるミガキ状のヘラナデや焼成状態、胎土は上記の土師器坏aに類似しており、古墳群築造開始推定時期を考慮すると、同時期の産物である可能性が高い。これらの土師器についてはさらなる追跡調査が必要となるが、他地域からのご指摘を期待している。

土器以外の資料では、鉄器類は遺存状態が極めて悪く、いずれも原形を保っていない。個体数としては少なくとも鉄刀１口、鉄鏃３本、刀子２本、鎌１丁が存在する。このうち鎌は、『養老令』軍防令備戎具條によると火（兵士10人）ごとに２丁備えることとなっており、個人に所属しない用具と考えられることから、見島ジーコンボ古墳群の性格を考察する上で重要な資料と言える。

第123号墳出土遺物で注目されるのは、装身具である。耳環のうち１点は現在本県に確認できる唯一の中空耳環であり、多量の玉類や貝輪の存在は古墳群の中でも異彩を放っている。玉類に関しては、既往の調査墳では他に第56号墳（勾玉２）、第72号墳（勾玉１）、第154号墳（管玉１、ガラス小玉３）に見られるのみで[註5]、盗掘を受けたとしても遺存する可能性が高い資料であることから、古墳群の被葬者に通有的な装身具であったとは考えがたい（横山2012）。また耳環に関しては、古墳群西部域（第151号墳、第154号墳、第155墳）に限定して出土している。両者の存否は、由来地を含めた被葬者の属性として理解可能ではあるが、埋葬時期差が表出している可能性もある。

以上、小結として第123号墳の概略的特徴を抽出した。見島ジーコンボ古墳群西部域は、現在史跡公園として整備されていることから、調査当時の景観を比較的良く保っており、西部域東端支群には未調査の石室が数多く遺存する。現状では約30基で構成される支群の性格の理解、その中での第123号墳の明確な位置づけは困難であり、遺跡の安寧を願いつつも今後の調査の動向を注視したい。

【註】

1)『見島総合学術調査報告』に付された石室分布図（第38・39図）では、第120号墳が欠落する。ただし、山口大学埋蔵文化財資料館には昭和30年（1960）実施の分布調査にて採取されたと見られる第120号墳出土遺物が存在することから、報告書作成時に番号が欠落した可能性が高い。第120号墳の候補としては、東部域に所在する第128号墳の西隣に見られる石室状の石組みが挙げられる。

2)『見島総合学術調査報告』では、第128号墳はＡⅡ類とＢⅡ類の両方に列記されており（438～439頁）、調査担当者の混乱が見られる。

3)『見島総合学術調査報告』では、ＡⅠ類の分類基準として「須恵器・土師器・銅鏃をはじめ、鉄刀・鉄鏃のような利器や貨銭や玉類・釵子・帯金具等の装身具や鉄鎌・石製紡錘車などを伴っている（438頁：下線部筆者）」と記述しており、第123号墳出土資料を用いている。

4)本文中に記したが、底部に糸切り痕を有するH26は他の資料に比して大きく時期が下ることから、ここでは除外する。

5)『見島総合学術調査報告』には、「見島古墳群から従来発見された遺物」として、瑪瑙製勾玉１、瑪瑙製丸玉２、ガラス小玉１の存在が記されている（437頁）。

表1 出土遺物（土器）観察表

萩①～⑪、山①～④の注記は4頁参照　　法量（ ）は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量（cm） ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
H1	第123号墳 石室内	須恵器 坏蓋	つまみ	つまみ径2.45 ③△1.3	①②灰色(5Y5/1)	密	良好	扁平な擬宝珠形のつまみ。萩⑤単体の資料。
Y1	第123号墳 石室内	須恵器 坏蓋	天井 ～口縁部	①(11.0)　③△2.0	①にぶい黄褐色(10YR5/4) ②にぶい褐色(7.5Y5/3) 断面 灰白色(5Y7/1)	密	やや不良	口縁にかえりを有する。扁平な器形で、天井部から屈曲気味に口縁に下降する。山④単体の資料であり、他に同一個体が存在しない。
Y2	第123号墳 石室内	須恵器 坏蓋	口縁部	③△0.55	①②灰色(N5/)	密	良好	扁平な蓋で、口縁端部を肥厚させわずかに下垂させる。山⑤単体の資料。
H2	第123号墳 石室内	須恵器 坏	ほぼ完形	①11.6 ②9.6 ③3.7	①灰色(N4/)～ にぶい赤褐色(5YR5/3) ②にぶい赤褐色(5YR5/3)	密	やや不良	『見島総合学術調査報告』第24図-25掲載資料。丸底気味の底部から内湾して口縁が立ち上がる。口縁端部は尖り気味に丸く収める。萩⑧と萩⑦・萩⑨・山④が接合。
H3	第123号墳 石室内	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(5Y6/1)	密	良好	小片のため口径復元不能。傾き不明。
Y3	第123号墳 石室内	須恵器 高坏	口縁～脚部	脚裾部径(6.6) 脚部△2.9	①②灰色(N5/～N4/) ～暗灰色(N3/)	密	良好	『見島総合学術調査報告』第24図-24と同一個体と見られるが、該当資料は所在不明。細い中空の脚柱を有し、坏部は口縁との境界に明瞭に段を形成する。口縁端部片は内面に沈線を施すが、確実に同一個体とは言い切れない。脚部は山①、坏底部山③、口縁端部山④。
H4	第123号墳 石室内	須恵器 長頸壷	体部	腹部径(16.8)	①②灰白色(N7/) ～灰色(N4/)	密	良好	器壁が薄く シャープなつくり。内面は回転ナデ、外面はカキ目が施される。萩⑤・⑦・⑪と山④の接合資料。
H5	第123号墳 石室内	須恵器 壺	底～体部	②(11.2) 腹部径(17.6)	①②灰色(N4/)	粗	良好	内面回転ナデ、外面底部付近はヘラ削りが施される。高台の有無は不明。萩⑥・⑦・⑨の接合資料。
H6	第123号墳 石室内	須恵器 壺	頸～肩部		①②灰色(N3/) 灰　灰白色(7.5Y7/2)	密	良好	外面は平行叩きカキ目と見られるが灰が多く 被り不明瞭。内面は同心円当て具痕を部分的にナデ消す。H5と同一個体の 可能性を有す。萩⑤・⑩の接合資料であるが、他に同一個体と見られる資料が萩⑤に1片、萩⑥に3片、萩⑦に9片、萩⑨に1片、萩⑩に1片、萩⑦・⑩の接合資料1片存在する。
H7	第123号墳 石室内	須恵器 壺	体部		①②灰色(N5/)	密	良好	外面は平行叩きをナデ消す。内面は回転ナデを施す。H35と同一個体の 可能性あり。萩⑤単体の資料。
Y4	第123号墳 石室内	須恵器 壺	高台	高台径外端(14.6) 高台径内端(13.2)	①②灰白色(2.5Y8/2)	密	やや不良	「ハ」字状に開く 高い高台で、下端全面で接地する。他に同一個体と見られる破片が存在しない。山①単体の資料。
H8	第123号墳 石室内	須恵器 甕	口縁部	①(37.4)	①赤黒色(2.5YR2/1/) ②灰色(N4/)	密	やや不良	外方に大きく 開く 大甕の口縁部片。口縁端部内面は強い指ナデにより凹み、外面は僅かに肥厚する。口縁外面に沈線を3条巡らせているが、最下線は静止状態で巡らせている。実測図は萩⑩単体資料であるが、同一個体として萩⑦・⑩接合資料、萩⑥・⑦・⑩接合資料が存在する(写真5参照)。
H9	第123号墳 石室内	須恵器 甕	口縁部	①(33.2)	①灰色(N5/) ②灰色(N4/)	やや粗	良好	外方に大きく 開く 口縁部片。口縁端部内面に強い指ナデを施す。外面には鈍い突帯を1条巡らせる。明確に同一個体と見られる体部片が存在しない。萩⑥・⑨と山②・④の接合資料。
H10	第123号墳 石室内	須恵器 甕	口縁部		①②黄灰色(2.5Y5/1)	精緻	やや不良	口縁端部を外方に折り畳み肥厚させる。形状はやや異なるがH36と同一個体の 可能性がある。萩⑥単体の資料。
H11 1	第123号墳 石室内	須恵器 甕	口縁～頸部		①②黒色(N2/) 灰　灰オリーブ色(5Y6/2)	密	良好	口縁端部内外面を強く 指ナデする。頸部2片は接合しないが、剥離面に平行叩き状の圧痕が見られる。外面に灰が多く 被る。上から萩⑨、萩⑦、萩⑦の単体の資料。
H11 2	第123号墳 石室内	須恵器 甕	肩～腹部		①②黒色(N2/) 灰　灰オリーブ色(5Y6/2)	密	良好	器壁が厚い個体で、外面は平行叩きが施され灰が厚く 被る。内面は格子目当て具痕、部分的に同心円当て具痕が残る。内面の剥離が著しい。萩⑤・⑥・⑨・⑩の接合資料。他に接合しない破片が萩⑤・⑥・⑦・⑨・⑩に多数存在する。
H11 3	第123号墳 石室内	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N4/) 灰　オリーブ黄色(5Y6/3)	密	良好	腹部より下位の甕体部片と見られる。外面は左上がりの平行叩き後、部分的にカキ目原体と見られる工具でハケ調整が施され、内面は格子目当て具痕が残る。外面上部にわずかに灰が被る。 『見島総合学術調査報告』第24図-21掲載資料に萩⑥・萩⑩が接合。
H11 4	第123号墳 石室内	須恵器 甕	底部		①灰色(N4/)～ にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰　浅黄色(2.5Y7/3)	密	良好	器壁が厚い甕底部片。外面には平行叩き後ナデ消しが施される。部分的に叩き具でナデている。内面は格子目当て具痕が残るが、灰が多量に被る。H11-1～4は胎土や調整から同一個体と見られる。萩⑤・⑨の接合資料。
H12	第123号墳 石室内	須恵器 甕	肩部		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)	やや粗	良好	外面にカキ目、内面は同心円当て具痕にナデ消しが施される。H13と同一個体と見られる。萩⑤・⑩の接合資料。
H13	第123号墳 石室内	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)	やや粗	良好	外面に左上がりの平行叩き、上半はカキ目が施される。内面は同心円当て具痕にナデ消しが施される。接合しないがH12直下に位置する資料と見られる。萩⑥・⑨と山④の接合資料。
H14	第123号墳 石室内	須恵器 甕	頸～肩部		①②灰色(5Y6/1) 灰　灰白色(5Y8/2)	密	良好	外面は灰が多く 被り調整が不明瞭。格子目叩きか。内面の同心円当て具痕は原体の亀裂が見られる。萩⑥③単体の資料。H37と同一個体の可能性あり。
H15	第123号墳 石室内	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②褐灰色(5YR4/1)	密	やや不良	外面には平行叩きが、内面には同心円当て具痕にナデ消しが施される。萩⑤同士の接合資料。他に萩⑦に1片、萩⑨に1片、萩⑥・⑦接合資料1片の同一個体が存在する。
H16	第123号墳 石室内	須恵器 甕	体部		①暗灰黄色(2.5Y5/2) ②灰黄色(2.5Y6/2)	密	良好	外面は平行叩きが施され、内面は同心円当て具痕が残る。萩⑥単体の資料で、他に同一個体と見られる資料が見当たらない。

萩①～⑪、山①～④の注記は4頁参照　　法量(　)は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
H17	第123号墳 石室内	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(7.5Y6/1)	密	良好	器壁の厚い個体で、大甕の体部片と見られる。外面は平行叩き後に部分的にナデ消しが施され、内面は同心円当て具痕が残る。萩⑥・⑦の接合資料で、他に同一個体と見られる資料が萩⑥に2片、萩⑨に1片、萩⑩に1片、萩⑦・⑨の接合資料1片、山④に2片存在する。
H18	第123号墳 石室内	須恵器 甕	底～体部		①灰色(5Y5/1) 自然釉 透明 ②灰白色(5Y7/1)	密	良好	器壁の厚い個体で、甕の底部付近の破片と見られる。外面には目の細かい格子目叩きが施された後に部分的にナデ消しが行われる。内面は上位に同心円当て具痕、下位に格子目当て具痕が残り、部分的にナデ消しが施される。萩⑥と山④の接合資料で、萩⑤に同一個体と見られる破片が1片存在する。
H19	第123号墳 石室内	須恵器 甕	底～体部	③△8.3	①灰色(N5/)～ にぶい橙色(7.5YR6/4) ②灰色(N6/)	密	良好	丸底の甕の底部片。外面は平行叩き後ミガキ気味のナデが施される。内面は同心円当て具痕が残る。同一個体の破片を含め、外面の剥離が著しい。萩⑤・⑥・⑦・⑩の接合資料。他に萩⑤・⑥・⑦・⑨・⑩に同一個体と見られる破片が多数存在する。
H20	第123号墳 石室内	土師器 坏	ほぼ完形	①12.0 ※ひずみ大 ③4.3	①明赤褐色(2.5Y5/6) ～褐灰色(7.5YR5/1) ②橙色(2.5Y6/6) ～明赤褐色(2.5Y5/6)	密	良好	丸底の坏で、体部から屈曲して長い口縁が開く。口縁端部は内端が肥厚する。調整は底-体部外面は手持ちヘラ削り後不定方向のミガキ、内面はナデ後放射線状の暗文が施される。口縁部は外面が横方向のミガキ、内面はヨコナデが施される。萩④と山④接合資料。
H21	第123号墳 石室内	土師器 坏	ほぼ完形	①12.4～12.7 ③4.95	①②明赤褐色	密	良好	丸底の坏で、体部から屈曲して長い口縁が開き、境界部に段を形成するが、外面のミガキにより部分的に段が消滅する。口縁端部は尖り気味に丸く 収める。調整は底-体部外面は手持ちヘラ削り、内面はナデ後放射線状の暗文が施される。口縁部は内外面とも 斜め方向のミガキが施される。萩④と山④の接合資料。
Y5	第123号墳 石室内	土師器 坏	口縁～体部	①(14.0)	①②にぶい黄橙色 (10YR6/4) ①底部付近 明赤褐色 (2.5YR5/6)	密	良好	H20・21同様の器形と見られるが、坏部が浅い。調整は体部外面は手持ちヘラ削り後ミガキが施される。内面は風化が著しく 観察できない。口縁部は下位が内外面ともミガキ気味のヘラナデ、上位はナデが施される。山④単体の資料。
H22	第123号墳 石室内	土師器 坏	口縁～体部		①にぶい黄橙色 (10YR6/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	密	良好	体部から「く」の字状に屈曲し長い口縁が開く。調整は体部内面はミガキ気味のヘラナデが施され、口縁部は内外面とも ナデが施される。萩④単体の資料。
H23	第123号墳 石室内	土師器 坏	口縁～体部		①橙色(5YR6/6) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	密	良好	体部から鈍く「く」の字状に屈曲し長い口縁が外方に開く。口縁端部は内端を肥厚させる。調整は体部外面に手持ちヘラ削りが、他はナデが施される。萩④単体の資料。
H24	第123号墳 石室内	土師器 坏	口縁～底部	①(12.4) ③4.7	①②明赤褐色(5YR5/6)	密	良好	器壁の厚い個体で、丸底の底部から内湾して口縁に立ち上がる。口縁端部は丸く 収める。調整は底-体部外面は斜め方向のヘラミガキ、内面はナデ。口縁部は内外面とも 横方向のヘラミガキ。萩④と山④の接合資料。
H25	第123号墳 石室内	土師器 坏	口縁～体部	①(13.0)	①暗灰色(N3/)～ にぶい褐色(7.5YR5/4) ②にぶい黄橙色 (10YR6/3)～(10YR7/4)	密	やや不良	器壁の薄い個体で、内湾して口縁に立ち上がる。風化が著しいが、内外面とも ナデ調整と見られる。萩④・⑨の接合資料。
Y6	第123号墳 石室内	土師器 坏	口縁～体部		①②明赤褐色(5YR5/6)	密	良好	端部を欠くが、坏の口縁部片と見られる。外面口縁端部下に沈線が1条巡る。内面調整はナデ、外面は口縁部にナデ、体部に横方向のヘラミガキが施される。山④単体の資料。
H26	第123号墳 石室内	土師器 坏	底～体部	②(6.2) ③△(3.4)	①にぶい黄橙色 (10YR6/6) ②浅黄橙色(7.5YR8/3)	密	良好	『見島総合学術調査報告』第24図-23掲載資料。平底の底部外面に回転糸切り痕が残る。体部は大きく 開くよう で、外面は回転ナデ、内面はナデが施される。接合しない萩④2片を図上復元。
H27	第123号墳 石室内	土師器 高坏	脚部		①②にぶい橙色 (7.5YR6/4)	密	良好	中実の太い高坏脚柱部片。ナデにより縦方向に面を取る。萩③単体の資料。
H28	第123号墳 石室内	土師器 壺か	口縁部	①(11.4)	①②にぶい橙色 (7.5YR7/4)	密	良好	頸部で折損した壺または甕の口縁部片と見られる。内外面とも ナデ調整が施される。萩④単体資料であるが、同一個体と見られる破片が他に見当たらない。
H29	第123号墳 石室内	土師器 壺	口縁～頸部	①(10.8)	①②明赤褐色(5YR5/6)	密	良好	「く」字状に屈曲する頸部からわずかに内湾しつつ口縁が立ち上がるが、H30・31に比して内面屈曲部の稜が鈍い。口縁部外面は横方向にミガキ気味のヘラナデを施す。萩④の単体資料。
H30	第123号墳 石室内	土師器 壺	口縁～体部	①およそ(12.4)	①②明赤褐色(5YR5/6)	密	良好	「く」字状に屈曲する頸部からわずかに内湾しつつ口縁が立ち上がる。口縁端部を 欠失する。口縁および体部外面は横方向にミガキ気味のヘラナデを施す。内面はナデ。焼成具合が異なるがH31と同一個体の 可能性を 残す。萩④と山②の接合資料。
H31	第123号墳 石室内	土師器 壺	口縁～体部		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②明赤褐色(5YR5/6)	密	良好	肩の張らない体部からわずかに外傾して口縁が立ち上がる。口縁端部は欠失。口縁部外面は横方向にミガキ気味のヘラナデを施す。焼成具合が異なるがH30と同一個体の可能性を残す。萩④の単体資料。
H32	第123号墳 石室内	土師器 壺	ほぼ完形	①12.4 ②12.3 腹部最大径13.8 ※ひずみが大きい	①②橙色(7.5YR6/6)	密	良好	丸底で球形の体部に短く 外反する口縁が付く。口縁部内外面はヨコナデ。体部外面は底部付近が削り後ハケとナデ、上半はタテハケ後ナデ。内面上半は斜め方向の削り、下半はナデを施す。萩①と山①・④の接合資料。
H33	第123号墳 地点不明	須恵器 坏	口縁～体部	①(13.8)	①②灰黄色(2.5Y7/2)	密	良好	外方に大きく 開く 坏の口縁部片。内外面とも 回転ナデを施す。3片の接合資料で口径復元。断面図は接合しない同一個体を実測。他に同一個体片1片あり。いずれも 萩⑩。
H34	第123号墳 地点不明	須恵器 壺	口縁部	①(15.6)	①②灰色(N4/)	密	良好	大きく 外反する壺口縁部片。口縁端部は鈍く 面を 取り、外端下部に断面三角形の低い突帯を 巡らせる。萩⑩の単体資料。

萩①～⑪、山①～④の注記は4頁参照　　法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
H35	第123号墳 地点不明	須恵器 壺か	高台	高台径外端(14.5) 高台径内端(13.0) ③3.1	①②灰色(N5/)	密	やや不良	「ハ」字状に大きく 開く 高台で、器壁が厚く 長い。端部は面を 取るが内端で接地する。萩⑪単体の資料。
H36	第123号墳 地点不明	須恵器 甕	口縁部		①黄灰色(2.5Y5/1) ～黒色(10YR2/1) ②褐灰色(10YR4/1)	密	やや不良	口縁端部を外方に折り畳み肥厚させる。形状はやや異なるがH10と同一個体の可能性がある。萩⑩単体の資料。
H37	第123号墳 地点不明	須恵器 甕	口縁～頸部		①②灰色(5Y5/1)	密	良好	器壁の厚い大甕の頸-口縁部片。頸部は直立気味に立ち上がるが、口縁に向けて大きく 外反する。外面は回転ナデ、内面は回転ナデとヨコナデが施される。H14と同一個体の可能性あり。萩⑨単体の資料。
H38	第123号墳 地点不明	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/)	密	やや不良	外面に向きを 変えて並行叩きを 施す。内面の平行当て具痕は部分的にナデ消される。萩⑩単体の資料。

表2 出土遺物(鉄製品)観察表

山③の注記は4頁参照　　法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Hi 1	第123号墳	鉄刀	刀身部	①88 ②42 ③14.5 ④81.33	2片の接合資料。背に原面が、残るが他の鉄器が付着している
Hi 2	第123号墳	刀子か	刀身部か	①32 ②13.5 ③6.2 ④4.52	
Hi 3	第123号墳	刀子か	茎部か	①21.5 ②15.5 ③10 ④7.31	木質は遺存しない
Hi 4	第123号墳	刀装具か		①25 ②13 ③1.9 ④1.40	板状製品で湾曲する。長軸片側に端部が残る。
Hi 5	第123号墳	鉄鏃	頸～茎部	①71 ②頸部7.8 茎部6.7 ③頸部7.9 茎部7.6 ④8.16	長頸式鉄鏃。萩博物館「見島 123号 1961.9.4」と山③が接合。鏃身部と茎端部を欠失。
Hi 6	第123号墳	鉄鏃	鏃身～茎部	①44.5 ②7.7 ③7.0 ④3.97	片刃箭式鉄鏃。茎部欠失。
Hi 7	第123号墳	刀子	刀身～茎部	①45.5 ②14.5 ③7.2 ④8.75	片関の刀子片。刀身切先と茎端部を 欠失。茎部に木質残る。
Hi 8	第123号墳	鉄鎌	身部	①109.5 ②33.5 ③7 ④52.98	刃端部と基部を 欠失。刃部は両刃。
Hi 9	第123号墳	鉄鎌	完形	①163.5 ②30 ③6.8 ④72.73	刃部は鈍く 丸味をおびるが両刃と見られる。第123号墳出土品という 確証はない。参考資料。
Yi 1	第123号墳	鉄刀か		①43 ②25.5 ③4.5 ④10.52	鉄刀の剥離片か
Yi 2	第123号墳 石室	鉄刀か		①27.5 ②30 ③7 ④8.28	鉄刀の剥離片か
Yi 3	第123号墳 石室	鉄刀か		①22 ②19 ③12.5 ④9.46	鉄刀刃部の断片か
Yi 4	第123号墳 石室	鉄刀	茎部	①52 ②18.5 ③9.5 ④15.9	鉄刀茎下端部片
Yi 5	第123号墳	鍔か	半損	①42 ②20 ③7 ④9.34	半円形の鉄片で、側縁は原面が残る
Yi 6	第123号墳 石室	鉄鏃	茎部	①72 ②6 ③5.6 ④3.64	鉄鏃の茎部片。銹割れ・剥離が進行。
Yi 7	第123号墳	鉄鏃	茎部	①26 ②5.4 ③5.3 ④0.97	鉄鏃の茎下端部片。
Yi 8	第123号墳	鉄鏃	茎部	①42.5 ②8.1 ③6.5 ④2.69	鉄鏃の茎部片。銹割れ・剥離が進行。
Yi 9	第123号墳	刀子	刀身～茎部	①56 ②13 ③7.1 ④6.37	両関の刀子片。刀身部の大半と茎端部を 欠失。
Yi 10	第123号墳	鉄片		①34 ②19 ③8.5 ④11.7	
Yi 11	第123号墳 石室	鉄片		①22 ②14 ③6 ④3.82	
Yi 12	第123号墳	鉄片		①28 ②17.1 ③8.5 ④5.61	
Yi 13	第123号墳	鉄片		①47 ②12.5 ③4.7 ④3.47	
Yi 14	第123号墳 石室	鉄片		①34.5 ②13.8 ③5 ④3.48	
Yi 15	第123号墳	鉄片		①39 ②13.3 ③4.5 ④4.38	
Yi 16	第123号墳	鉄片		①33.5 ②12 ③3.6 ④2.77	
Yi 17	第123号墳	鉄片		①31 ②9 ③4.1 ④2.01	
Yi 18	第123号墳	鉄片		①31.5 ②8.4 ③5.6 ④2.0	
Yi 19	第123号墳	鉄片		①28.5 ②10.9 ③4.8 ④2.3	
Yi 20	第123号墳	鉄片		①24 ②12.5 ③3.5 ④1.35	
Yi 21	第123号墳	鉄片		①18 ②15.8 ③3 ④1.24	
Yi 22	第123号墳 石室	鉄片		①16.5 ②14.2 ③5 ④1.88	
Yi 23	第123号墳	鉄片		①20 ②12.7 ③4 ④1.8	
Yi 24	第123号墳	鉄片		①28 ②8.3 ③3 ④1.16	
Yi 25	第123号墳	鉄片		①20.5 ②7.1 ③3.5 ④1.03	
Yi 26	第123号墳	鉄片		①15.5 ②7.9 ③4.8 ④1.17	
Yi 27	第123号墳	鉄片		①18.5 ②6.6 ③4.5 ④0.81	
Yi 28	第123号墳	鉄片		①18.5 ②6 ③3.2 ④0.68	

山③の注記は4頁参照　　法量は残存最大値（）は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Yi 29	第123号墳 石室	鉄片		①11 ②9.9 ③2.5 ④0.53	
Yi 30	第123号墳 石室	鉄片		①10 ②9.3 ③2.8 ④0.41	
Yi 31	第123号墳 石室	鉄片		①10.4 ②8.5 ③2 ④0.29	
Yi 32	第123号墳	鉄片		①15 ②5.9 ③2.5 ④0.38	

表3 出土遺物（銅製品）観察表

法量は残存最大値（）は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Hbr 1	第123号墳	中空耳環	完形	外径28.5～29.5　内径14.5～15.5　軸径6.5～9 ④5.67	両側外面に凹みが残る
Hbr 2	第123号墳	耳環	完形	外径18.0～18.7　内径11.2～11.4　軸径3.8～5.5 ④5.77	銅地金貼（鍍金か）

表4 出土遺物（玉類）観察表

法量は残存最大値（）は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Hb 1	第123号墳	ガラス丸玉	完形	径12.3～12.7 孔径3.5～5 ③8 ④3.22	『見島総合学術調査報告』図版29-4に掲載。深緑色ガラスで、表裏面には渦巻き状に溝が巡る。
Hb 2	第123号墳	ガラス丸玉	完形	径13.5～13.7 孔径1.8～2.8 ③12.6 ④5.44	『見島総合学術調査報告』図版29-4に掲載。深緑色ガラスで球形を呈する。
Hb 3	第123号墳	ガラス小玉	完形	径4.5～5 孔径0.13 ③3～3.2 ④0.1	青色ガラス。
Hb 4	第123号墳	土製練玉	完形	径6.3～6.6 孔径1.6～2 ③4.4 ④0.18	外面黒褐色を呈する。Hb5の破断面から見て土玉と判断する。
Hb 5	第123号墳	土製練玉		外径53.5 内径38 ②20 ③8.5 ④25.31	約1/3が欠失。表面黒褐色、断面茶褐色を呈する。断面に砂状の粒子が見られることから土玉と判断する。
Hb 6	第123号墳	ガラス小玉1 土製練玉41	完形		紐により連結されており、実測は行っていない。青色ガラス小玉1点と土玉41点からなる。

表5 出土遺物（貝製品）観察表

法量は残存最大値（）は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Hsh 1	第123号墳	貝輪		内径（44） ①40 ②21.5 ③4.3 孔径2～4 ④7.6	『見島総合学術調査報告』図版29-2に掲載。全周する貝輪であれば約1/4が遺存する。片側端部に外面から小孔が穿たれている。風化が著しいが外面に格子模様の線刻が施されている。イモガイ製。
Hsh 2	第123号墳	貝輪		外径53.5 内径38 ②20 ③8.5 ④25.28	『見島総合学術調査報告』図版29-3に掲載。約3/4が遺存する。Hsh1と異なり内面が肥厚する。イモガイ科アンボンクロザメまたはクロフモドキ製。

表6 出土遺物（石製品）観察表

法量は残存最大値（）は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量 ①長さ(mm) ②幅(mm) ③厚さ(mm) ④重量(g)	備考
Hs 1	第123号墳	紡錘車	完形	径37～39.2㎜ ③18 ④45.09	断面形態はわずかに台形状を呈す。上面に放射線状に線刻を施す。側面に研磨痕を残す。孔は両面穿孔。

第Ⅲ章　第152号墳出土資料の再調査

第1節　再調査の経緯

第152号墳出土資料に関しては、第153・155・156号墳出土資料とともに、平成24年(2012)4月24日から5月18日にかけて萩博物館にて調査を実施し、翌年に調査報告書を刊行した[註1](横山2013)。

山口大学埋蔵文化財資料館には、3年次調査の初年度、昭和35年(1960)の分布調査時に採取されたと見られる見島ジーコンボ古墳群資料が多数所蔵されている。平成28年度に至って、これらの資料群のうち西部域の遺物整理作業に着手すると同時に、「見島　不明」とされる遺物袋の内容確認も実施した。その過程で「コンテナNO．31　袋NO．28」の内容物が第123号墳出土品であることを確認したのだが(本書第Ⅱ章)、遺物袋に「見島　不明　石室内　カク乱層　1961.9.1」と注記された「コンテナNO．31　袋NO．8」内部に、須恵器54片、土師器28片のほか「1961.9.1　萩市見島　石室内撹乱層　D-40㎝」と記された元袋が存在することを確認した。1961年9月1日は古墳群西部域の第151・152・154号墳を対象に調査が実施されたことが明らかとなっている(横山2015)が、「石室内撹乱層　D-40㎝」は第152号墳にのみ見られる注記であったことから、萩博物館において第152号墳出土品との接合検討を行った。その結果、土師器・須恵器とも萩博物館所蔵資料と接合することが確認されたため、再調査を実施する運びとなった。ここにその調査成果を掲載する。

【註】

1)当時、第152号墳出土資料は山口大学埋蔵文化財資料館に存在しないと思われたため、萩博物館所蔵品のみを報告した。

第2節　第152号墳の出土資料

山口大学埋蔵文化財資料館にて新たに確認された資料は土器に限られる。本稿では、土器資料の図示と遺物観察表は全資料を対象に掲載するが、報告文と写真掲載に関しては、紙面の都合上新たに確認された個体および接合により情報が増加した資料のみを対象とする。鉄器等の資料に関しては、既刊報告書(横山2013)にて確認いただきたい。土器の資料番号については、接合のためH26が欠番となったほかは既刊報告書と変更ない。なお、従来どおり萩博物館所蔵資料と山口大学埋蔵文化財資料館所蔵資料が接合した場合には、収蔵先を萩博物館とさせていただいた。

現在までに確認されている資料の注記は以下の通りである。

【萩博物館】

萩①　遺物カード「152号　表層採集　石室内　撹乱層　D-40㎝　19610901」

萩②　遺物カード「152号　棺外　撹乱土層　西側　19610901」

萩③　遺物カード「152号　棺外　東側　19610901」

【山口大学埋蔵文化財資料館】

山①　元袋注記「1961.9.1　萩市見島　石室内撹乱層　D-40㎝」(コンテナNO.31　袋NO.8)

【石室内出土】

1．須恵器(図11～13、写真14・15、表7)

Y1は坏蓋。扁平な蓋で、口縁端部をほぼ垂直に下垂させ、口唇外面に沈線を1条巡らせる。内外面

面とも回転ナデ調整を施す。小片のため口径復元不能。接合せず色調もやや異なるものの、H1と同一個体である可能性が高い。Y2も坏蓋。扁平な器形で、口縁端部は明確に下垂させず、内端を肥厚させる。小片のため口径復元不能。Y3は山④4片の接合資料で、坏の口縁－底部片。器壁にやや厚みがあり、底部から内湾して口縁に立ち上がるが、口唇部は軽く外反させる。復元口径13.6㎝。内面に灰を多く被っており、胎土や焼成具合から坏底部H8と同一個体と見られるが、接合せず復元径も合致しない。Y4は坏口縁部片。直線的に外方に開く口縁であり、端部は尖り気味に丸く収める。内外面とも回転ナデ調整。復元口径は12.2㎝を測る。外面に灰を被ることから、倒置状態で焼成されたと思われる。Y5は坏口縁部小片。接合せず色調も異なるが、かすかに外反し、端部を尖り気味に丸く収めることから、Y4と同一個体の可能性を有する。Y6は坏底部片。山①2片の接合品である。薄い底部から屈曲して体部が立ち上がる。復元底部径9.5㎝、残高1.95㎝を測る。底部外面中心より3.0～3.6㎝の範囲に回転沈線が施されているが、何を意図したものか不明である。他に同一個体と見られる萩①と山①の接合品が存在する。

Y7～9は高坏裾部片。『見島総合学術調査報告』に「高坏の破片（431頁）」とあるのはこれらの資料を指すと思われる。Y7は扁平に開く裾部で、端部を鳥嘴状に下垂させ、外面に凹線を1条巡らせる。復元裾部径9.0㎝。Y8は緩やかに外反する裾部で、裾下端をわずかに肥厚させる。復元裾部径11.2㎝を測る。Y9も緩やかに外反しながら接地する裾部で、端部を鳥嘴状に下垂させ、外面に強く凹線を巡らせる。接地部には焼成時に溶着した痕跡が残る。復元裾部径8.4㎝。Y8・9は裾内面に灰を被っているが、倒置状態で焼成されたのであろうか。

Y10は長頸壷の肩－腹部片。復元腹部径15.7㎝を測る。内面は回転ナデが施される。外面は自然釉と灰が多量に被るため観察不能。Y11は壺の頸－肩部片。内面頸部下位に接合痕が残る。内外面とも回転ナデ調整が施されるが、外面は灰を被るため調整が不明瞭である。同一個体と見られる破片が山①に8片存在する。

H14は甕体部片。山①1片と接合した。外面は左上がりの平行叩き後部分的にカキ目を施す。内面は同心円と平行2種の当て具痕が残る。H15も甕体部片。こちらは山①2片と接合した。外面は右上がりの平行叩き後部分的にカキ目が施され、内面には右上がりの平行当て具痕が残る。H20は山①1片と接合した。外面は自然釉が流れるため観察不能であり、内面は同心円と平行2種の当て具痕が残る。当て具からH14と同一個体である可能性が高く、当て具が異なるもH19・21も同一個体である可能性を有する。H10はその口縁部か。Y12も甕体部片。外面は右上がりの平行叩き後部分的にカキ目が施され、内面には同心円当て具痕が残るが、内外面ともナデ消しが図られている。

2．土師器（図14、写真15、表7）

再調査により、石室内部には少なくとも5個体の土師器坏が存在したことが明らかとなった。Y13は口唇部を強く外反させる坏口縁部片。上端部はナデにより面を取る。小片のため口径復元不能。Y14は内外面に赤色塗彩が残る坏底部片。内外面ともナデが施される。山①には同一個体と見られる破片が他に2片存在するが接合しない。小片のため底部径復元不能。Y15も坏底部小片。内外面ともナデ後ミガキが施され、底部内面には放射線状の暗文が見られる。H25は坏部に山①10片、高台部に山①6片が接合することによりH26と同一個体であることが判明した完形復元可能な高台付坏で、都城分類では坏BⅢ類となる。底部外端より内側に長い高台が付き、坏部は強く外反させた後に口縁部を持ち上げ、口唇内端に沈線を1条巡らせる。底部の上位にはヘラ削りが施されており、口縁内外面と底部内面はナデ調整が施される。内面にはかすかに放射線状の暗文が残る。

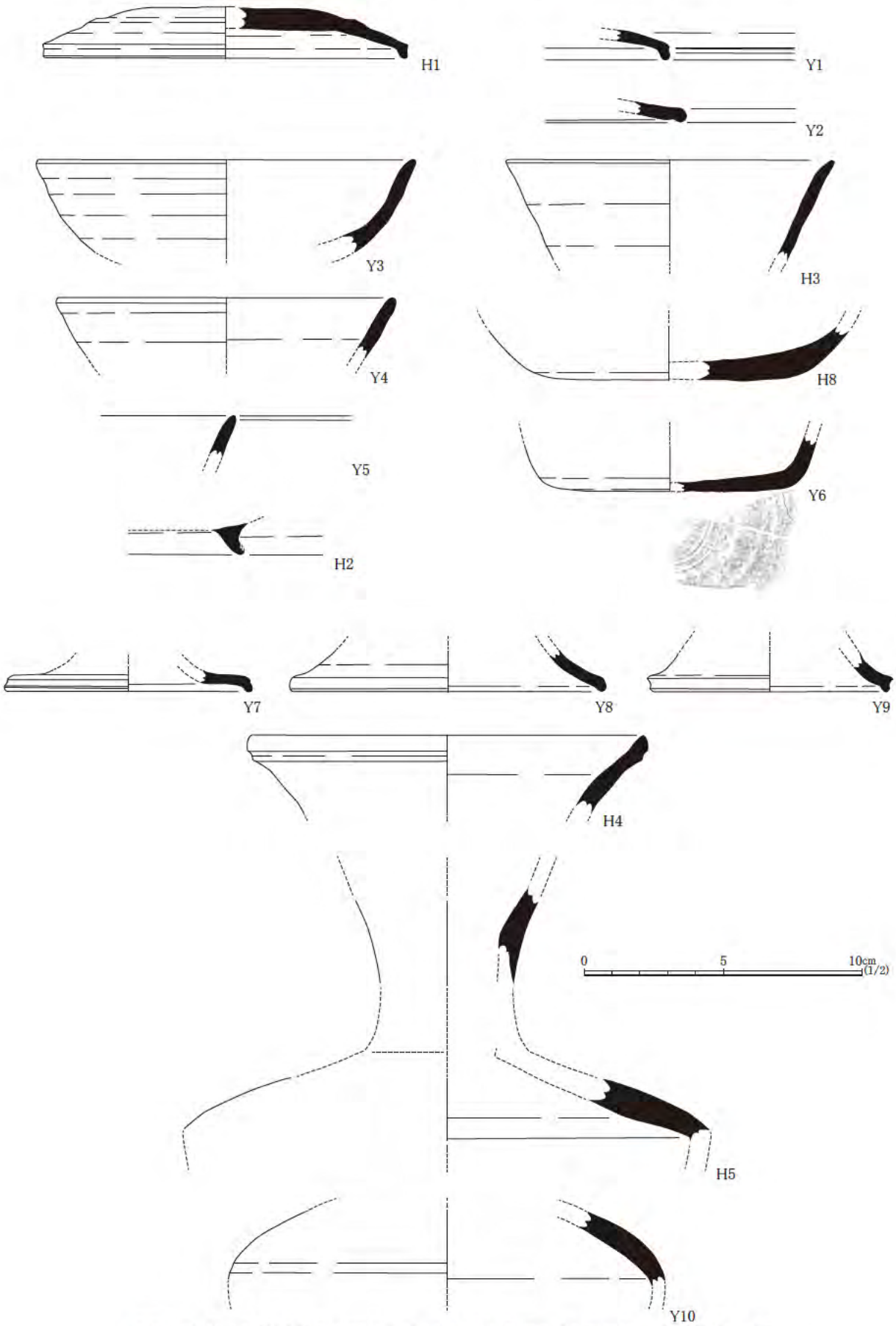


図 11　第 152 号墳「表層採集・石室内撹乱層D-40」「A層」出土土器実測図①

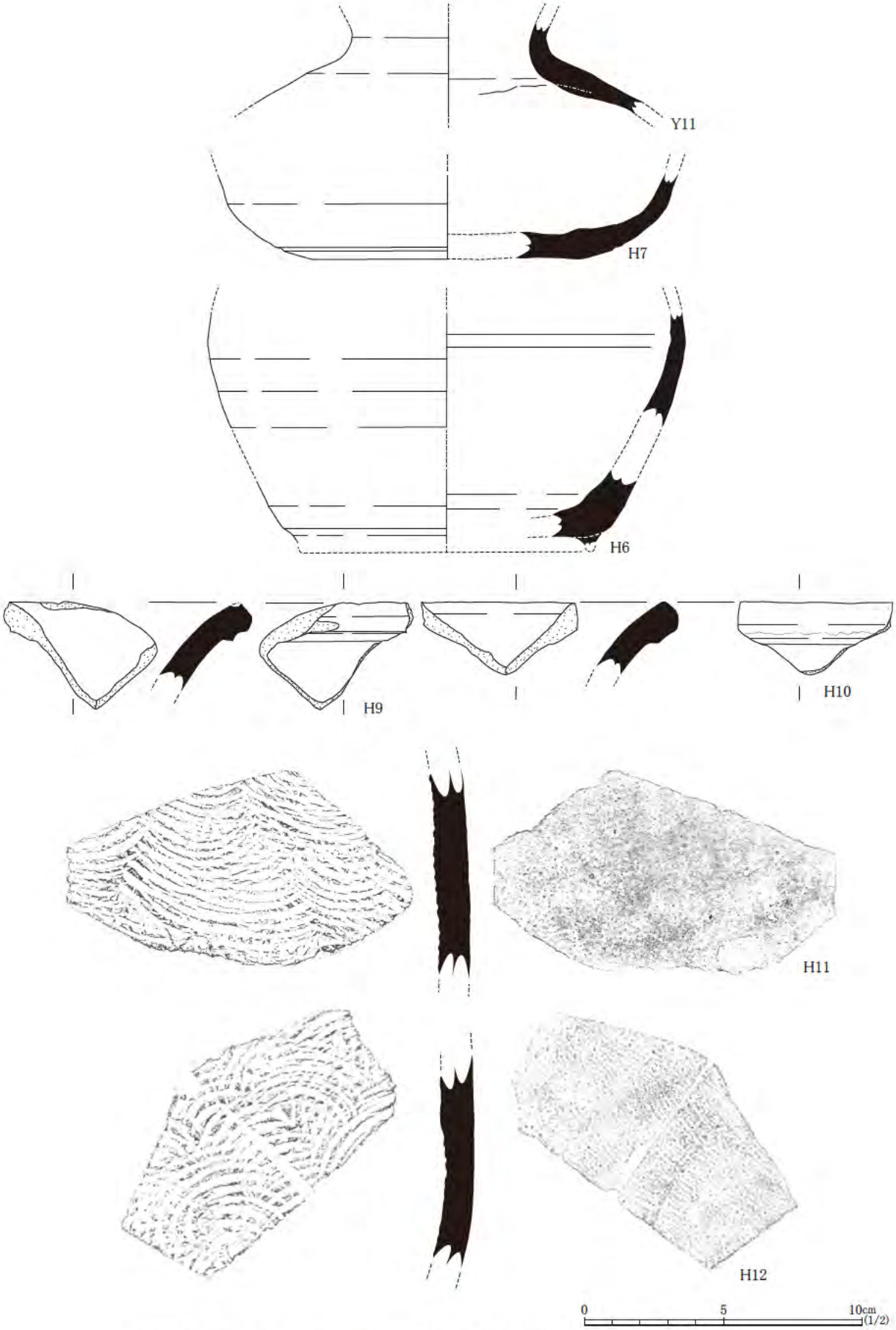


図 12　第 152 号墳「表層採集・石室内撹乱層D-40」「A層」出土土器実測図②

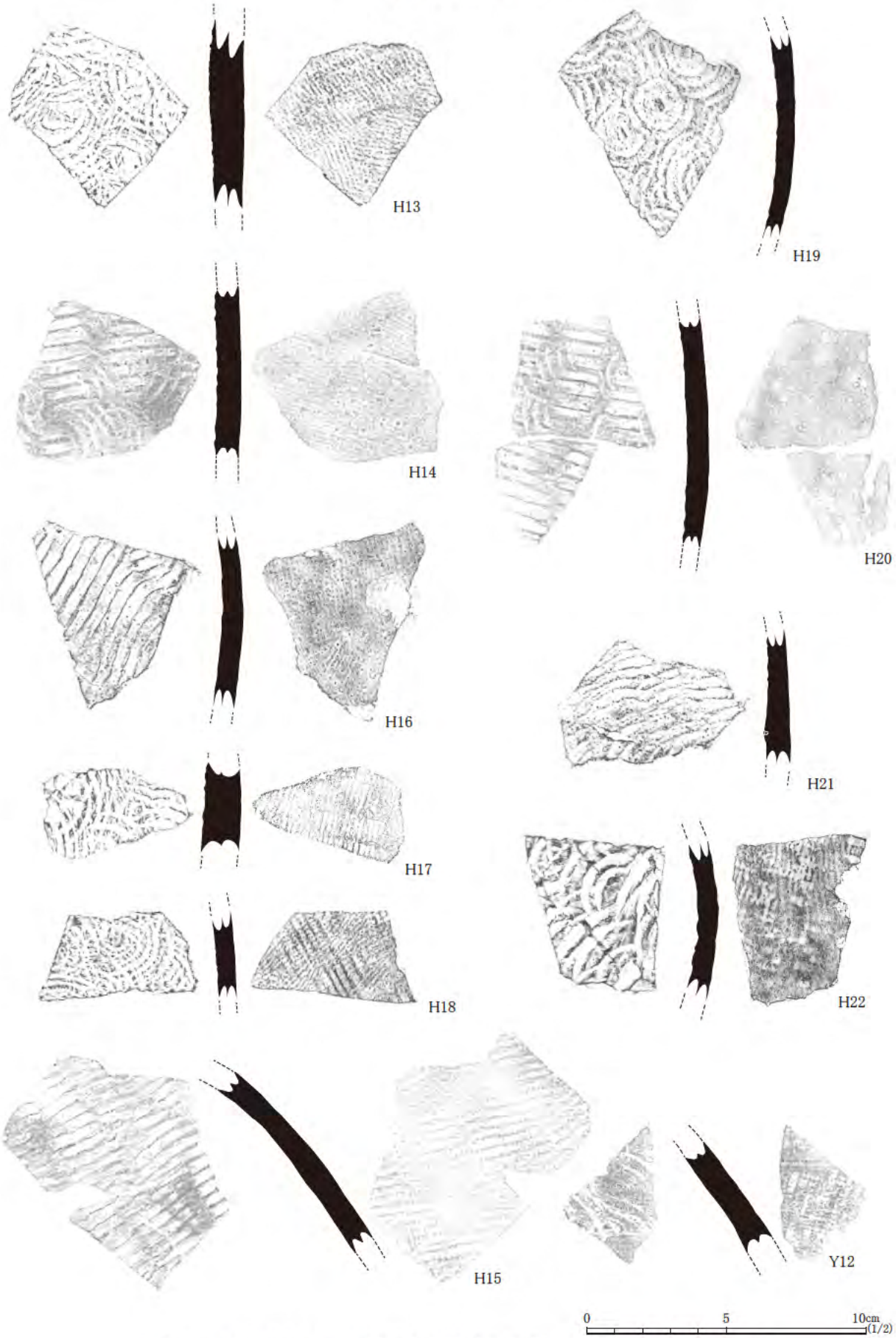


図 13　第 152 号墳「表層採集・石室内撹乱層D-40」「A層」出土土器実測図③

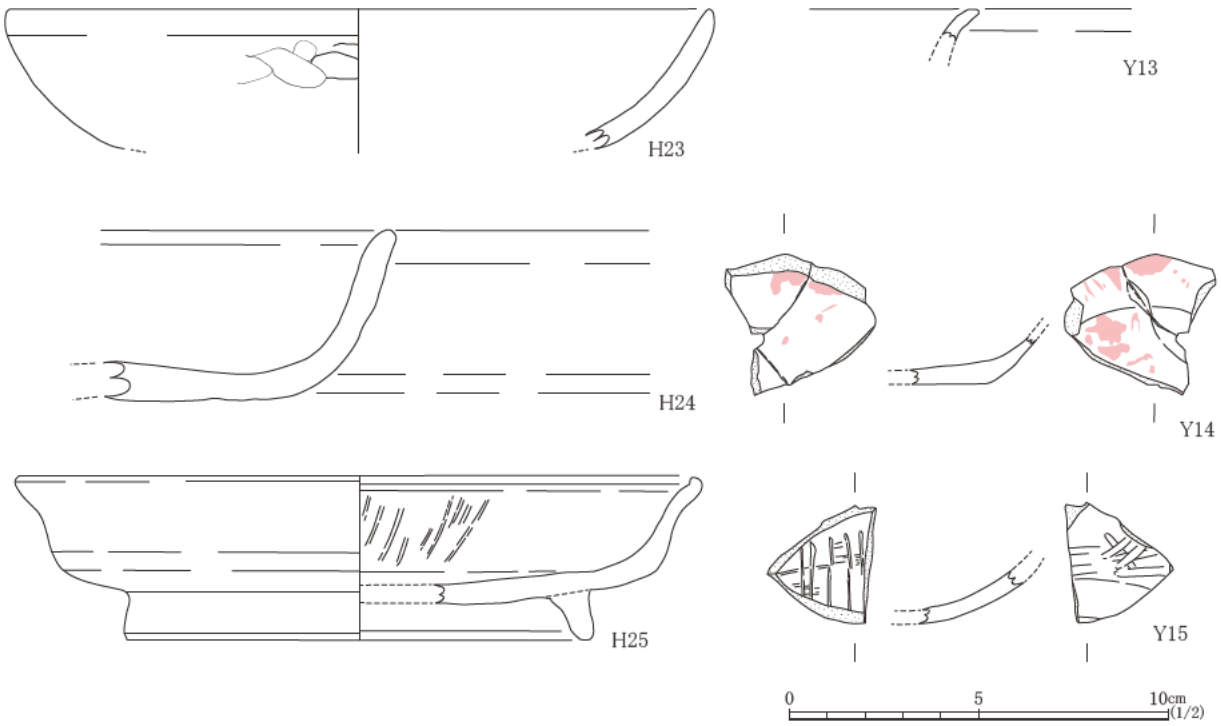


図 14　第 152 号墳「表層採集・石室内撹乱層D-40」「A層」出土土器実測図④

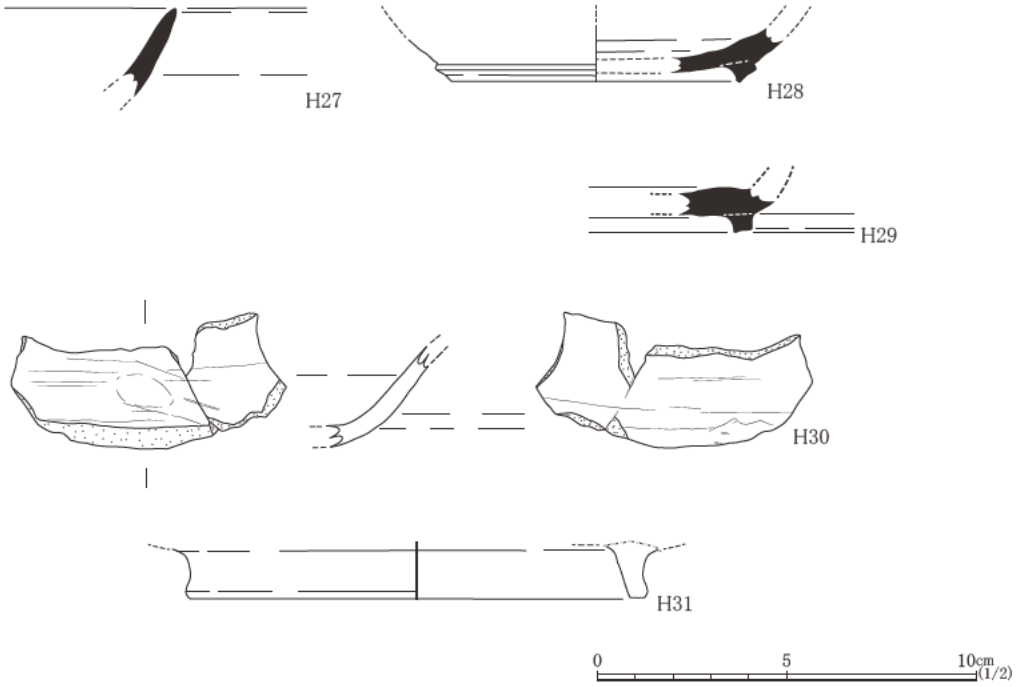


図 15　第 152 号墳「棺外」出土土器実測図

写真 14　第 152 号墳出土土器①

H14-1

H15-1

H20-1

H14-2

H15-2

H20-2

H25-1

H25-2

Y13

Y14

Y15

写真 15　第 152 号墳出土土器②

表7 出土遺物（土器）観察表

萩①～③、山①の注記は36頁参照　　法量（ ）は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
H1	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏蓋	口縁～天井部	①(13.1)　③△1.85	①灰色(N5/) ②灰色(5Y6/1)	密	良好	扁平な坏蓋であり、口縁端部を鳥嘴状に下垂させる。天井遺存部から無つまみの蓋である可能性が高い。口縁外面に被る灰は重ね焼かれた状況を示す。萩①単体の資料。
Y1	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏蓋	口縁部	③△1.05	①②灰色(N4/)	密	良好	扁平な坏蓋の口縁部と見られ、口縁端部を鳥嘴状に下垂させる外端に沈線を1条巡らせている。H1と同一個体である可能性が高い。山①単体の資料。
Y2	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏蓋	口縁部	③△0.7	①②灰色(7.5Y6/1)	密	良好	扁平な坏蓋の口縁部と見られ、ほぼ水平に開く 口縁の端部をわずかに肥厚させる。他に同一個体と見られる口縁部が確認できない。山①単体の資料。
Y3	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏	口縁～体部	①(13.6)	①②灰白色(2.5y7/1)	密	良好	緩やかに内湾しながら立ち上がり、口縁はわずかに外反する。外面および口縁内面は回転ナデが施されるが、体部内面は灰が多く 被るため観察不能。H8と同一個体である可能性が高いが、図上では径が合致しない。山①4片の接合資料。
H3	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏	口縁～体部	①(11.8)　③△2.8	①②灰白色(N7/)	密	良好	口縁部をわずかに外反させる。端部は丸く 収める。内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施される。壷口縁部の 可能性も 有する。萩①単体の資料。
Y4	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏	口縁～体部	①(12.2)	①黄灰色(2.5Y6/1) ②灰黄色(2.5Y6/2)	密	良好	直線的に開く 口縁部片で、内外面とも 回転ナデが施される。口縁端部は丸く 収める。外面に灰が被る。山①単体の資料。
Y5	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏	口縁部		①②灰色(5Y6/1)	密	良好	小片のため口径復元不能。口縁はわずかにわずかに外反しており、内面に少量ではあるが灰を被ることからY3と同一個体である可能性を残す。山①単体の資料。
H2	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 高台付坏	高台	③△1.1	①オリーブ灰色(5Y6/2)	密	良好	接合部で剥離。端部外面を 欠失する。内外面とも 丁寧なヨコナデが施される。輪状つまみ片の可能性も 有する。萩①単体の資料。
H8	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏	底～体部	②(8.2)　③△1.9	①灰白色(2.5Y7/1) ②灰白色(2.5Y8/1)	密	良好	底部外面はヘラ起こし後指ナデ。体部外面は回転ナデ。内面は灰が多量に被るため調整不明。Y3と同一個体である可能性が高いが、図上では径が合致しない。萩①単体の資料。
Y6	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 坏	底～体部	②(6.0) ③△1.95	①灰色(5Y6/1) ②灰オリーブ色(5Y6/2)	密	良好	平底の底部から屈曲気味に体部が立ち上がる。底部外面中央に回転沈線が施されているが、高台の付く 位置ではなく 意図不明。山①2片の接合資料。他に同一個体と見られる萩①と山①の接合品があるが、当資料とは接合しない。
Y7	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 高坏	裾部	③△0.7 裾部径(9.0)	①②灰色(7.5Y5/1)	密	良好	ほぼ水平に開く 高坏脚裾端部を鳥嘴状に下垂させ、端部外面に凹線を巡らせる。復元径から高坏裾部と判断。山①単体の資料。
Y8	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 高坏	裾部	③△1.5 裾部径(11.2)	①灰色(N4/) ②暗灰色(N3/)	密	良好	なだらかに外反して開く 高坏脚裾部片で、丸く 収めた端部をわずかに下垂させる。少量であるが内面に灰を被る。山①単体の資料。
Y9	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 高坏	裾部	③1.4 裾部径(8.4)	①②暗灰色(N3/)	密	良好	焼き歪みが見られる。端部を鳥嘴状に下垂させ、外面に凹線を巡らせる。焼成時に裾端部が溶着したよう で打ち欠いた痕跡が見られるが、内面に多量に灰を被っ ている。山①単体の資料。
H4	第151号墳 A層	須恵器 長頸壷か	口縁部	①(14.2)	①暗灰色(N3/) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	密	良好	『見島総合学術調査報告』第27図-6掲載資料。口縁外面を 肥厚させ、下端に沈線を 施す。内面には自然釉がかかる。萩②単体の資料。
H5	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 長頸壷	口縁部 体部		①黄灰色(2.5Y6/1) 自然釉 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) ②灰色(5Y6/1)	密	良好	胎土および焼成状況より頸部・体部上半が同一個体と判断。肩の張る体部の長頸壷と見られる。外面・頸部内面に灰・自然釉がかかる。両者とも 萩①単体の資料。
Y10	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 長頸壷か	体部	腹部径(25.7)	①暗灰色(N3/) ②灰色(N5/)	密	良好	壺（長頸壷か）の体部片。肩の張る器形で、内面は回転ナデ調整。外面には灰と自然釉が多量に被る。山①単体の資料。
Y11	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 壺	頸～肩部	頸部径(7.0)	①暗灰色(N3/) ②黒色(N2/)	密	良好	屈曲して口縁が開く 壺の頸部片。内外面回転ナデ調整。外面には灰が被る。山①単体の資料。接合しない 同一個体の破片が山①に8片存在する。
H7	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 壷類	体部～底部	②(9.6)　③△3.0	①②褐灰色(10YR6/1) 灰被り部 灰白色(10YR8/1)	密	良好	内外面とも 灰が被り調整不明瞭。底部内面は火膨れしている。萩①単体の資料。

萩①～③、山①の注記は36頁参照　　法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
H6	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 壺類	体部 底部	体部径(17.2) 底部径(11.8)	①灰色(N7/) ②明緑灰色(7.5GY7/1)	密	やや不良	体部は萩①2片と萩③1片の接合資料。底部は萩①単体の資料。胎土・色調・調整より同一個体と判断。高台端部を欠失。体部下位はヘラ削り、上位は回転ナデが施される。内面は回転ナデ。
H9	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	口縁部	③△3.2	①②黒色(N2/) 内面自然釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	密	良好	口縁端部を外方に肥厚させ、下位に断面三角形の凸帯を設ける。端部上面はナデにより面をとる。口縁外面は横ナデ、内面は斜め方向のナデが施される。萩①単体の資料。
H10	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	口縁部	③△2.55	①灰色(5Y5/1) 外面自然釉 灰白色(5Y7/2) ②暗灰色(N3/)	密	良好	口縁端部を外方に肥厚させ、肥厚部を横ナデすることにより凹面を形成する。口縁外面には自然釉がかかる。萩①単体の資料。
H11	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①灰オリーブ色(5Y5/2) ②灰色(N5/)	やや密	良好	外面は自然釉がかかるため不明瞭であるが、平行叩き痕が観察される。内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。萩①単体の資料。
H12	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①黒色～オリーブ黒色 (7.5Y2/1～3/1) ②灰色(7.5Y4・5/1)	やや密	良好	外面は自然釉が薄くかかるため不明瞭であるが、平行叩き痕が観察される。内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。萩①2片の接合資料。
H13	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①黒色～暗灰色 (N2/～3/) ②灰色(5Y5/1)	やや密	良好	外面は平行叩き痕が、内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。萩①単体の資料。
H14	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①黒色～暗灰色 (N2/～3/) ②灰色(N4・5/)	やや密	良好	外面は左上がりの並行叩き後部分的にカキ目が施され、内面には平行および同心円当て具痕が残る。萩①と山①の接合資料。
H15	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰黄色～暗灰黄色 (2.5Y5/1・2)	やや密	良好	外面は右上がりまたはほぼ平行の平行叩きが施され、部分的にカキ目を施す。内面には右上がりの平行当て具痕が残る。萩①と山①2片が接合。
H16	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①青黒色(5B1.7/1) ②オリーブ黒色(5Y3/1)	やや密	良好	外面には平行叩き後カキ目が施される。内面には平行当て具痕が残る。萩①単体の資料。
H17	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N6/)	密	良好	外面には平行叩き痕が、内面には同心円当て具痕とともに車輪文当て具痕が残る。萩①単体の資料。
H18	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①黒色(7.5Y2/1) 外面自然釉 灰オリーブ色(5Y5/3) ②灰オリーブ色(5Y5/2)	やや密	良好	外面に自然釉がかかるが格子叩き痕・カキ目が観察される。内面には同心円当て具痕が残る。萩①単体の資料。
H19	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①オリーブ黒色～黒色 (5Y3/1～2/1) ②灰色(N4/)	やや密	良好	外面には自然釉がかかり、調整が確認できない。内面には同心円当て具痕が残る。萩①単体の資料。H20・21と同一個体と見られる。H10はその口縁部か。
H20	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①紫黒色(5P1.7/1) 外面自然釉 灰オリーブ色(10Y5/2) 灰色(10Y8/1) ②灰色(N4・5/)	やや密	良好	外面は自然釉に覆われ、調整は観察不能。内面は平行当て具痕が残るが、部分的に同心円当て具痕も見られる。萩①2片の接合資料。H19・21と同一個体と見られる。H10はその口縁部か。
H21	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①青黒色(10BG1.7/1) 外面自然釉 灰オリーブ色(7.5Y4/2) ②灰色(N4・5/)	やや密	良好	外面は自然釉に覆われ、調整は観察不能。内面は同心円当て具痕が残るが、部分的にナデが施される。萩①単体の資料。H19・20は同一個体と見られる。H10はその口縁部か。
H22	第152号墳 表層採集 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		外面自然釉 オリーブ黒色(5Y2/2) 灰オリーブ～暗オリーブ (5Y4/2～3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密	良好	外面は自然釉に覆われるが、格子叩き痕が観察される。内面には放射線状に直線が走る同心円当て具痕が見られる。萩①単体の資料。
Y12	第152号墳 石室内 撹乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①②灰色(5Y5/1)	密	良好	外面は平行叩き後カキ目が施され、内面には同心円当て具痕が残るが、両面ともナデ消しが図られている。山①単体の資料。

萩①～③、山①の注記は36頁参照　　法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
H23	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 坏	口縁部 ～体部	①(18.5) ③△3.7	①明赤褐色(5YR5/6) 顔料　赤褐色(2.5YR4/6) ②明褐色～橙色 (7.5YR5.5/6)	やや粗	やや軟	体部から緩やかに内湾し口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く 収める。外面は削り後ミガキ。内面は摩耗が激しいが同様の調整が施されているよう である。外面及び内面の口縁付近に赤色顔料が残る。萩①4片の接合資料。
H24	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 坏	口縁部 ～底部	③△4.5	①にぶい橙色～浅黄橙色 (10YR7/3～8/3) ②にぶい橙色～浅黄橙色 (7.5YR7/4～8/4　10YR8/3)	やや粗	やや軟	平底の底部から屈曲し直線的に立ち上がる坏。口縁は弱く 外反し、端部を丸く 収める。器壁の厚い個体。内外面とも 風化が著しいが、底部外面はミガキ、体部にも 一部ミガキが見られる。萩①3片の接合資料。
H25	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 高台付坏	完形復元 可能	①(17.6) ③3.85 高台径(12.3)	①明赤褐色～橙色 (5YR5/6～6/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4) 塗彩　赤褐色(5YR4/6)	粗	やや軟	山①16片を介してH25とH26が接合。底部外端より内側にわずかに「ハ」字状に開く 長めの高台が付く 。坏部は底部から屈曲気味に立ち上がり強く 外反して口縁に至る。口縁内端に沈線を巡らせる。底部外面はヘラ削り後ミガキが施される。内面には放射線状の暗文が残る。赤色顔料は外面上位・内面暗文部分にのみ遺存する。
Y13	第152号墳 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 坏か	口縁部		①②橙色(5YR6/6)	密	良好	屈曲気味に外反する口縁部片。上端はナデにより面をとる。山①単体の資料。
Y14	第152号墳 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 坏	底～体部	③△1.25	①②橙色(5YR6/6)	密	良好	小片のため底部径の復元不能。平底無高台の坏と見られ、内外面に赤色塗彩が遺存する。山①の単体資料であるが、他に同一個体と見られるも のが山①に2片存在する。
Y15	第152号墳 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 坏	底～体部		①②にぶい橙色(7.5YR6/4)	密	良好	底部から体部にかけての小片。内外面とも ナデ後横方向のミガキが施される。内面には暗文が見られる。他に同一個体と見られる破片が存在しない。山①単体の資料。
H27	第152号墳 棺外 攪乱土層 西側	須恵器 坏か	口縁部	③△2.35	①②黄灰色(2.5Y6/1)	密	良好	外方に直線的に開く 口縁部片。内面には灰が被る。萩③単体の資料。
H28	第152号墳 棺外 攪乱土層 西側	須恵器 高台付坏	底部	高台径　外端(8.5) 内端(7.5) ③△1.4	①②灰色(7.5Y6/1)	密	良好	幅広の低い高台が底部外端に付く 。高台は内端部で接地する。体部は開き気味に立ち上がるも のと思われる。萩③単体の資料。
H29	第152号墳 棺外東側	須恵器 高台付坏身	底部	③△1.2	①②黄灰色(2.5Y4/1)	密	良好	断面方形の小ぶりな高台が底部外端に付く 。高台端部のほぼ全面で接地する。萩④単体の資料。
H30	第152号墳 棺外東側	土師器 坏	体部 ～底部	③△3.5	①暗灰黄色(2.5Y4/2) ②暗灰黄色～灰黄色 (2.5Y4/2～4/1)	やや粗	やや良好	緩く 内湾する体部片。口縁は欠失しているがわずかに外反するも のと思われる。内外面とも 横ナデ調整が施される。萩④2片の接合資料。
H31	第152号墳 棺外東側	土師器 高台	高台	高台外径(12.0) ③△1.5	①②橙色(7.5YR6/6) 塗彩　赤色(10YY5/6)	密	良好	底部付着面で剥離した高台片。丁寧なつくりであり、内外面・端部にまで赤色塗彩が施される。萩④2片が接合。他に同一個体1片が存在する。

第3節　小結

当館の資料管理不備により、2度にわたり同一墳の調査報告を行うこととなり、関係者や多くの方々にご迷惑をおかけしたことをまずはお詫びしたい。

第152号墳石室は箱式石棺系であり、石室長約320cm、幅約60～80cm、高さ約50cmと狭小である。西部域に分布する箱式石棺系石室は総じて遺物遺存状況が不良であるが、これは地表からの深度が浅く、盗掘が容易であったことばかりでなく、内部清掃を丁寧に行わなければ追葬が不能であったことも大きな原因と考えられる。

他の箱式石棺系石室墳同様、遺物の遺存状態が良好と言えない第152号墳出土資料ではあるが、ここでは墳墓の築造(初葬)時期および追葬時期に触れておく。築造時期に関しては、土師器坏H25の存在から8世紀前半を大きく降ることはないと考える。須恵器小型高坏(Y7～9)も同時期と見てさほどの違和感はない。追葬時期に関しては、須恵器坏蓋H1は8世紀中頃～後半の所産と見られ、灰の被り方から同時生産とも見なされるY3～5、H7・8も同時期の可能性がある。H3の須恵器坏は9世紀代に降るであろう。人骨の出土がなく、人類学的な根拠を得られていないものの、上記の資料がいずれも第152号墳に伴うのであれば、8世紀前半から9世紀にかけて少なくとも3度の埋葬が行われたと推定される。

第Ⅳ章　見島ジーコンボ古墳群西部域の出土資料

第1節　資料の由来

昭和35年(1960)から37年(1962)までの3ヶ年に及ぶ見島ジーコンボ古墳群調査は、初年度が分布調査に、2年度が西部域に分布する石室10基(第123・124・128・137・151～156号墳)の発掘調査に、3年度が東部域に分布する石室10基(第1・44・56・番外15・57・番外16・77・81・105・116号墳)の発掘調査に当てられた。

平成22年度から継続的に実施している出土資料再調査により、2年度(西部域)の出土資料は萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に、3年度(東部域)の出土資料は萩博物館にのみ収蔵されていることが明らかとなったが、これとは別に、山口大学埋蔵文化財資料館には未発掘であるはずの墳墓出土品が多数存在している。大半は出土年月日が残されておらず、わずか2袋に「見島　69号　玄室内　60□□□□」「見島　80・81号　□□0904」(□は判読不明)の文字が見られるばかりである。これらの資料はどのような経緯で採取され、収蔵されることになったのだろうか。

『見島総合学術調査報告』によると、初年度の調査は「第1年度の基本調査は100分の1の古墳分布図を作るとともに、各古墳に番号をつけこれを東南端の晩台山の方から数えてすべて174基を明かにし、各古墳にはペンキで番号をつけ図面と対象させるとともに将来の保存にも資することにした。また地上に散乱している須恵器破片等を採集した(368頁:下線筆者)」とされる。

この記述を読む限りでは、当館に所蔵される未発掘墳の資料は、その量の多さから多少の疑念は残る[註1]ものの初年度の分布調査にて表面採取されたものと思われる。

【註】

1)『見島総合学術調査報告』には「まず初年度の予備調査で、外部的な観察から識別できる石室の分布とその遺存状態を明らかにして、調査にふさわしい古墳を選択し(409頁:下線筆者)」という記述が見られる。作成された分布図を見ても、石室の天井石や側石が比較的しっかりと記入されている。見島総合学術調査にて民俗班の調査員を務めた宮本常一氏が昭和35年(1960)に撮影した古墳群東部域の写真を見ると、積石によるマウンドは比較的良好に保たれており、開口部のみが顔をのぞかせる墳墓が多数存在したようである(宮本常一データベース[http://www.towatown.jp/database/]NO.3163～3167・3169)。「遺存状態を明らかにする」という目的で、石室の輪郭を出すため多少の掘削が加えられた可能性が指摘される。

表8　山口大学埋蔵文化財資料館所蔵見島ジーコンボ古墳群西部域資料

	コンテナ番号	袋番号	整理記号	須恵器	土師器	その他	備考
第127号墳	32	24	MJ127Y	3片			元袋注記「S-3」
第133号墳	33	17	MJ133Y	1片			第134号墳出土須恵器壺と接合 元袋注記「S.□J」
第134号墳	33	18	MJ134Y	18片	2片		第133号墳出土須恵器壺と接合 元袋注記「S 33 内 O 2 H-1」
第136号墳	32	11	MJ136Y	1片			元袋注記「S-2」 第140号墳出土須恵器横瓶と接合
第140号墳	33	13	MJ140Y	6片			元袋注記「S-6 ◺1」
第141号墳	32	1	MJ141Y	14片			
第142号墳	34	7	MJ142Y	9片	2片	人骨	元袋注記「S-8 H－3」
第143号墳	34	4	MJ143Y	4片	1片		元袋注記「S-5 内底J□)」
第144号墳	32	22	MJ144Y	7片			元袋注記「□□□」
第148号墳	33	16	MJ148Y	1片			元袋注記「1S12J」
第159号墳	32	20	MJ159Y	3片	1片		元袋注記「Sカ－2カ」
番外2号墳	32	26	MJ外2Y	2片	1片		元袋注記「S-2 Mカ－3」

□は判読不能

第2節　西部域の出土資料

1．資料の概要（図16、表8）

平成28年度で見島ジーコンボ古墳群西部域既往発掘墳の出土資料再調査が終了することに伴い、分布調査時に西部域にて採取された資料も合わせ調査を行った。その結果12基（第127・133・134・136・140～144・148・159・番外2号墳）の資料が存在することが明らかとなった（表8）。昭和36年（1961）の調査墳と合わせると西部域に分布する大半の墳墓から何らかの資料が獲得されていることになる（図16）。資料は土器が主体で、人骨は第142号墳に確認されたが（本書付篇参照）、金属器は存在しなかった。

各資料が収納された遺物袋には、調査当時のものと見られる元袋が同封されていた。元袋には「見島○号」の他に「S」をはじめとするアルファベットや数字が記されていたが、赤色油性ペンが使用されたため現在では判読不能な文字が多い。分布調査のグリッドなどを示す記号であろうか。

2．各墳出土土器（図17～23、写真16～20・15、表9）

【第127号墳】（図16、写真16）

いずれも須恵器である。MJ127Y1は甕の肩部片と見られる。体部には目の細かい平行叩きが施され、内面には同心円当て具痕がそのまま残る。MJ127Y2は壺の肩部片。外面は自然釉と灰が多く被り不明瞭であるが、内外面とも回転ナデ調整が施されているようである。MJ127Y3は壺甕類の底部片か。外面はケズリ気味のナデ、内面は横ナデが施される。

【第133号墳】

須恵器1片が存在するが、北西に隣接する第134号墳採取の須恵器壺（MJ134Y1）と接合した。

【第134号墳】（図17・18、写真17）

土師器が2片存在するが、いずれも体部片であり図化を行わなかった。報告資料は全て須恵器である。MJ134Y1は壺。口縁から腹部下までの接合品である。復元口径17.1㎝、残高は口縁下21.0㎝を測る。体部の歪みが大きいが、復元腹部径は23.2㎝。体部は球形を呈し、屈曲する頸部から口縁が短く立ち上がり、端部は面を取る。口縁内端をわずかに肥厚させる。体部外面は縦方向の平行叩きが施され、部分的にカキ目が施される。内面は同心円当て具痕をそのまま残す。体部外面は所々火膨れを起こしており、自然釉が流れる。不可解であるのは、腹部外面下方に溶着した坏高台または坏口縁を打ち欠いた痕跡が残る（口径8.5～9.0㎝程度）が、その溶着位置とともに打ち欠かれた内部空間にまで自然釉と灰が多量に被っている点である。MJ134Y2は甕口縁部片。外方に大きく開く口縁で、端部を丸く収めるが内端を欠失している。小片のため口径復元不能。口唇外面下位に低い断面三角形状の突帯を2条巡らせる。MJ134Y3は甕体部片。外面は右上がりの平行叩き後部分的なカキ目が施される。内面の同心円当て具痕は青海波文状に残る。MJ134Y4は甕の頸－肩部片。外面には格子目叩きが施され、内面の同心円当て具痕は下位にナデ消しが図られている。MJ134Y5は甕体部片。外面には左上がりの平行叩きが施され、内面の平行当て具痕はナデ消しが図られている。

【第136号墳】

須恵器1片が存在するが、東南東に約8m離れる第140号墳採取の横瓶（MJ140Y2）と接合した。

【第140号墳】（図19、写真17・18）

いずれも須恵器である。MJ140Y1は坏の口縁部片。器壁の厚い個体で、口唇部はやや窄まり、端部を丸く収める。内外面とも回転ナデ調整。MJ140Y2は横瓶と見られる。内面に灰が被るため、底部付近

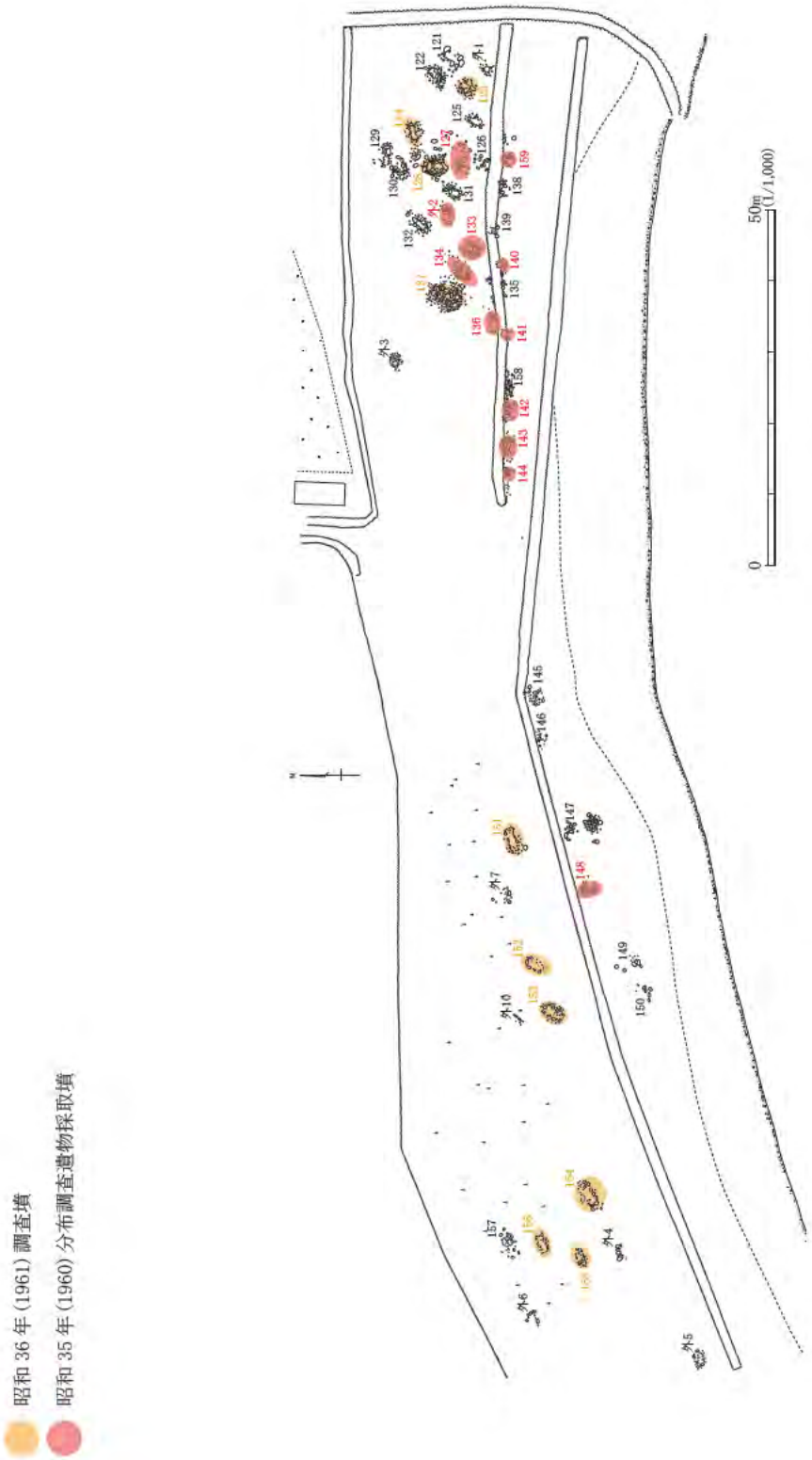


図16　見島ジーコンボ古墳群西部域石室分布図

の破片である。外面は不定方向に平行叩きが施され、上位は粗く、下位は丁寧にナデ消しが図られる。内面の平行当て具も不定方向に当てられるが、原体幅が細く、押圧が強い。MJ140Y3は長頸壷の肩部片。算盤珠形を呈する体部の肩部と見られ、外面は右上がりの平行叩き後カキ目が施される。内面の同心円当て具痕はそのまま残す。MJ140Y4は器壁が厚いことから大甕の体部片と見られる。外面は横方向にランダムな平行叩きが施される。内面には平行と同心円２種の当て具痕が残るが、ナデ消しが図られている。MJ140Y5も甕体部片。外面は左上がりの格子目叩き後カキ目が施される。内面の同心円当て具痕には直交方向の亀裂が1条見られる。

【第141号墳】(図20、写真18)

いずれも須恵器。MJ141Y1は甕の口縁－頸部片。屈曲する頸部から外傾して大きく口縁が開く。口縁端部は鈍く面を取り、口唇外面下位に突帯を1条巡らせる。口縁外面と頸部内面に部分的に自然釉がかかる。復元口径は22.0㎝。MJ141Y2も甕口縁部片。緩やかに外反する口縁で、端部は鈍く面を取る。口唇外面下位に小ぶりの突帯を1条巡らせる。口唇部と内面は回転ナデ、外面突帯下位には原体幅1.3㎝の板ナデが施される。MJ141Y3は壺甕類の口縁部片か。小片のため図上反転復元しないが、内端径は32～34㎝程度となる。緩やかに内湾しており、内端をわずかに肥厚させる。MJ141Y4は甕体部片。外面は縦方向の平行叩きが施される。内面には車輪文当て具痕が残るが、第124号墳(H8:横山・川島2016)、第152号墳(H17:本書再掲)のものとは原体が異なる。MJ141Y5は甕の肩部片か。外面には右上がりの平行叩きが施され、内面の同心円当て具痕はそのまま残す。外面に焼き爆ぜが見られる。MJ141Y6は壺か。内面に灰を被ることから、底部付近の破片と見られる。外面には不定方向の平行叩きが施される。内面には平行当て具または同心円当て具外縁が強く押圧されている。

【第142号墳】(図21、写真19)

須恵器6点、土師器1点を掲載する。MJ142Y1～6は須恵器。MJ142Y1は大甕の体部片。外面には縦方向の平行叩きが施されているが、ナデおよびカキ目で痕跡はほぼ消滅している。内面の同心円当て具痕も丁寧にナデ消しが施されている。MJ142Y2は甕の体部片。外面には格子目叩き後カキ目が施される。内面の同心円当て具には直交方向の亀裂が1条見られる。東方に約20m離れているが、第140号墳にて採取されたMJ140Y5と同一個体である可能性が高い。MJ142Y3も甕の体部片。外面に平行叩きが施され、内面には同心円当て具痕が残る。MJ142Y4も体部小片。外面には目の細かな格子目叩きが施され、内面は同心円と平行当て具2種が併用されている。MJ142Y5は壺甕類の底部片。外面には縦方向の平行叩きが施されているが、内面は指で押さえられている。MJ142Y6は長頸壷の肩部片。体部は球形を呈し、頸部の付け根で折損している。内外面とも回転ナデが施され、外面には自然釉が被る。MJ142Y7は土師器の高台付坏底部片。小ぶりの高台は端部が丸みを帯びている。内面の剥離が著しいが、赤色塗彩がわずかに残る。復元高台径7.0㎝を測る。

【第143号墳】(図22、写真19・20)

須恵器4点、土師器1点を掲載する。MJ143Y1～4は須恵器。MJ143Y1は高台付坏の底－体部片。底部外端付近に断面方形の小ぶりな高台が着く。高台底端部は凹み、内端と外端で接地する。体部は直立気味に立ち上がるが、口縁は軽く外反するようである。高台外端復元径8.0㎝、残高2.9㎝を測る。MJ143Y2は甕体部片。外面に平行叩きが施される。内面は平行当て具後に車輪文当て具が当てられている。MJ143Y3もMJ143Y2と同様の特徴を有するが、外面は灰を被り、内面の車輪文当て具はやや小さい。成形や焼成時における収縮の差であろうか。MJ143Y4も甕体部片。外面の平行叩きおよび内面の同心円当て具が明瞭に残る。MJ143Y5は土師器坏体部片か。外面は風化が著しく調整が観察で

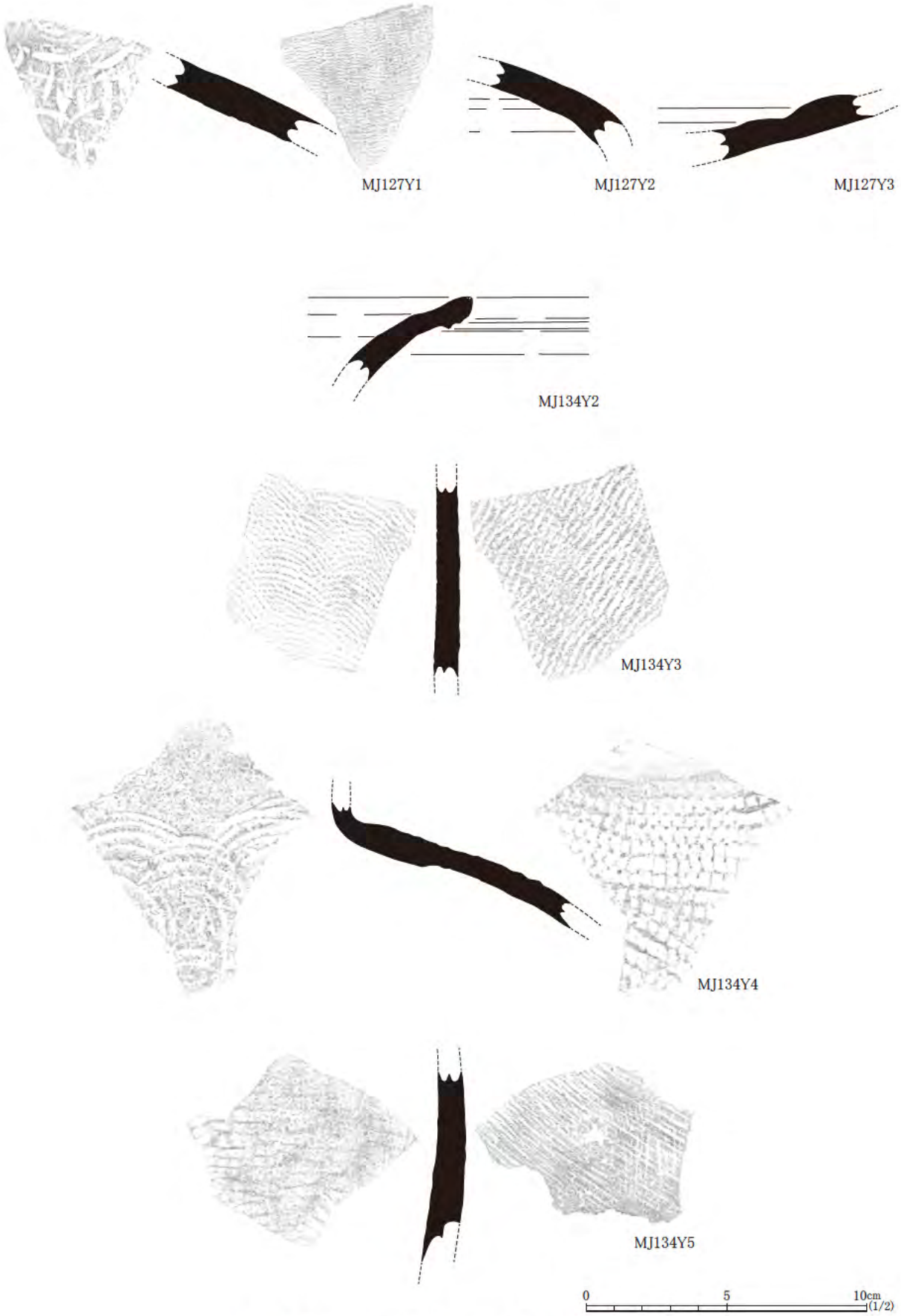


図 17　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器実測図①

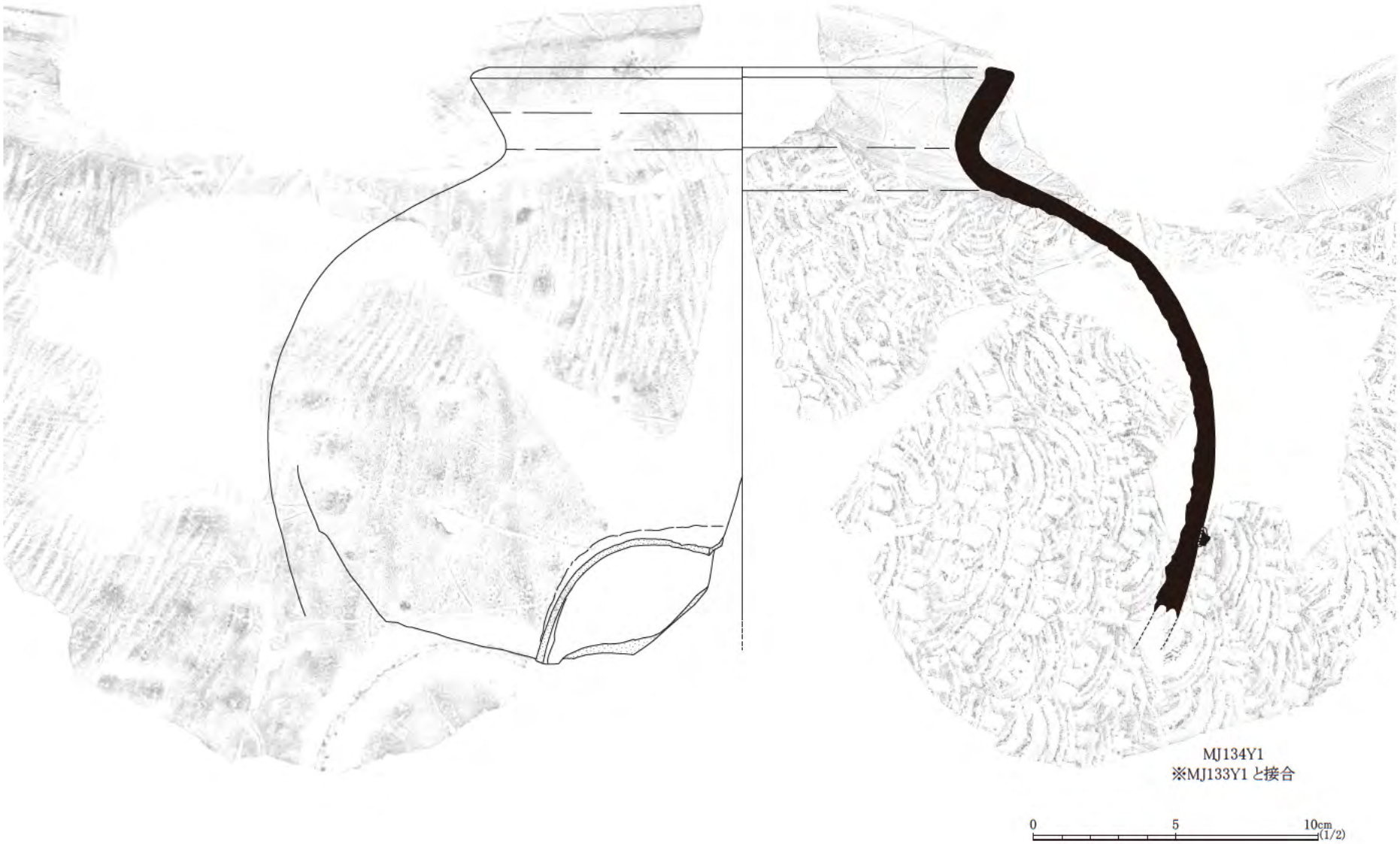


図 18　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器実測図②

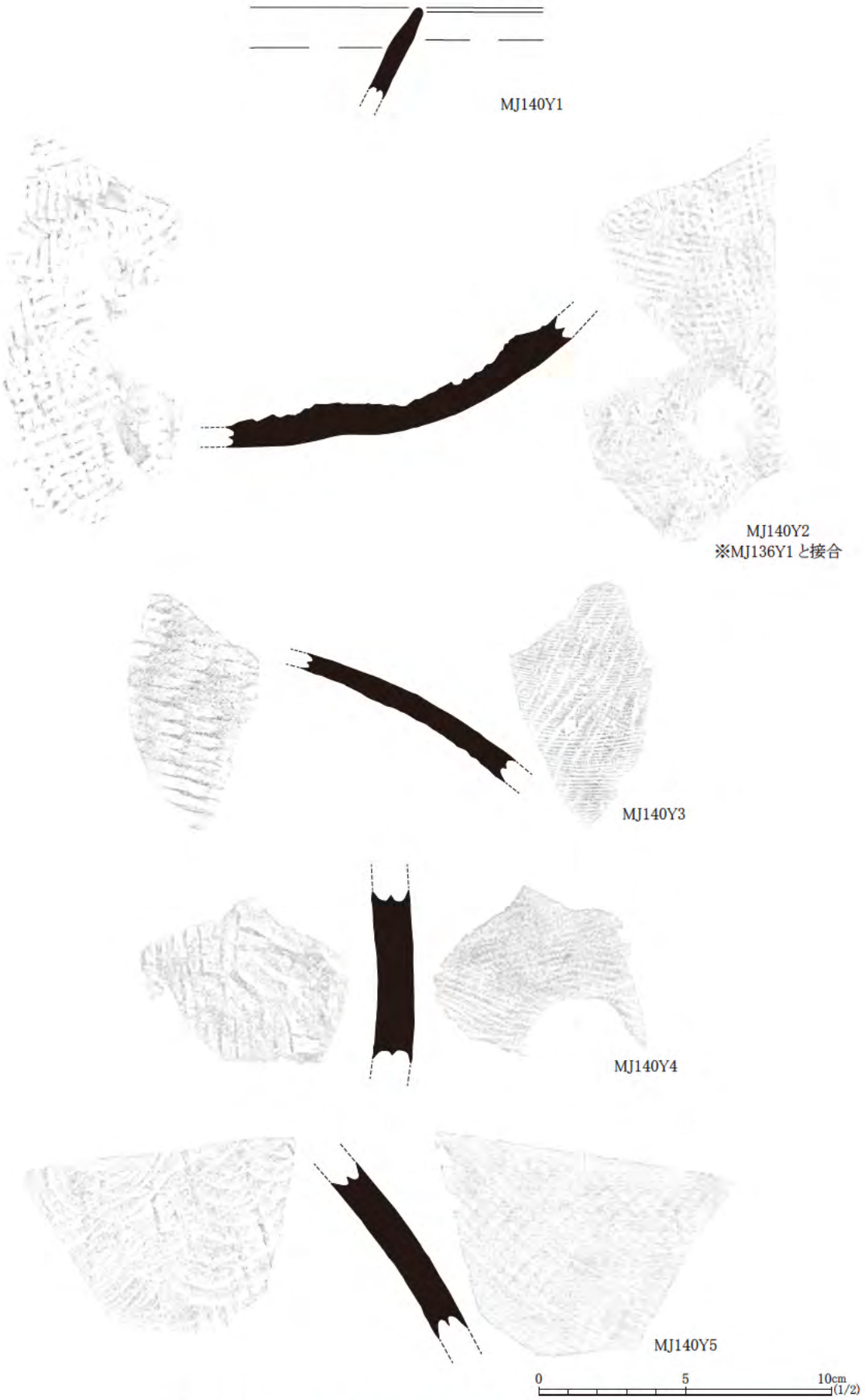


図 19　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器実測図③

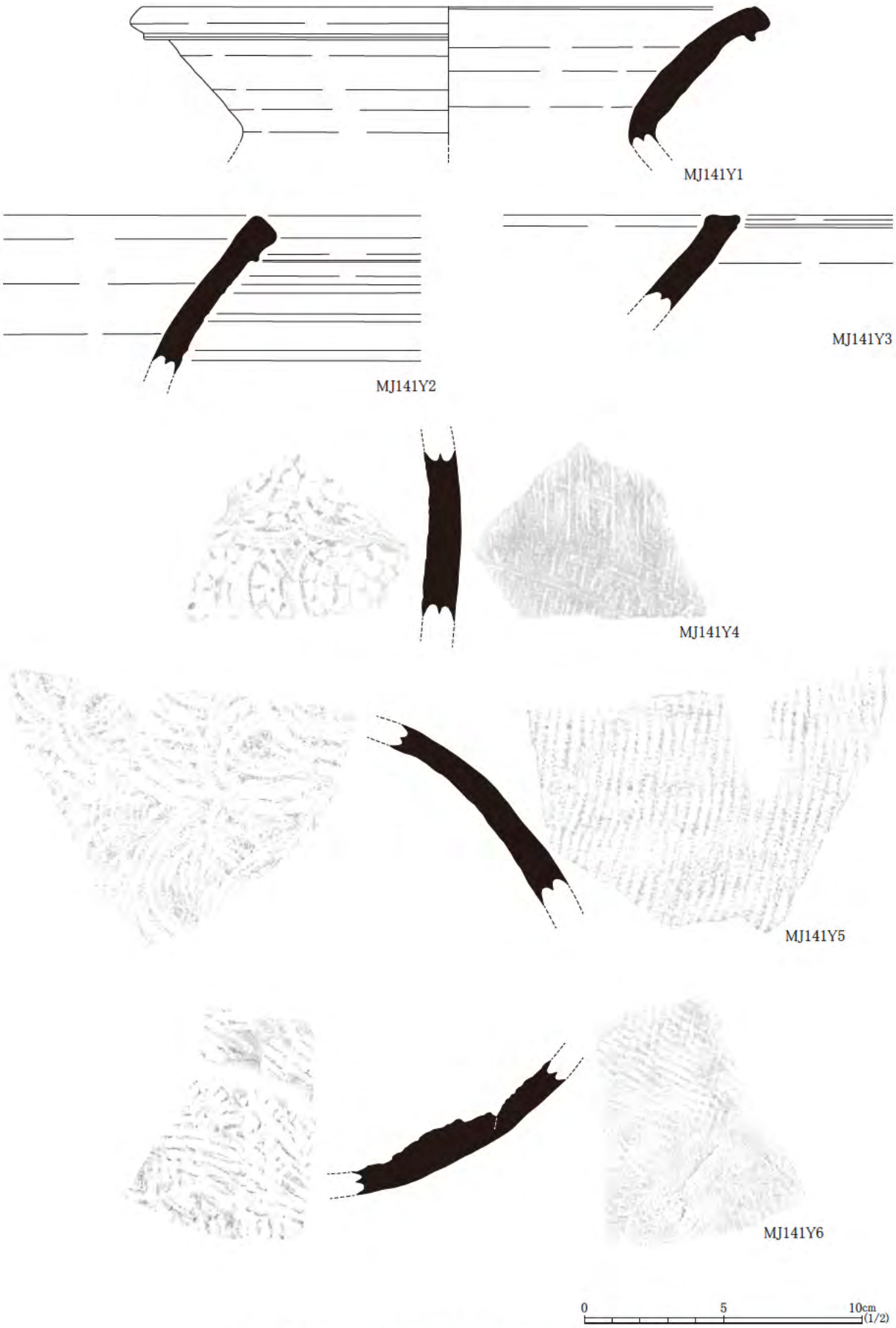


図 20　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器実測図④

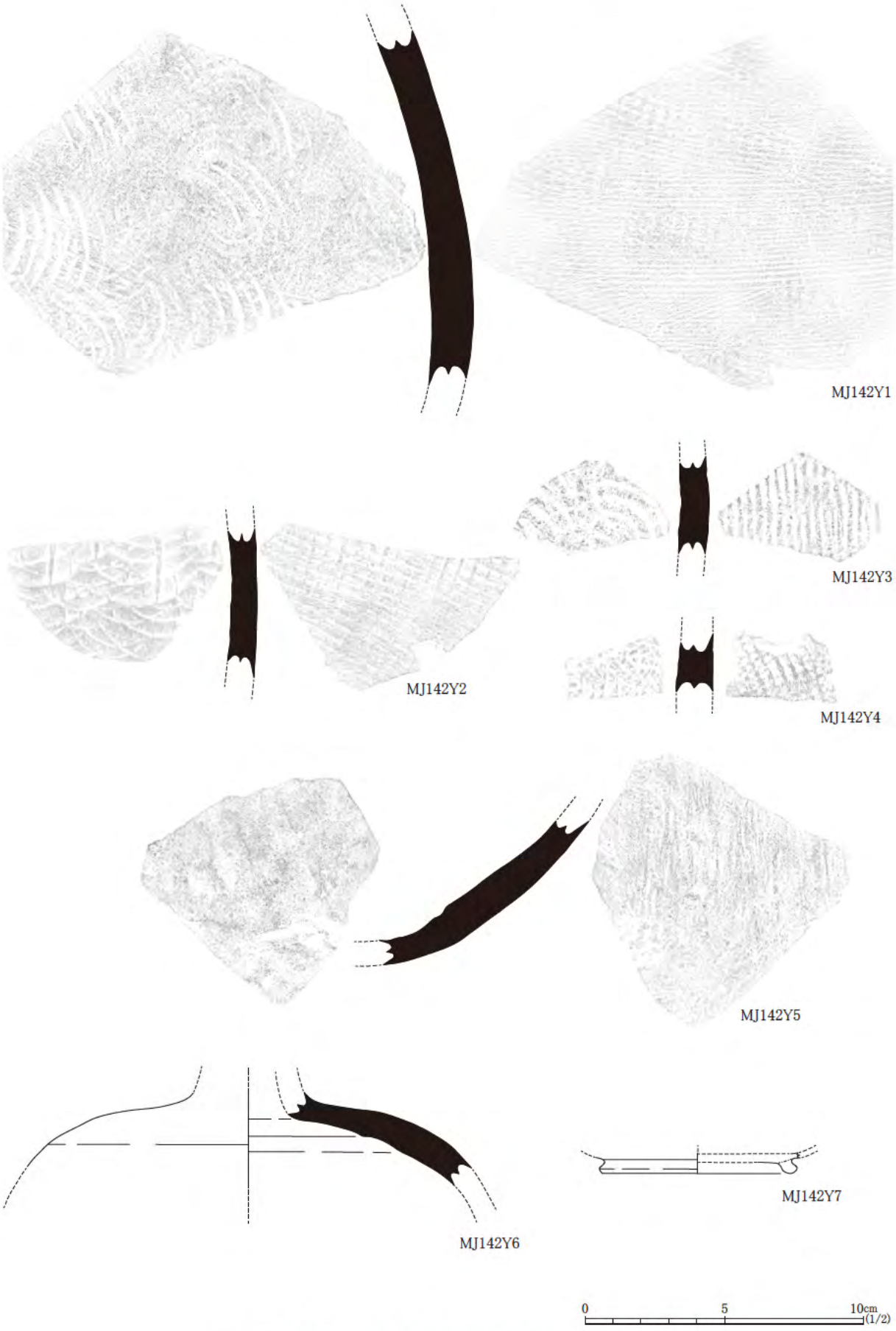


図 21　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器実測図⑤

きない。内面はヘラミガキ後放射線状の暗文が施されている。

【第144号墳】（図22、写真20）

採取された土器はいずれも須恵器である。MJ144Y1は甕の頸－肩部片。頸部が強く屈曲しており、肩部外面の平行叩きはナデ消しが図られている。内面は回転ナデが施される。MJ144Y2は甕体部片。焼成不良で土師質となっている。外面には平行叩きが施され、内面の同心円当て具痕はナデ消しが図られている。

【第148号墳】（図22、写真20）

須恵器1点が存在するMJ148Y1は甕の口縁－頸部片。焼成不良で土師質となっている。頸部は強く屈曲し、口縁は緩やかに外反しながら大きく開く。口縁端部は鈍く凹んでいる。口唇外面下位に断面半円形の突帯を1条巡らせる。全面回転ナデ調整が施される。

【第159号墳】（図23、写真20）

掲載は全て須恵器である。MJ159Y1は甕の頸－肩部片。器壁が厚い個体で、復元頸部径は21.2㎝を測る。頸部内面は回転ナデ調整が施され、肩部内面に平行当て具痕が残る。外面は自然釉を被るため不明瞭であるが、回転ナデ調整が施されているようである。MJ159Y2は甕体部片。外面に平行叩きが施され、内面の同心円当て具痕は粗くナデ消されている。

【番外２号墳】（図23、写真20）

掲載はいずれも須恵器。MJb2Y1は壺甕類の体部片。器壁の薄い個体で、外面は左上がりの平行叩き後カキ目が施される。内面の同心円当て具痕はそのまま残す。MJb2Y2は甕の頸部片。精選された胎土で、焼成も良好である。内外面とも回転ナデが施される。

第3節　小結

本章では、昭和35年（1960）に実施された分布調査にて採取されたと見られる見島ジーコンボ古墳群西部域出土資料の報告を行った。破壊が著しい箱式石棺系石室が多く分布する西部域だけあり、東部域に比べると採取された土器数も少ない[註1]。土器の大半は須恵器であり、器種は壺甕類が圧倒的に多いが、内面に車輪文当て具痕を有するもの（MJ141Y4やMJ143Y2・3）などあり、貴重な情報を与えてくれている。

また、墳墓を越えて接合する資料が存在している（第133号墳採取品と第134号墳採取品、第136号墳採取品と第140号墳採取品）点は注意が必要である。これまでの出土資料再調査では、墳墓をまたいだ接合検討は行っていない。分布調査西部域採取資料は少数であったために目が行き届いたが、発掘調査にて出土した資料は破片数が膨大であることから、よほどの特徴を有していない限り墳墓をまたぐ接合検討は困難に思われる。西部域発掘墳の資料再調査では、石室内より出土したものをひとまずは石室に所属するとして報告を行った。次年度以降、東部域発掘調査墳の出土資料再調査に取り組む所存であるが、今後はより慎重に資料を検討する必要性を感じている。

【註】

1）現在、東部域における分布調査採取資料を整理中であるが、平均すると各墳約10片の採取があり、40片を超えるものもある。総数も700片を超えるため、報告までしばらく時間をいただきたい。

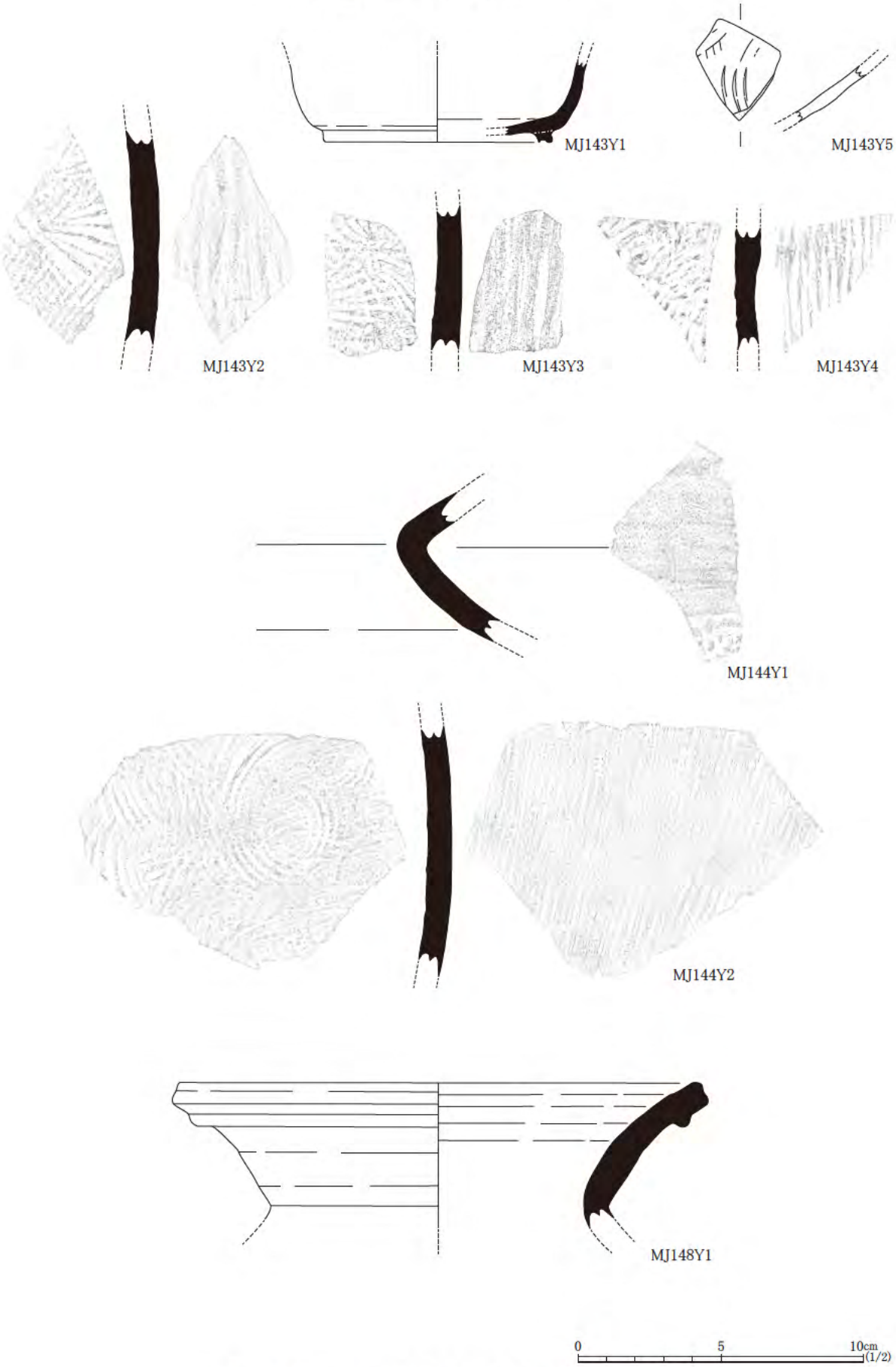


図 22　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器実測図⑥

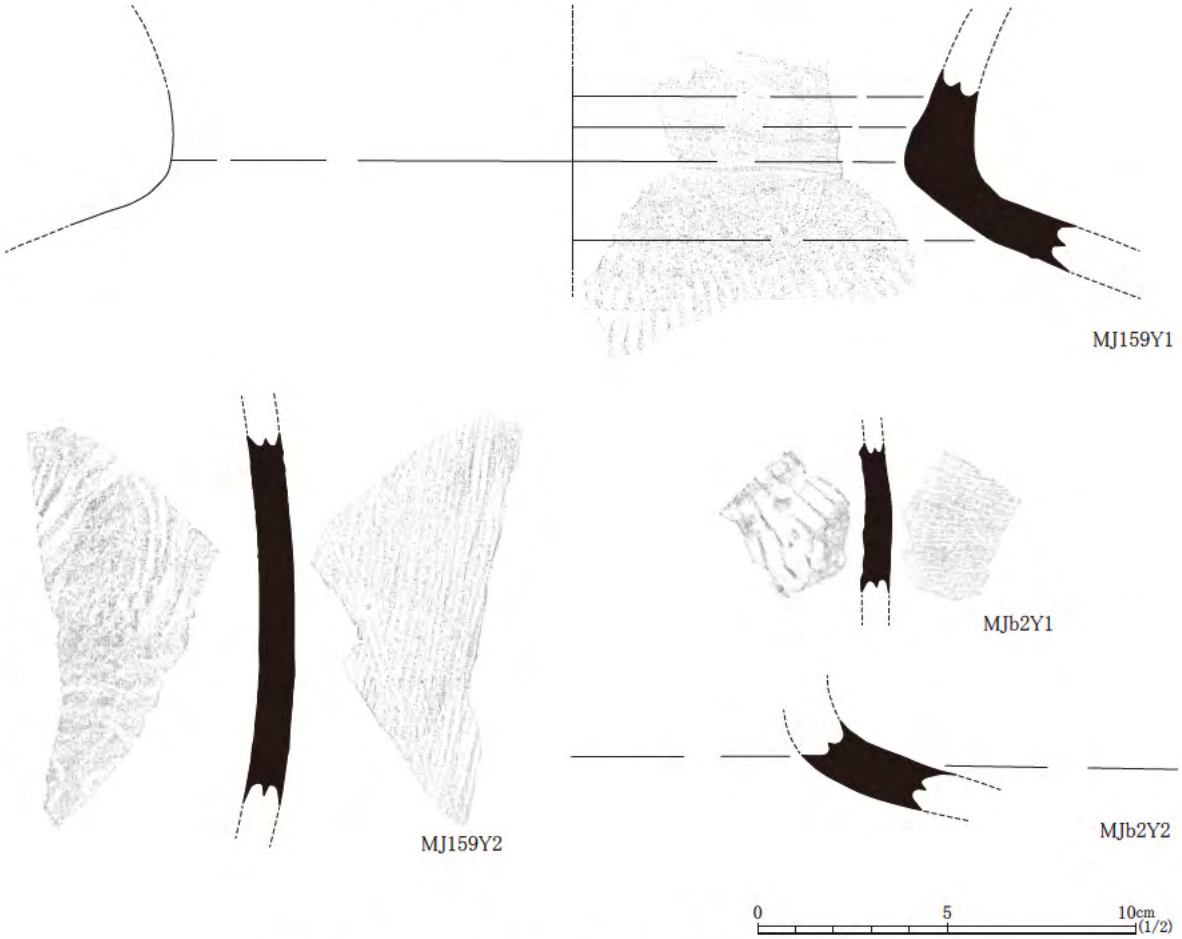


図 23　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器実測図⑦

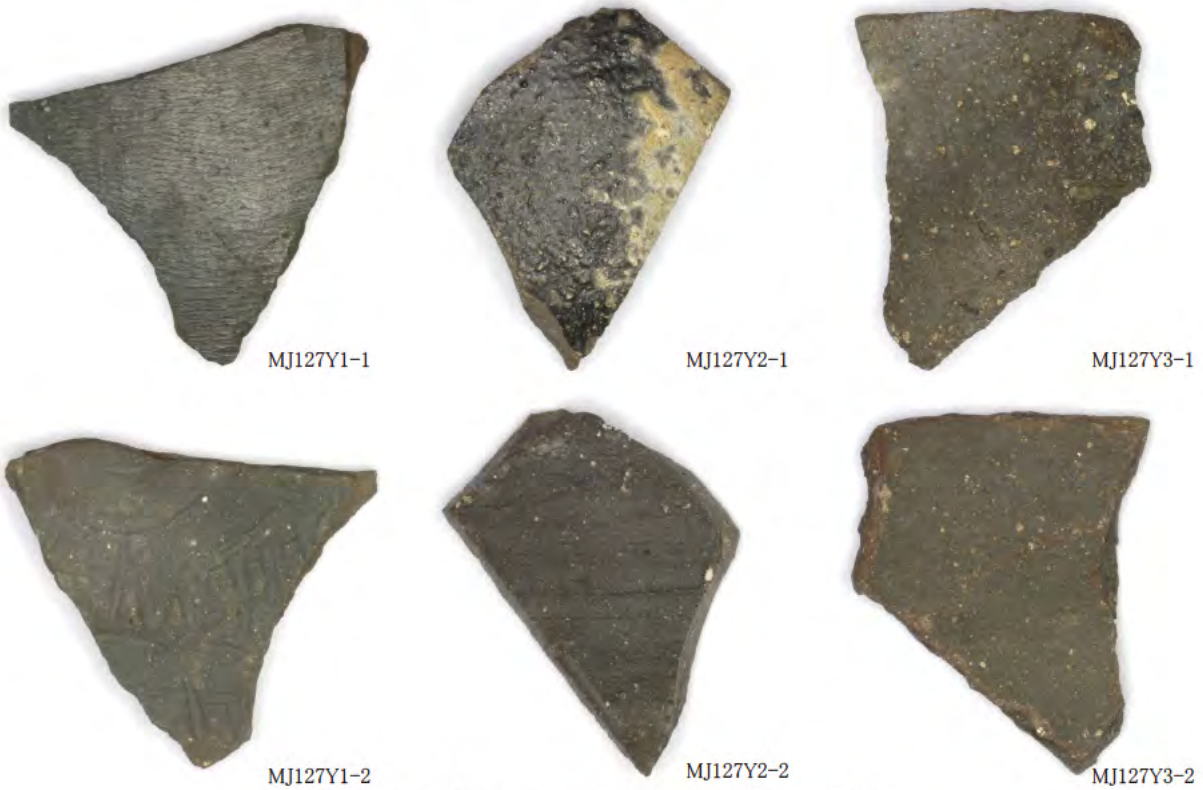


写真 16　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器①

写真 17　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器②

MJ140Y3-1

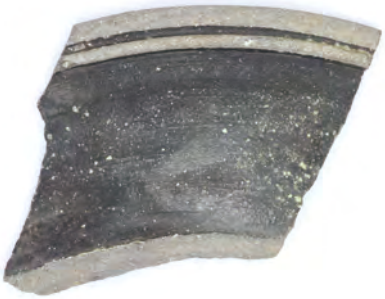
MJ140Y4-1

MJ140Y5-1

MJ140Y3-2

MJ140Y4-2

MJ140Y5-2

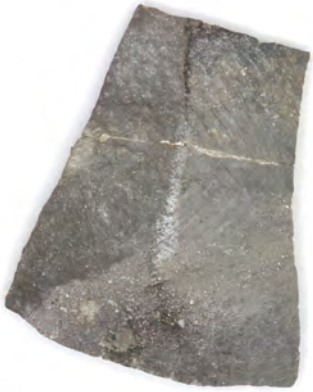

MJ141Y1

MJ141Y2

MJ141Y3

MJ141Y4-1

MJ141Y5-1


MJ141Y6-1

MJ141Y4-2

MJ141Y5-2

MJ141Y6-2

写真 18　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器③

MJ142Y1-1

MJ142Y2-1

MJ142Y3-1

MJ142Y1-2

MJ142Y2-2

MJ142Y3-2

MJ142Y4-1

MJ142Y5-1

MJ142Y6

MJ142Y4-2

MJ142Y5-2

MJ142Y7

MJ143Y1

MJ143Y2-1

MJ143Y3-1

MJ143Y5

MJ143Y2-2

MJ143Y3-2

写真 19　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器④

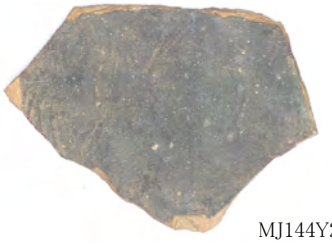
MJ143Y4-1

MJ144Y1-1

MJ144Y2-1

MJ143Y4-2

MJ144Y1-2


MJ144Y2-2

MJ148Y1-1

MJ159Y1-1

MJ159Y2-1

MJ148Y1-2

MJ159Y1-2

MJ159Y2-2

MJb2Y1-1

MJb2Y1-2

MJb2Y2

写真 20　見島ジーコンボ古墳群西部域出土土器⑤

表9 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量（cm） ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ127 Y1	第127号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/)	密	良好	遺物袋注記「S-3」。外面には目の細かな平行叩きが施され、内面には同心円当て具痕が残る。
MJ127 Y2	第127号墳	須恵器 壺	肩部		①暗灰黄色(N3/) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密	良好	遺物袋注記「S-3」。内面は回転ナデが施される。外面は自然釉と灰が被るため調整が観察できない。
MJ127 Y3	第127号墳	須恵器 壺甕類	底部か		①暗灰色(N3/) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密	やや不良	遺物袋注記「S-3」。外面はケズリ気味のナデが施される。内面はナデを施すが、強い指押さえ痕が残る。
MJ134 Y2	第134号墳	須恵器 壺	口縁～ 体部	①外端(19.0) ①内端(17.1) 腹部径(23.2) ※ひずみ大	①灰色(7.5Y5/1)～ 暗灰色(N3/) 灰：にぶい黄色(2.5Y6/4) ②灰色(N5/)	密	良好	第133号墳出土1片（遺物袋注記「S□J」）と接合。遺物袋注記「S33 内-O-2　1-1-1」。球体の体部に短い口縁が付く 。口縁内外面とも 回転ナデを施し、端部は面を取る。体部外面には縦方向の平行叩きを行い、部分的にハケを施す。内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。体部外面には灰と自然釉が被るが、体部下位から口縁方向に流れている。体部外面下位には坏と見られる口縁端部が溶着し、打ち欠かれた状態で残る。
MJ134 Y3	第134号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N5/) ②灰色(5Y5/1)	密	良好	遺物袋注記「S33 内-O-2　1-1-1」。外面は右上がりの平行叩き後部分的にカキ目が施される。内面には同心円当て具痕が明瞭に残る。
MJ134 Y4	第134号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(N5/)	密	良好	遺物袋注記「S33 内-O-2　1-1-1」。肩部外面は格子目タタキが施されるが、原体は小さく 約3cm角と見られる。内面の同心円当て具痕はナデ消しが図られている。
MJ134 Y5	第134号墳	須恵器 甕	体部		①②暗灰色(N3/)	密	良好	遺物袋注記「S33 内-O-2　1-1-1」。器壁が厚い個体で、大甕の体部片と見られる。外面は左上がりおよび縦方向の平行叩きが施される。内面の横方向平行当て具痕はナデ消しが図られている。
MJ140 Y1	第140号墳	須恵器 坏	口縁部		①灰色(7.5Y6/1) ～灰色(7.5Y6/1) ②灰色(7.5Y6/1)	密	良好	遺物袋注記「S-6↘」。器壁の厚い個体で、口縁端部を 丸く 収める。外面上位および内面に回転ナデ調整を施す。
MJ140 Y2	第140号墳	須恵器 横瓶か	底～体部		①②灰色(N6/) 灰：灰白色(2.5GY8/1)	密	良好	第136号墳出土1片（遺物袋注記「S-2」）と接合。遺物袋注記「S-6↘」。形状から横瓶の底～体部片と見られる。外面には不定方向の平行叩きが密に施されるが、ナデ消しが図られている。内面には密に当てられた平行当て具痕が残る。内面に灰が多く 被る。
MJ140 Y3	第140号墳	須恵器 長頸壺か	肩部		①灰色(N4/) ②暗青灰色(5PB4/1)	密	良好	遺物袋注記「S-6↘」。算盤珠の体部をも つ長頸壺の肩部片と見られる。外面には右上がりの平行叩き後カキ目が施される。内面には左上がりの平行当て具痕が明瞭に残る。
MJ140 Y4	第140号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(5Y4/1)	密	良好	遺物袋注記「S-6↘」。器壁の厚い個体で、大甕の体部と見られる。外面は不定方向に平行叩きが施される。内面には同心円と平行2種の当て具痕が見られるが、ナデ消しが図られている。
MJ140 Y5	第140号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y6/1) ②灰白色(5Y7/1)	密	良好	遺物袋注記「S-6↘」。器壁の厚い個体で、大甕の体部と見られる。外面は左上がりの格子目叩きが施される。内面には同心円当て具痕が残るが、当て具に1条の亀裂が見られる。
MJ141 Y1	第141号墳	須恵器 甕	口縁～頸部	①(22.0)	①黒色(N2/) ②灰色(N5/)	密	良好	屈曲する頸部から口縁が大きく 開く 。口縁端部は鈍く 面を取る。口縁外端下位に突帯を1条巡らせる外面口縁中位、内面頸部に自然釉がかかる。
MJ141 Y2	第141号墳	須恵器 甕	口縁部		①②灰色(5Y4/1)	密	やや不良	ゆるやかに外反する甕の口縁部片で、口縁端部は面を取る。外面口縁下に断面三角形の小ぶりな突帯を1条巡らせる。内面と外面上位は回転ナデが施される。外面下位は、幅1.3cmの板状工具による回転ナデが施される。
MJ141 Y3	第141号墳	須恵器 壺甕類	口縁部		①暗灰色(N3/) ②灰色(N5/)	密	良好	小片のため径を復元していないが、およそ32～34cmと見られる。やや内湾して立ち上がる口縁部片で、両端部をわずかに肥厚させる。端部はナデにより凹む。全面回転ナデ調整。
MJ141 Y4	第141号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(5Y5/1) ②暗灰色(N3/)	密	良好	外面は縦方向の平行叩きが施される。内面には車輪文当て具痕が残る。全体的に風化が著しい。
MJ141 Y5	第141号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N5/)	密	良好	外面は右上がりの平行叩きが施される。内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。外面は一部火膨れにより破裂している。
MJ141 Y6	第141号墳	須恵器 壺甕類	底～体部か		①灰色(N5/～N4/) ②灰色(N5/)	密	良好	内面に灰を被っていることから、底部付近の破片と見られる。外面は不定方向の平行叩き後ナデが施される。内面は平行当て具または同心円当て具の外縁と見られる痕跡が残る。
MJ142 Y1	第142号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N6/) ②灰白色(5Y7/1)	密	良好	遺物袋注記「S-8 H-3」。器壁の厚い個体で、大甕の体部片と見られる。外面の平行叩き痕はカキ目およびナデでほぼ消滅している。内面の同心円当て具痕も 丁寧にナデ消されている。
MJ142 Y2	第142号墳	須恵器 甕	体部		①②灰白色(5Y7/1)	密	良好	遺物袋注記「S-8 H-3」。外面は平行当叩き後カキ目が施される。内面の同心円当て具痕には亀裂が1条見られる。MJ140Y5と同一個体と見られる。
MJ142 Y3	第142号墳	須恵器 甕	体部		①黒色(N2/) ②灰色(N5/)	密	良好	遺物袋注記「S-8 H-3」。外面に平行叩き痕、内面に同心円当て具痕が残る。
MJ142 Y4	第142号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/) ②灰色(7.5Y5/1)	精緻	良好	遺物袋注記「S-8 H-3」。外面に格子目叩きが施される。内面には同心円と平行当て具が併用されている。
MJ142 Y5	第142号墳	須恵器 壺甕類	底～体部		①灰色(5Y5/1)～ 黒色(5Y2/1) ②灰色(N4/)	密	不良	遺物袋注記「S-8 H-3」。体部外面は縦方向の平行叩きが施されるが、内面は当て具ではなく 指で押さえる。底部は内外面とも ナデ調整。
MJ142 Y6	第142号墳	須恵器 長頸壺	頸～肩部		①灰色(5Y5/1) 自然釉：暗オリーブ灰色 (5GY4/1)	密	良好	遺物袋注記「S-8 H-3」。球形の体部を 有する長頸壺の頸～肩部片と見られる。全面回転ナデ調整が施され、外面には自然釉がかかる。
MJ142 Y7	第142号墳	土師器 高台付坏	底部	②高台径(7.0) ③△0.7	①②にぶい橙色 (7.5YR7/4) 塗彩：明赤褐色(2.5YR5/6)	密	良好	遺物袋注記「S-8 H-3」。小ぶりで外方に張り出す高台が付く 。内面は剥離が著しいが、わずかに赤色塗彩が見られる。

法量( )は復元値　△は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	焼成	備考
MJ143 Y1	第143号墳	須恵器 高台付坏	底～体部	②高台径外端(8.0) ③△2.9	①②灰白色(5Y7/1～7/2)	密	良好	遺物袋注記「S-5 内底 J(?)」。底部の外端付近に断面方形で小ぶりの高台が付く。高台端部は凹み、外端と内端で接地する。全面回転ナデ調整。体部は直立気味に立ち上がっており、口縁は外反するよう である。器壁が薄く 精巧なつくりである。
MJ143 Y2	第143号墳	須恵器 甕	体部		①暗赤褐色(2.5YR3/3) ②暗褐色(10YR3/4) 断面:にぶい赤褐色 (2.5YR5/4)	密	やや不良	遺物袋注記「S-5 内底 J(?)」。外面は平行叩きが施される。内面は車輪文当て具痕が残る。車輪文はMJ124H8に類似する。
MJ143 Y3	第143号墳	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰黄褐色(10YR4/2) 断面:にぶい赤褐色 (2.5YR4/3)	密	やや不良	遺物袋注記「S-5 内底 J(?)」。外面は平行叩きが施され、灰が被る。内面は車輪文当て具痕が残る。MJ143Y2の当て具痕より目が細かく、別個体として掲載するが、これは収縮の差で同一個体という 可能性がある。焼成状態も 類似する。
MJ143 Y4	第143号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/)～暗灰色(N3/) ②灰色(5Y5/1)	密	良好	遺物袋注記「S-5 内底 J(?)」。外面は平行叩きが施され、内面は同心円当て具痕が明瞭に残る。
MJ143 Y5	第143号墳	土師器 坏	体部		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ～にぶい褐色(7.5YR5/4) ②赤褐色 (5YR4/6)	密	良好	遺物袋注記「S-5 内底 J(?)」。外面は風化が著しい。内面はミガキが施され、放射線状の暗文が見られる。
MJ144 Y1	第144号墳	須恵器 甕	頸～肩部		①黒色(N2/) 灰:黄褐色(2.5Y5/4) ②暗灰色(N3/)	密	良好	体部から「く」の字状に頸部が屈曲する。頸部外面は平行叩きが施されるが、ほぼナデ消されている。他は回転ナデが施される。頸部外面に灰が多く 被る。
MJ144 Y2	第144号墳	須恵器 甕	体部		①②灰色(N4/) 断面:にぶい褐色 (7.5YR5/4)	密	不良	焼成不良品。外面は平行叩き後カキ目状のハケが施される。内面の同心円当て具痕は粗く ナデ消されている。
MJ148 Y1	第148号墳	須恵器 甕	口縁～頸部	①(17.6)	①黒色(7.5YR2/1) ②褐灰色(7.55YR4/1) 断面:赤褐色(5YR4/6)	密	不良	遺物袋注記「S 12 J(?)」。焼成不良の甕口縁部片。口縁端部はナデにより凹む。外端下位に断面薄鉢形の突帯を1条巡らせる。内外面とも 回転ナデが施される。
MJ159 Y1	第159号墳	須恵器 甕	頸～肩部	頸部径(21.2)	①灰色(N5/) 自然釉:黒色(N1.5/) ②灰色(N4/)	密	良好	遺物袋注記「159 S-2(？消えかけ)」。器壁の厚い甕の頸～肩部片。肩部内面は平行当て具痕が残るが、外面は自然釉が被るため叩き痕が不明瞭。格子目叩きか。
MJ159 Y2	第159号墳	須恵器 甕	体部		①灰色(N4/)～黒色(N2/) ②灰色(N4/)	密	良好	遺物袋注記「159 S-2(？消えかけ)」。外面は右上がりの肥厚叩きが施される。内面の同心円当て具痕は粗く ナデ消しが施される。
MJb2 Y1	番外2号墳	須恵器 壺甕類	体部		①②灰色(N4/)	密	良好	遺物袋注記「S-2 M(？)-3」。外面は平行叩き後カキ目が施される。内面は同心円当て具痕が残る。
MJb2 Y2	番外2号墳	須恵器 甕	肩部		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密	良好	遺物袋注記「S-2 M(？)-3」。小片であるが甕の肩部片と見られる。内外面とも 回転ナデが施される。

【参考文献】

青島啓(2007)『陶窯跡群Ⅱ』山口市埋蔵文化財調査報告第98集，山口市教育委員会文化財保護課(編)，山口

青島啓ほか(2011)『陶窯跡群Ⅰ』山口市埋蔵文化財調査報告第70集，山口市教育委員会文化財保護課(編)，山口

池田善文(1979)『長門末原窯跡　第1次調査報告』美東町文化財調査報告第2集，美東町教育委員会(編)，美東(山口)

池田善文(1993)「土器の基準資料と編年」，池田善文(編)『長登銅山Ⅱ』美東町文化財調査報告第5集，美祢(山口)

池田善文(2004)「集成　須恵器」，山口県(編)『山口県史』資料編考古2，山口

市来真澄(2011)「見島ジーコンボ古墳群の構築時期と石室について」，海の古墳を考える会(編)『海の古墳を考えるⅠ－群集墳と海人集団－発表要旨』，北九州(福岡)

小田富士雄(1975)「萩の埋蔵文化財」，史都萩を愛する会(編)『史都萩』第32号，萩(山口)

小野忠熙(1961)「見島古墳群」，小野忠熙・山口県教育委員会(編)『山口県文化財概要』第4集，山口

小野忠熙(1985)『山口県の考古学』，吉川弘文館，東京

小野忠熙(1986)『日本の古代遺跡30　山口』，保育社，大阪

利部修(2008)『出羽の古代土器』，同成社，東京

金田善敬(1996)「古墳時代後期における鍛冶集団の動向－大和地方を中心に－」，考古学研究会編集委員会(編)『考古学研究』通巻170号，岡山

國平建三(1983)「第Ⅱ部　集落址出土土器の編年と背景　Ⅰ相模地域」，神奈川考古同人会(編)『神奈川考古　第14号　奈良・平安時代土器の諸問題』，横浜(神奈川)

国守進「中世の見島」，萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻，萩(山口)

古代の土器研究会(1992)『古代の土器1　都城の土器集成』，古代の土器研究会資料集編集委員会(編)，京都

古代の土器研究会(1993)『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』, 古代の土器研究会資料集編集委員会(編), 京都

小林善也(2008)「須恵器出現期以降の古墳時代集落出土の土器編年試論－周防西部地域－」, 山口考古学フォーラム(編)『古墳時代集落遺跡出土の須恵器・土師器』, 山口

桑原邦彦・池田善文(1981)「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」, 周陽考古学研究所(編)『山口県の土師器・須恵器－編年と集成－』周陽考古学研究所報3, 光(山口)

斎藤忠・小野忠熙(1964)「考古の部」, 山口県教育委員会(編)『見島総合学術調査報告』, 山口

俵教雄(1959)「第二部 沿革 第四編 古代」, 萩市誌編纂委員会(編)『萩市誌』, 萩(山口)

都出比呂志(1989)『日本農耕社会の成立過程』, 岩波書店, 東京

仲田茂司(1989)「陸奥国における奈良時代土師器の地域性」, 東北史学会(編)『歴史』第72輯, 仙台(宮城)

中村徹也ほか(1980)『末原窯跡』山口県埋蔵文化財調査報告第54集, 山口県教育委員会文化課(編), 山口

中村徹也(1983a)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(上)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第45号, 萩(山口)

中村徹也(1983b)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(下)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第46号, 萩(山口)

中村徹也・国守進(1989)「原始・古代の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)

乗安和二三(1983)『見島ジーコンボ古墳群』, 山口県教育委員会(編), 山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口

乗安和二三(2000)「見島ジーコンボ古墳群」, 山口県(編)『山口県史 資料編 考古1』, 山口

長谷川厚(1992)「相模地域の鬼高式土器」, 江坂輝彌ほか(編)『月刊 考古学ジャーナル』NO. 342, ニューサイエンス社, 東京

長谷川道隆(1975)「青磁にかくされた歴史－見島出土の唐末五代越州窯青磁片－」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第33号, 萩(山口)

匹田直・弘津史文・小川五郎・三宅宗悦・姉川従義(1927)「阿武郡見島文化の研究」, 山高郷土史研究会(編)『山高郷土史研究会考古学研究報告書－台覧紀年号－』, 山口

弘津史文(1927)『周防国熊毛群上代遺跡遺物発見地調査報告書』, 山口

弘津史文(1930)『防長原史時代資料』, 山口

松下孝幸・分部哲秋・佐熊正史(1983)「山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口県教育委員会(編)『見島ジーコンボ古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口

松下孝幸(1985)「山口県見島ジーコンボ古墳群の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』, 山口

松下孝幸・松下真実(2012)「山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の人骨」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『見島ジーコンボ古墳群 第151号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

松下孝幸・松下真実(2013)「山口県萩市ジーコンボ古墳群第155墳出土の人骨」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『見島ジーコンボ古墳群 第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書3, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

松下真実・松下孝幸(2014)「山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口考古学会(編)『山口考古』第34号山本一朗先生追悼号, 防府(山口)

三輪善之助(1923)「長門見島の遺跡」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第14巻第3号, 東京

村田晃一(2000)「奈良・飛鳥時代の陸奥北辺－移民の時代－」, 宮城県考古学会(編)『宮城考古学』第2号, 仙台(宮城)

山本博(1935)「長門国三島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物－特に銙帯について－」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第25巻第8号, 東京

横山成己(2011)『見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書1, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己・松浦暢昌(2012)『見島ジーコンボ古墳群 第151号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2, 山口大学埋蔵文化

財資料館(編), 山口

横山成己(2012)「見島ジーコンボ古墳群「俘囚墓説」小考」,「やまぐち学」推進プロジェクト(編)『やまぐち学の構築』第8号,　山口

横山成己(2013)『見島ジーコンボ古墳群　第152・153・155・156号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書3, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己(2015)『見島ジーコンボ古墳群　第128・137号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書4, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

横山成己・川島尚宗(2016)『見島ジーコンボ古墳群第124号墳・潮待貝塚出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書5,山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口

吉瀬勝康・大林達夫(2000)『敷山・末田須恵器窯跡調査報告－防府市の須恵器窯の発掘調査及び表採資料の調査報告－』防府市埋蔵文化財調査報告0001, 防府市教育委員会(編), 防府(山口)

渡辺一雄ほか(1983)『生産遺跡分布調査報告書』山口県埋蔵文化財調査報告書第74集, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

付篇

山口県萩市ジーコンボ古墳群123・124・142号墳出土の人骨

松下孝幸*・松下真実**

【キーワード】:山口県、古代人骨、保存不良

はじめに

ジーコンボ古墳群は萩市見島字片尻(381-1、387-1)に所在する。見島は萩市の北北西約46.3kmの日本海上に浮かぶ孤島で、その大きさは東西は約2.5km、南北約4.6km、面積約7.8km^{2}である。ジーコンボ古墳群は島の南東端にある礫浜堤に形成されている積石塚である。ジーコンボ古墳群の発掘調査は古くは1926(大正15)年に山口高等学校の歴史教室の人々によっておこなわれている(山口県教委、1964)。

山口県教育委員会は1960(昭和35)年度から3ヶ年に亘って見島総合学術調査を実施したが、ジーコンボ古墳群の発掘調査もこの時おこなわれ、1961(昭和36)年度には10基(123号墳、124号墳、128号墳、137号墳、151号墳、152号墳、153号墳、154号墳、155号墳、156号墳)、1962(昭和37)年度には8基(1号墳、44号墳、56号墳、57号墳、77号墳、81号墳、105号墳、116号墳)の発掘調査がおこなわれている。このうち1961年度に発掘調査がおこなわれた123号墳と155号墳出土人骨および151号墳から出土した人骨の一部についてはすでに報告した(松下、1985、松下・他、2012)。123号墳からは1体分の、155号墳からは3体分の人骨(歯)が、151号墳からは5体分の遊離歯が検出されている。また、1982(昭和57)年7月には山口県教育委員会が3基の墳墓(16号墳、72号墳、113号墳)の発掘調査を実施しており、3基からそれぞれ人骨が検出された。16号墳と113号墳からは1体分であったが、72号墳からは3体分が出土した(松下・他、1983b)。

2013(平成25)年には新たにみつかった155号墳出土人骨について(松下・他、2013)、2014(平成26)年には萩博物館に保管されていた1号墳、35号墳、44号墳、56号墳、77号墳、81号墳、105号墳、116号墳、123号墳、155号墳について報告した(松下・他、2014)。

山口県内での奈良時代人骨は、ジーコンボ古墳群人骨以外には存在しない。平安時代人骨は、防府市の周防国府跡(松下、1984)、周東町の上久宗遺跡(松下、1995)の例があるが、後者は火葬骨である。

熊本市では、新幹線工事と区画整理事業に伴って、熊本駅周辺での発掘調査が進み、二本木遺跡群から平安時代に属する人骨が相次いで検出されている。これほどまとまって古代人骨が出土することは珍しいが、それは発掘調査範囲が広域に亘っていることや、官衙遺構が検出されるなど、古代においてこの地域が都市機能の中心地であったために厚葬される人たちが比較的多かったことによるものであろう。

見島は朝鮮半島を意識した国境の島として、重要な地理的位置にあり、それなりの施設や人的措置がとられたものと思われる。小さな離島に多数の墳墓群が群集することはこうした特異要因と関係があると考えるのが自然であろう。どのような人たちがこの墳墓群に埋葬されたかを明らかにすることはこのような課題を解決する手がかりになると考えられる。

以上のような視点から本墳墓群から出土した人骨の所見を報告してきたが、今回山口大学埋蔵文化財資料館から新たに、123号墳、124号墳、142号墳から出土した人骨がみつかったので、人骨所見を記載しておきたい。

図１．遺跡の位置（1/25,000）

(Fig.1 Location of the Mishima-Jikonbo tumuli, Hagi City, Yamaguchi Prefecture)

資料および所見

今回報告するのは、123号墳、124号墳、142号墳から出土した人骨で(表1)、これらの人骨を解剖学的に精査したが、いずれも1体分である。また、墳墓の築造時期は、考古学的所見から古代(飛鳥時代)と推測されており、人骨は古代に属する人骨と思われる。

表１　人骨一覧（Table 1. List of skeletons）

墳墓番号	骨　　種	性別	年齢
123号墓	不明	不明	不明
124号墓	大腿骨体片、上腕骨体片	不明	不明
142号墓	大腿骨体（右）	女性	不明

表2　ジーコンボ古墳群出土人骨一覧(Table 2. Number of materials)

墳墓番号	体数	参考文献
1号墳	２体分	参考文献：８
16号墳	１体分	参考文献：２
35号墳	１体分	参考文献：８
44号墳	１体分	参考文献：８
56号墳	１体分	参考文献：８
72号墳	３体分	参考文献：２
77号墳	１体分	参考文献：８
81号墳	２体分	参考文献：８
105号墳	３体分	参考文献：８
113号墳	１体分	参考文献：２
116号墳	１体分	参考文献：８
123号墳	１体分	参考文献：４，８，本文
124号墳	１体分	参考文献：本文
142号墳	１体分	参考文献：本文
151号墳	５体分	参考文献：６
155号墳	４体分	参考文献：４，７，８

１２３号墳出土人骨（性別・年齢不明）

123号墓から出土した人骨については、山口大学埋蔵文化財資料館保管の骨を1985年に報告したが、四肢長骨の骨片に過ぎず、性別・年齢も推定できなかった(松下、1985)。また、萩市博物館にも本墳出土人骨が保管されており、この人骨については、2014年に報告したが、骨片が少量残存していたに過ぎなかったので、性別・年齢や形質は明らかにすることができなかった(松下・他、2014)。今回の資料も脛骨体の一部とみられる骨片など四肢長骨の骨片で、大部分は骨種を同定することも性別・年齢を推測することもできなかった。

１２４号墳出土人骨（性別・年齢不明）

四肢長骨の破片と遊離歯１本が残存していた。前者は長さ6cmから7cmのやや大きめの骨片３点と小片２点である。これらは左右不明の大腿骨体片と上腕骨体片と思われる。また、遊離歯は歯冠の咬合面だけが残っており、側面は剥落して、歯根の先端も欠落しているが、おそらく下顎の右側大臼歯と思われる。咬合面には咬耗(Brocaの１度：咬耗がエナメル質のみ)が認められる。性別・年齢は不明である。

『見島総合学術調査報告』には、「歯牙と人骨の小断片は奥壁よりに、須恵器や土師器のような容器は入り口付近にまとめて収納してあった」と記載されている。なお、出土土器の考古学的所見から、本墳は7世紀後半に築造され、初葬を含めて少なくとも4回の埋葬があったと考えられている(横山、2016)。また、出土した須恵器は7世紀後半から9世紀前半の所産と推測されていることから、人骨もこの時期に属する人骨であろう。

１４２号墳出土人骨（女性・年齢不明）

右側大腿骨の骨体遠位部が残存していた。骨質はやや堅牢である。残存部分の長さは約9cmで、粗線の発達は弱く、骨体の径は小さい。中央部に近いところでの計測値は、骨体中央矢状径が26mm(右)、横径は25mm(右)で、骨体中央断面示数は104.00(右)となり、粗線や骨体両側面の後方への延伸は弱い。また、骨体中央周は81mm(右)で、骨体は細い。骨体の径が小さいことから、女性大腿骨と推測したが、年齢は不明である。

要　約

山口大学埋蔵文化財資料館に所蔵されているジーコンボ古墳群123・124・142号墳から出土した人骨について、解剖学的に精査し、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

1. 3基の墳墓から出土したとして保管されていたのはいずれも成人の四肢骨片のみで、すべて1体分である。
2. 123号墳出土人骨は四肢長骨の骨片で、性別・年齢は不明である。
3. 124号墳出土人骨は、大腿骨体片と上腕骨体片と思われ、性別・年齢は不明である。
4. 142号墳出土人骨は、右側大腿骨の骨体遠位部で、骨体は細く、粗線や骨体両側面の後方への発達も弱いことから、女性大腿骨と思われる。
5. ジーコンボ古墳群の研究が山口大学埋蔵文化財資料館で精力的に進められており、次第にその様相が明らかになりつつある。人骨の保存状態はかならずしも良好なものではないが、人骨の形質的特徴と考古学的成果を総合的に検討し、今後もこの墳墓を築造した人々の実像解明に努力したい。

　なお、ジーコンボ古墳群から出土した人骨のうち所見を報告したものは表2に示すとおり、14基の墳墓から出土した人骨である。123号墳分については本報告を含めて3回、155号墳分についても3回報告したが、123号墳出土分は1体分、155号墳分は4体分(男性1、女性1、幼小児2)であった。また、この墳墓群に埋葬された被葬者像については、山口考古第34号の報告書に記載している(松下・他、2014)。

謝辞

≪擱筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた山口大学埋蔵文化財資料館の皆様に感謝致します。≫

≪参考文献≫

1. 松下孝幸・他、1983a山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告70):147-148.
2. 松下孝幸・他、1983b:山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群(山口県埋蔵文化財調査報告73):32-36.
3. 松下孝幸・他、1984:防府市周防国府跡出土の平安時代人骨。防府市文化財調査年報Ⅵ:535-544.
4. 松下孝幸、1985:山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨－山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料－。山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ:83-90.
5. 松下孝幸、1995b:山口県周東町上久宗遺跡出土の火葬骨。山口県埋蔵文化財調査報告第174集:25-30.
6. 松下孝幸、他、2012:山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の人骨。見島ジーコンボ古墳群第151号墳出土資料調査報告(館蔵資料調査研究報告書2):47-52.
7. 松下孝幸・他、2013:山口県萩市見島ジーコンボ古墳群第155号墳出土の人骨。三島ジーコンボ古墳群　第152・153・155・156号墳出土資料調査報告(館蔵資料調査研究報告書3):55-58.
8. 松下真実・他、2014:山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。山口考古第34号:131-150.
9. 山口県教育委員会、1964:見島総合学術調査報告
10. 横山成己、2016:見島ジーコンボ古墳群第124号墳出土資料調査報告。見島ジーコンボ古墳群第124号墳・潮待貝塚出土資料調査報告(館蔵資料調査研究報告書5):1-28. 山口大学埋蔵文化財資料館

* Takayuki　MATSUSHITA、** Masami　MATSUSHITA

大腿骨（右）（The right Femur）
ジーコンボ古墳群 第142号墳（女性・年齢不明）
(The femur from the Jikonbo tumuli No,142, female unknown age)

四肢骨（The limb bones）
ジーコンボ古墳群 第124号墳（性別・年齢不明）
(The skeleton from the Jikonbo tumuli No,124, sex and age are unknown)

館蔵資料調査研究報告書6

見島ジーコンボ古墳群 第123号墳・第152号墳(再)・西部域
出土資料調査報告

平成29年3月31日

編集　山口大学埋蔵文化財資料館

発行　山口大学

〒753－8511　山口市吉田1677－1

印刷　(有)三共印刷

〒759－0204　宇部市大字妻崎開作1953－8